
愛しき人へ...

結城 カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しき人へ…

【Nコード】

N0724I

【作者名】

結城 カイン

【あらすじ】

宿禰凜一と恋愛をする同学年の水川青弥の視点で描きます。中途半端から始まりますが、これ以前は友人が書いたため、そちらは残念ながら載せられません。ノンケで恋愛経験の少ない優等生が、宿禰凜一とどういう恋物語を綴っていくのか…「one love」「GLORIA」と連動。

第一章 引力 1（前書き）

高校一年の水川青弥は、学年トップの優等生だが、なかなか心を打ち解けない慎重な性格。

人の目を引く、魅力的な同級生宿禰凜一に交際を求められ、一旦は断るが、自分も惹かれている事に気づき、二人は付き合う事となった。

純情な水川は、奔放な宿禰に警戒心をなかなか解けない。やっとキスまでは許したが、その先にいくことを拒み続ける水川。

そうして、ふたりは初めてのクリスマスを迎えた。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編は「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

で読めます。

第一章 引力 1

> i 5 1 8 3 — 2 7 3 <

昔、子供の頃、サンタクロースは存在するものだ、本気で思っていた。

クリスマスイヴの夜、絶対にこの目でサンタクロースを見てやるんだと寝ずの番をしていても、睡魔はすぐに襲ってくる。

母親が作った枕元の赤い毛糸の靴下をじっと見つめながら、おれは絵本で見たサンタクロースに胸をときめかせていた。ただプレゼントを欲しがったわけじゃない。

あの胸いっぱいにくくらんだ気持ち、それが一体何なのかを解き明かしたい…そう思ったからだ。

クリスマスの朝、しんと冷たい空気が広がる部屋。目覚めたおれは、枕元を見る。

毛糸の靴下にはこぼれる程のお菓子と、その脇に目的のおもちやが赤いリボンに飾られて置いてある。

喜びよりも、いつの間にか眠ってしまった自分を悔しがり、来年こそはと心に誓った。

小学4年の時、級友たちから聞かされたサンタクロースの正体は、胸のときめきを一気に消失させるものであった。家に帰って母に問いただすと、母親は困ったように首を傾げ、級友たちの言葉を肯定した。あの時の失望感は今でも忘れられない。

おれはあれから、心沸き踊るクリスマスを味わったことは一度もなかった。

しかし、今年のクリスマスは違う。

バカみたいに胸がざわついて仕方がない。
すべては宿禰凛一という男の所為だ。
大体…

おれが恋に浮かれる事自体がおかしいんだ。

今までだったら誰かを好きになっただけで、自分の首を絞めるような、苦しいわずらわしさしか感じたりしなかったのに、今のおれはどうだ。

リンの事を想うだけで、動悸が激しくなったり、顔が熱くなったり…
相手は同級生のしかも男だぞ？おれ、ホモだったのか…と、悩むより、リンがおれを好きだと言ってくれる事のほうが数百倍も上等だと判明するわけだ。

この事実は誤魔化しようもない。

何を言われたとしても、おれがリンを好きな気持ちはぶれないでいられる。

その思いすら尊いもののような気がする。

クリスマスイヴは朝からヨハネ寮の住人たちは大わらわで、休んでいる暇はない。

ホールの飾りつけや、イベントのリハーサルに、プレゼントやお菓子の調達。

おれも一応寮生だから、二年生の指導で色々やりこなさなきゃならない。

二年生の仕切り屋がのんびり屋の一年に檄を飛ばしているのを幸いに、こっそりホールから抜け出し、一休みしようとしていたところ、後ろから声をかける奴がいた。

「水川、準備終わった？」

こいつは…そうだ。リンのクラスの三上敏志だ。

「ああ、おれの分はね」

「ちょっと、話があるけど、いい？」

あまり話した事はないけれど、リンはこいつと親しいと聞いた事がある。

「いいよ」

「じゃあ、屋上に行こう」

話ってなんだろう。真冬に屋上なんか誰も来ない。寒いから当たり前。

「宿禰の事だけ…」

多分それしかおれと三上の接点はないだろうから、予想範囲内。

「水川は宿禰と仲がいいのか？」

「…うん」仲がいいと言われたら肯定するしかないだろうと思って頷いた。

「そうか…じゃあ、宿禰の言ってたかわいい子って…水川の事だったのか…」

「か、わいい？」

啞然となる。いや、リンは結構な割合でおれのことをかわいいと真顔で言うが、いつもの気楽ないいがかりだと思っていた。

…気分が悪いわけではないが、他の奴にそんな風に言ってるって…寒風に晒されているはずなのに、顔が火照ってくる。

「ああ、時々だけどすごく嬉しそうに話してくれるんだよ。うすうす男かな」とは思っていたけど…水川だったとは」

こうなると、バレて嬉しいのか、むなしいのかわからなくなる。やつぱり普通じゃないと思っっているんだろうか。俺は三上を複雑な表情で見つめた。

「いや、別に変な目で見てるんじゃないから。この学校じゃ男同士も珍しくないし、宿禰だったら男も女もほおっては置かないだろうし、気分悪くしないでおくれよ」俺、水川を怒らせたら宿禰になんて言われるか…あいつはすげーいい奴だし、なんつーかさあ、心から信頼できる友人なんだよ」

よっぽど変な顔をしたのだろうか、三上は必死で弁解する。その様

子がなんだか可笑しくて思わず拭き出した。

「怒ってないよ。三上はいい奴だってわかって、なんか安心した」

「良かった俺、宿禰は親友だと思っているから。おまえらのことも応援するよ」

「ありがとう」

「でも気をつけるよ、俺みたいな奴ばかりはいないぜ。おまえらのこと、影で酷い噂立ててる奴もいる」

「え？」

そんな話は初めて聞いた。もっともおれはそんなのも、こんなのも知らない話ばかりだったが。

「ちよつと前に宿禰の噂話が酷かっただろ？あれも酷い言いがかりだったけどさあ、俺、偶然聞いたの。おまえのクラスの…高橋つて奴がさあ、おまえと宿禰の事をめちやくちや言ってた現場にばったり…」

「高橋？」

「おまえ、期末で二位の高橋の点数めっちゃ離してトップだっただろ？だからだと思っけどさあ。歪んだ僻みって奴かね。一周回ったとしてもだ。何故におまえと宿禰の事を詰る意味が俺にはちっともわからん。腹立つたから殴ってやろうかと思っただけど、くだらない奴を殴ってもこっちの手が痛いだけ損だからな。でもおまえも気をつけるよ。ああいうクソム力つく奴は、どうでもいいことに意地になるからな」

「あ、ああ…なんかわかんないけど、気をつけるよ」

「それから…」

「ん？」

「宿禰の事頼むな。あいつ、なんでもかんでも悟っているみたいな顔してるけどさ、良く考えてみりゃ俺たちと同じ年数しか生きていない、ただの16のガキなんだよ。だから色々あると思うんだ。それを表に出してないだけでさ」

「…」

「なんてね、俺より水川の方がよくわかっていると思うんだが、なんかあったら俺も力になるよ。当てにはならんだろうけど」

「いや、嬉しいよ、三上。おれもこんなだからさ、あんまり他人に心を打ち明けるのは得意じゃないんだ。友人になつてくれると嬉しいよ」

「勿論さ。ふたりを繋ぐ伝書鳩にでもなつてあげようか。と、言つても毎日顔見合わせているから必要なしだな。今日も来るんだろ？宿禰。あいつ案内状貰つて喜んでた。水川が渡したんだな」

「うん、あげたの」と、ワザとかわいくゆつてみた。

それを聞いた三上は大仰に頭を抱え、「うらやましい、俺はきょうはひとりだよ、ユミちゃんにも会えない、よく神様俺にも御慈悲を」と、曇つた冬空に向かって叫んでいた。

夕方になり、俺は玄関ホールの待合室でリンを待つ。

和風旅館の玄関みたいな木の格子の向こうに、リンが映るのを思い浮かべながら、先程の三上の言葉を反芻した。

「親友」「心から信頼しあえる友人」

おれはリンとはそういう関係にはなれなかった。もしそういう関係だったら……こんな胸のときめきも少しの切なさも感じる事はなかったのだろう。

どっちが良かったなんてわからない。

おれはリンに惹かれてしまっているのだから。

もうリセットして初めからやり直してなんてできやしない。

冬至は一昨日だった気がする。瞬く間に陽は落ちる。

ロビーの灯りが灯される頃、硝子の向こうにリンの姿が見えた。

おれは飛び跳ねるように立ち上がり、彼を迎えた。

玄関の引き戸を開けたリンは俺が待ち構えているのを見て、驚いたように少し仰け反った。

が、すぐになつこりと微笑むと「ご招待ありがと、ミナ」と、胸に手を置き会釈する。

普通の輩がやっても様にならないだろうに、リンがやると自然だ。全く嫌味がない。

しかし…なんて奴だろう。

黒のトレンチコートも中に見える臙脂のジャケットも光沢のある黒ズボンも、リンの為にあつらえたみたいに極まっている。

思わず「モデルみたいだ。かつこいい」と呟くと、リンは苦笑する。

その顔にぱーっとなる自分に呆れた。俺はなんて男に惚れているのだろう。

同じ歳なのにこの貫禄と言うか…恋人としては相手がかっこいいのは喜ばしい事かもしれないが、同じ男としては…「自信喪失だ」と、愚痴ると、リンは鼻で笑い「ミテクレだけ見て無くすような自信は、初めから無い方がマシだね」と、言う。

「…」

そりゃそうだがね。それは、自信のある奴の驕りで、おれみたいな世間一般の男子には、おまえはすべてにおいて、癪に障る奴なんだよ。

多分全くわかっていないだろうけど…

荷物を置きに俺の部屋へ案内した。

部屋に入りふたりきりになると、リンはおれにクリスマスのプレゼントをくれた。

スワンスタビロの水彩色鉛筆だ。リンの亡くなったお姉さんのも

のらしい。

そんな大事なものを、と思うが、使ってくれたら嬉しいと言われ、ありがたくいただく事にした。

実は結構欲しかった画材で、値段的に躊躇していたので、とても嬉しかった。と、いうよりおれの欲しかったものが何故わかったんだろうという疑問と、別な心配のために、喜びの表現としてはかなり乏しいものになったことは否めまい。

心配は…リンへのプレゼントだった。

正直なにも考えていないわけではない。と、いうかめちやくちや考えて考えて…考えた末に買った物は、あまりにもスタンダードな「毛糸の手袋」という代物で、おれは自分のセンスの無さにリンにあげるのが恥ずかしくなってしまったのだ。

しかも、リンからはこの上ないプレゼントを貰ったにも関わらずだ。

…出そうか出すまいか迷った挙句、恋人からのお返しは何も無いではあんまりだと思い、俺はリンの目の前にリボンがけの袋を差し出した。

バカにされるのも覚悟しつつ渡したら、リンは思いもよらぬほどに喜んでくれた。

おれはあまりにも嬉しくて、リンのキスの催促に、自分からしたいと申し出た程だ。

正直おれは自分からリンにキスをしたり、求めたりしたことは一度もない。

リンとするのだって最初のキスが、信じられないくらいに激しかったから、おれはあれが当たり前前だと思ったら、自分が節操が無さ過ぎるように気がして、その後はやたらと嫌がって見せたけど、本当は嬉しいんだ。

好きな相手と身体を寄せ合ったり、手を繋いだり、お互いの呼吸の音や、唇の感触を感じるのがこんなに心踊るものとは、想像でき

なかった。

リンがおれを抱きしめる前に、おれはリンの両頬に指を添え、顔を上げながらリンの口唇に触れる。震えているのを気づかれる前に口を開け、舌を入れた。

リンの両腕がおれの背中を抱きしめる。

なんでこんなに…おれはこいつを好きなのだろう…音を立ててお互いの口の中を味わいながら、バカみたいに何度も思った。

根元先輩が現れて、おれ達の逢い引きも終わってしまったが、おれはその後もなんだかふわふわした気分のままで、寮祭のお祭り騒ぎ処じゃなくなってしまうていた。

寮祭が終わると、招待された寮生以外の生徒がぞろぞろと帰っていく。

リンも三上や先輩達に軽い挨拶まわりを終えると、おれに「またね」と、言い、靴を履いた。

おれはコートを羽織りながら玄関を出て行くリンの背中を見て、このままここで別れてしまうのが惜しくなり、リンを追いかけた。「今日はおれが誘ったんだから、リンを家まで送る」と、言うとりんは嬉しそうに笑った。

「あげた手袋はしないのか？」と、聞いたら「代わりがある」と、おれの手を握った。

お互いの冷たい指の一本一本が握り合わさっていく。お互いの手の平があったかくなり、おれ達は顔を見合わせて微笑んだ。

なんだろう…こんなひとつひとつのリンとの繋がりが、とても大切な…たまらなくいとおしいものに感じてしまうなんて。

おれは本当にどうかしてしまったらしい。

自然に口元が緩んだまま、しまりがなくなっている。
バカみたいに幸せだ。

会話は自然とさっきのパーティの話となる。

寮祭の出し物で、くじを引いたものは紙に書かれていることをやらなくちゃなくなったり、リンと三年の美間坂先輩で、アルゼンチンタンゴを踊る羽目になったのだけど、即興といいながらも、ふたりとも見事に踊りこなして拍手喝采だった。まあ、最後に転んでリンの上に美間坂さんの身体が乗っかって、危うくキスする寸前になったのはサービスだろう。ふたりともエンターティナーだ。

一見仲が悪そうに見えたリンと美間坂さんだけど、先輩の恋人の桐生さんに言わせれば、「同類相求むだよ。美間坂は宿禰のことを

相当気に入ってるよ」と、微笑んでいた。

美間坂さんと桐生さんは誰もがうらやむほどの絵になるカップルで、男同士の恋人といってもちつとも変に見えないし、あれだけ堂々としていると、偏見の目で見る方がやましい気になってくる。

「あの二人を見ていると、男同士の恋愛って成立するんだなあ……って、なんだか信じたくなる」と、言うところ「ミナは俺と恋愛しているって思っていないの？」と、問われた。

「……リンのこと、好きだけど……」それに嘘はない。

だけど「やっぱり、このまま行っているのかなあ……」と、口ごもってしまった。

おれがなんのことを言っているのか、多分リンはわかっている。

おれは、リンと身体を繋ぐことが怖いんだ。

過去のまずい経験から、男同士だからって事にしても、おれはセックスに対して臆病どころか、怖気づいてしまっている。

リンはうつすらとは気づいているんだろう。

今までだって無理強いはしていないし、おれを大事に扱ってくれている。だけど、普通の恋人だったら、お互いを欲しいと思うのは当たり前だし、身体を繋ぎたいって、求めるのは自然の成り行きだ。リンがおれを強く求めたら、おれは抵抗しないだろう。

だけど、おれはそれをちゃんとリンに与えてあげられるのか。リンはおれに失望しないだろうか。

リンは経験に不安はないだろう。相当に遊んでいるとは、自分で言ってた。それを罵る気は無い。

だからこそ、リンとのセックスが上手いのかどうか……おれには自信なんてものはない。

それでもやっぱりおれだって、リンが欲しいと思う。

リンのマンションに着くと、お別れしなきゃならない。

リンは泊まるように誘ってくれたけど、まだその勇気も自信もな

いんだ。そのくせこのまま離れてしまうのが寂しくて堪らない…と
思ったら、目頭が熱くなって、涙が込み上げてきた。

どうしようもない。

おれは弱虫だなあ…

リンはいつもの冗句でおれの涙を笑い飛ばしてくれたけど、おれ
は申し訳なくてたまらなかった。

なにひとつおまえの欲しがるものをあげられないなんて…

マンションのエントランス前で、寒いのも構わず、おれが帰るの
をずっと見送ってくれるリンの姿が嬉しいのと寂しいのと情けない
気持ちがごっちゃになって、おれは寮に帰り着くまで涙が止まらな
くなった。

寮に帰り着いたおれは、部屋にいた根元先輩にリンとの事を散々
からかわれた。

どこまで進んでいるのかをしつこく聞く先輩にしかたなく白状す
ると、呆れた顔で、「みなっちが宿禰とセックスしないって言うん
なら、僕が先にいただいちゃうよ」と、言われ、本気で先輩を殴り
たくなった。

次の日、おれは世田谷の実家に帰った。

5年前、狭いながらも庭付き一軒家を買った我が家は、30年口
ーンを返す為、メーカー企業の技術屋として必死で働く親父と、2
年程前、医療事務の資格を取ったという母親が近くの病院でパート
として働いている。

久しぶりのひとり息子の帰郷に、両親は大歓迎で迎えてくれるが、
それこそおれには心重たく、クリスマスなのに何故にすぎ焼き…と
思いつつ、食卓に付く。

「このお肉百グラム千円もしたのよ」と、声を上げながら、母親
は嬉しそうにおれの取り皿に、その高級な肉を分けてくれる。取り
皿が肉で溢れている…

父親は発泡酒を飲みながら、満足そうにおれを見て笑っている。

…いい人たちが過ぎて逆らえないんだが、ヨハネ学院を受験すると
決めた時はさすがに猛反対にあいまくった。二日間ほどプチ家出ま
でしたおかげで、なんとか許してもらえたけど、おれが寮にいるこ
とも未だに不本意らしい。

「お父さん、青弥は期末も学年一位だったのよね、すごいわ」

「じゃあ、将来は学者か医者だな。政治家になるには金がないから
無理だが、官僚っていう手もあるぞ。どっちにしても丁大は、間違
いなさそうだな」

「…そんなの勝手に決めないでよ。おれ、まだなんにも決めてない
し、大学だっておれが行きたいところに行くから」

「それはいいが…私立に行かせる余裕はないから、絶対国立だぞ」
「…」

こう言われると、絶対に丁大に行つてやるものか！と、思っわけ
だ。

「言われなくても青弥は、ちゃんと考えているわよね」と、母親

はまだ残っているおれの皿にまた肉を置く。

二階の自室に戻ってやっと一息ついた。

すき焼きの後、クリスマスケーキの登場でおれはもう吐きそうになるくらい満腹だ。

苦しさのあまりベッドに寝転んだ。腹だけじゃなく精神的にも満腹すぎて苦しい。

親の愛情とはああいうものなのか？それとも将来に対する子供への投資なのか？

俺はそういう現実から逃げ出したくて、目を瞑り、ひたすらにリンを思った。

何をしているのだろうか。声が聞きたい。

今日はアメリカからリンのお兄さんが帰ってくると言ってた。

リンのお兄さんって、カッコいいんだろ？

おれも兄弟が欲しかったかな…などと考えていたら、いつのまにか眠ってしまった。

目を開けたら、夜中の一時。

しまった、リンに電話をかけ損ねた。

どうしよう、もう今からじゃ遅すぎるよなあ…いくらなんでも午前一時だ。

携帯を持ったまま、じっと液晶画面を見つめた。

すると突然画面が光り、呼び出し音が鳴り始める。画面の文字に恋人の名前がある。

おれは急いで通話ボタンを押す。

『わ、取るのはや〜』と、リンの笑う声。

格好つかないおれはつい天邪鬼を披露する。

「たまたま…携帯を見てただけだよ。別にリンからの電話を待って

たわけじゃない」

『ふうん、じゃあ切ろうか』 いやらしそうに言っリンの勝ち誇った顔が浮かぶ。

おれは無言のまま向こうの出方を見る。

『ミナの頑固さに免じて俺の負けにしといてやるからさあ。今何してるの?』

「え…勉強」してないけど。

『おまえクリスマスの時ぐらい頭休めろ。ますます目が悪くなるからな』

「もう遅いつて。それよりリンは何してるの?お兄さんが帰ってるんだろ?」

『うん、空港まで向かえに行っただけど、飛行機が遅れてさあ。

そのまま新宿の。。ホテルに泊まることになったの。しかもクリスマスで満員、スイートがひとつだけ開いてたんでそこに泊まることになったんだよ。なんで兄貴とスイートなんぞに泊まらなきゃなんねえわけ?ミナとただけとさあ…』

「バカ、おまえとスイートなんか泊まんないよ。高校生のくせにそんな高いホテルなんか…」

スイートどころかそんな高いホテルに泊まったことなんかない。

やっぱりリンは一般人のおれとは違うんだろ?」

『そんなことより、おまえ正月どうするの?』

「正月?別ににもしないけど、リンは?」

『俺は、家族と…父さんと新しいかあさんね、の四人で箱根温泉でお正月を楽しんだって。無理矢理だよ?こっちの意見なんかねえの。いきなり親父から連絡来てさ。家族水入らずで箱根で正月…だもんなあ。しょうがなく付き合ってやんの』

…うらやましい…そんな正月してみたい。と、正直に言っても物欲しそうに見えるから、良かったねと軽く相槌を打つ。

『いつ寮に帰るの?』と、聞かれ「五日には戻れる」と言っ

『じゃあ六日は一緒に初詣に行こう、いいね』と、言われ、有頂天になった。

後はなんか訳のわからないことばかりで、自分でも呆れてしまったが、電話を切ってしまった後は、リンと一緒に初詣することを思うだけで胸が一杯になり、中々寝付けなかった。

新年になり、もう少しと引き止める親の言うことも聞かず、五日になると早々に寮に帰った。

やっぱりここはおれにとつての楽園だ。

少々意地悪な先輩がいてもだ。

根本先輩が持ってきたお土産のお菓子を食べながら、明日の事を言つと、「じゃあ、せっかくだから一発目は青姦でやれば？」と、言われ、何の事が全くわからず、翌日、その意味をリンに聞いたら大爆笑された。

意味を知つて顔を真っ赤にしたおれをリンは抱き寄せ「さすがに冬に外ではやんないよ。ミナが風邪引きそうだもん」と言う。

そういう問題じゃないだろうと、眼鏡越しに睨んだが、リンはお構いなしにおれの頬にキスをした。

…もういいよ。これくらいは…と、諦めた。

八幡神社はさすがに人の山だった。

やつとの事でお参りを済ませ、おみくじを引いたら、リンは大吉でおれは小吉だった。

少し拗ねると、リンは「じゃあ、ふたつを合わせて割り勘にしよう。そしたら、中吉になる」と、笑い、ふたつのおみくじを重ねて折り、神社の木に括りつけた。

「ほら、これでミナと俺は今年も仲良くできるというわけだ」と、振り返るリンがどうしようもなくいいとおしい。

こんな少女めいたことをされてもちつともシラ気ないなんて…いや、めっちゃくちゃ嬉しくてたまらない。

それなのに不誠実なおれは、お礼も言えずにただ俯くだけだった。
だって、顔がにやけるのをリンに見られなくなかったんだ。

三学期はあっという間に過ぎていく。

おれ達は相変わらず温室で二人の時間を楽しんだ。

日が暮れるのはまだ早かったが、リンが持っていたアロマキャンドルのおかげで、冬の色気の無い温室が華やかになる。

「これローズマリーだって。やっぱり本物の方が、やわらかい匂いだなあ」

「昔はローズマリーってバラの種類だっと思っていた」

「まあ、そう思うよね。S & Gの『スカボロフェア』の歌詞に *Prisley, sage, rosemary and thyme, where's the boy I love?* あれで覚えたんだ。古歌好きの姉貴がよく歌っていたんでね」

リンはおれの知らない色んなことを知っている。おれはいつも教えられてばかりだ。

リンはすべてに対して豊かだ。おれはリンに何がしかの感性を与えられているのだろうか。

絵を描くことしか取り得の無いおれに…

リンは薄暗い中で、デッサンをする俺のスケッチブックを取り上げて、それを眺める。

「相変わらず、色彩豊かな絵だなあ、鉛筆描きなのに色が見える。

俺のやった色鉛筆は出番無しだな」

「違うよ。あれは大事なもので…減らすの勿体ないんだよ」

「バカ、減ったら今度は俺が買ってやるよ。ミナの為ならバイトをしても貢いでやるから」

「そんなの…しなくていいよ」

「冗談でもおれの為にと言う…そういうリンが堪らなく好きだ。」

両親とは違う。追い詰める愛情ではない。
おれを上昇させてくれる愛だ。

二月に入ってもおれ達の関係は崩れない。
言い方を変えれば、キス以上の発展はない。

前にも後ろにも進まない今の関係が良い訳が無い。

おれが悪いんだ。

リンは何度かおれをそういう行為に誘ったりしている。

おれが嫌がる素振りを見せると、リンは無理強いしない。

それはそれで、それ以上おれを求めているんじゃないかと、別な不安を感じたりする。

勝手な言い草だ。自分でも呆れる。

冬の寒さの中でも温室は暖房を入れなくても暖かくて、のんびり硝子越しの外の景色をスケッチしていると、リンがやって来る。

おれはリンの両手に抱えているものに視線をやった。

片方はいつものカバンだが、もう片方はやけにでかい手提げの袋だ。

「なんか、美術の工作？」

「いや、今日はバレンタインだろ？チョコケーキ作ってきた」

「え？」

バレンタイン？…そんなのすっかり忘れていた…そっぴや根元先輩がプレゼントどうのこうのって言ってた気が…

「ミナの為に作ったの。初めてだから手間取ったけど、匂いは美味そつだから、大丈夫だろう」

「…ええっ！お、おれのため？リンが作ったの？…うそ…」

「…そんなに驚くなよ。変なもん入ってないから」

「そっぴやなくて…おまえ、ケーキなんて作れるの？」

「ママさんがお菓子作りが得意でさ。レシピ置いていったの。簡単

に作れるからやってみろつて。で、まあ、いい機会だから…え？チヨコケーキ嫌いだっだ？」

おれは顔を横にぶんぶん振った。

自分がケーキを作るなんて、思ったこともない…から、リンが作れるのがすごいって単純に驚いた事と、おれのために作ってくれたなんて…感動しないわけがなからう。

「箱は適当に、お菓子の空き箱に入れてきたんだけど…崩れていないといいんだけど」

と、リンはおれは目の前に箱を置き、そつと蓋を開けた。
チヨコレートの甘い匂いが温室に広がった。

「良かった。崩れていないや」

「…リン、すごい…美味しそうだよ」

「食べてみてよ」

「え？」

「いや、味見してないから、ミナ食べてよ」

「…もったいないよ。それにナイフかフォーク…」

「…そんなのないよ」

「…」

「手で食べればいいじゃん」

「いやだよ」

「なんで」

「折角綺麗なケーキを手で崩したくない」

「…あ、そう。じゃあ、持って帰って食べば」

「…そうする」

俺は蓋をして、崩れないようにケーキを平らな机に置いた。

リンはこわばった顔でそれを見る。

「ああ、ゴメン。おれ、リンにチヨコ用意していない」

「え？…ああ、いいよ。正直チヨコはもういい」と、リンは袋の中

を俺に見せた。

数え切れないほどのリボンのついた包みがあった。

「それ、今日貰ったの？全部うちの学生？」

だったら、この学校はまともじゃない。

「いや、朝、学校に来る途中で、女学生5、6人からも頂いた。全く見ず知らずの人なので驚いたけど。靴箱開けりや落ちてくるし部活に行きや、先輩方から嫌味なのかどうだか知らないが、迷惑なほどくれるしさあ…手作りケーキも食ったよ。正直もう俺、プレゼントいらんわ」

「…ですか」

聞いてて気持ちがいいわけが無い。これが嫉妬ってやつなのか…恋人が出来ると色々とうらめしいな。

まあ、リンは中身は置いという見かけはめっちゃいいから、これくらいは仕方ないことだと割り切り、大きい気持ちでいないと身が持たないぞ…

「でもミナからはもらいたかったかな」

リンからの催促は最もな話だが…

「悪い。来年は忘れないから。その代わりホワイトデーには奮発す…あつ！！」と、小さく叫んで気が付いた。

ホワイトデー即ち3月14日は俺の誕生日だった。

たぶんリンは知らない。

その証拠に呆けた顔をしたまま、突っ込まない。

いい事を思いついた。

おれは決めた。

その日、おれのすべてをリンにあげることに。

朝、起きると目の前に誰かの影。

「リン…」と呟くと「ミナ、愛してるよ」と、応えた。

「うん、おれ…も…?…!」

なにかおかしいと思い、目を擦って覆いかぶさっている者を見る。

「ね、根本先輩っ!」

叫びながら、起き上がった。

「何しているんですかっ!」

「みなっちの身体から、あま〜い匂いが立ち込めてるからさあ、ちよつと嗅いでみたくなっただの」

「…だからって…」

「君、昨晩は夕食も取らずに、ケーキワンホールを丸ごと食べてたよね」

「それが何か?」

「いくらバレンタインで貰ったからってさあ、あんな大きなケーキ独り占めすることないじゃない。一口ぐらい僕に分けてくれてもいいだろうに」

「先輩、甘いもの嫌いじゃないですか」

この人は見かけの割りに辛党だ。うわばみだって聞いている。昨日のバレンタインもお酒関係の贈り物が多かった。

「他にもないリン君の手作りケーキだろう? ネタ的にも食べて損はなかったよね」

「ネタにしないで下さい。それにリンはおれにくれたんだ。他の人に食わせるわけにはいかないでしょう」

「わあ、なんと言う独占欲っ! まだ寝てもいなくせに大口叩くねえ〜」

「な、なんで…」

先輩の言葉におれは手にした眼鏡を取り落としそうになる。

「わかるかって？僕はみなつちを毎日見ているんだよ。初体験をしたかしないかぐらい、判らいでか」

「…」

そ、そういうもんなのか…？

かわいい顔して恐ろしい人だ。

とにかくこの人に対しての言動には余程の注意が必要だ。

したらしたでこの人にバレたら…またなんかネタにされそうだ。

「しかし…宿禰も辛抱強いね。まだ手を出していないなんてさ。みなつちの知らないところで浮気でもしているんじゃないの？」

「リンはそんな奴じゃない」

「バカだなあ。あの宿禰凜一だよ。みなつちは何も知らないだろうけど、彼は有名人のひとりだよ。ある一部の特定の場所ではあるけれど…」

「噂は信じない」

「火種がなけりや煙は立たない。少なくとも宿禰は経験豊富だつてことだよ。だからって軽蔑するのはナンセンス。逆に安心じゃん。みなつちは何も知らないお姫様なんだから、宿禰のいうとおりにしてりゃいいんだもん」

「そついうの、余計なお世話つて言いませんか？おれ…達は真剣に付き合っているんだ。そんな…」

言葉が濁るのはおれに引け目があるからだ。真剣に付き合えば、身体を重ねるのは当たり前。それが出来ていない俺たちは、逆に考えれば、真剣に付き合っているとは言えないのかもしれない。

「…水川はさ、どんだけセックスに夢見てるのさ。それとも悪夢でも描いているわけ？セックスつてただのコミュニケーションだよ。だけど、その行為にはお互いの愛情があるかどうかで、感じ方が違うつて事。水川が宿禰にしてあげたい事は何なのかを考えれば、答

えはでるよね」

「……」

「まあ、下の経験なら宿禰には負けないであろう僕からのプレゼントをあげるよ」

先輩は机の引き出しからなにやら箱のようなものを出すと、おれのベッドに投げ込んだ。

「性病の対策は万全にしておくといいね。じゃあ、僕は朝の週番だから、先に学校に行くね」と、部屋から出て行った。

おれはほつり投げられたスキンの箱を恐る恐る手に取り、その使用法を真剣に読み始めた。

三学期の後半は模擬試験、学年末試験で、温室には寄り付く暇など無い。

自動的におれは宿禰と顔を合わせる回数が減る。

廊下で出会っても、宿禰はおれに対して特別な対応をしてくるわけでもない。

彼は友人たちも多く、いつも回りはにぎやかしく華やいだ空気だ。彼は輝いている。その光で、回りの者まで輝かせている。

とつつきにくいといわれるおれとは雲泥の差だ。

おれは、親友と呼べる友達も居ず、昼休みもひとりで教室で自習か図書館通いだ。別に慣れているからなんとも思わない……

放課後、レポートのやり直しの提出に理科準備室にいる藤内先生に会いに行く。

レポートを出し退出しようとするおれを先生は呼びとめ、コピーを付き合わされた。

藤内先生とおれはウマが合う。何の気兼ねもいらぬ。

泣いてたところを見られた所為か、あれ以来益々身近に感じている。

「水川のレポートは相変わらず完璧だね。他の連中にもう少し君を見習うように言った方がいいのかもなあ」

「嫌味になるからやめてください。おれは好きでやっているんですよ」

「まあ、勉強は完璧を求めるのはいいが、人生に完璧なんてもんじゃない。反省も後悔もしてもいい。だが何もしないなんてつまらない。せつかく親元を離れて樂園に來ているんだから、水川は勉強以外も学んだ方がいいのかもなあ。その方が人間に味が出る」

「味は必要なんですか？」

「調味料って意味じゃなく、深みって事かな。浸透圧って知っているだろう。片方に圧をかけると、ふたつは混ざらない。混ぜあわせて平衡状態にするには、自分の圧を取り除かなきゃならない」

「…そうですね」

藤内先生の話が、おれの何に対して言っているのかは知らないが、おれの頭の中は、宿禰と交じり合っている様しか思い浮かべられない。

3月14日が三日後に迫った。その日は土曜日、しかも年度末の終業式でもある。

その終業式が終わった後、宿禰とどこかで…具体的なことはさっぱりだが、リンとそういうことが出来たらいいなとおれは漠然と考えていた。

だがそれを宿禰にどういう風に告白していいのかわからない。

リンはまさかおれが自分からセックスしてくれと求愛するとは、夢にも思っていないだろう。

おれの誕生日が三日後だということさえ告げてはいないのだ。

誕生日にセックスを求める事自体が、相当ナンセンスな恥知らずなことなんだろうか…全くもっておれにはわからないことだらけだ。こうなると知っていたならもっとこの方面に対して勉強しておきや良かったと今更嘆いてみても、後悔先に立たず。

おれがこんな妄想を延々していることなど知った事じゃないであろう当の本人は、いつものように温室で植物のデッサンをするおれの傍らで、黙々と本を読んでいる。

おれは手を休めて宿禰の様子を伺った。

おれのことなど気にも留めず、集中したまま本の文字を追っているリンの横顔をじつと見つめた。

喋っている時はころころと表情を変えるリンだが、口を閉じた穏やかな容顔は、なんというか…見事なまでに整った造形で出来上がっていて、日本人の顔つきではあるけれど、まるでそういうジャンルを飛び越えた人種なのかもしれないと、おれは変に感心した。

どういう容姿の両親だったらこういう人間が生まれるんだろう。彼には兄姉がいると言っていたが、生きていたらお姉さんはかな

りの美人だつたらうなあとか、9つ上のお兄さんは今は25、6なんだから、宿禰とは違つてもっと大人でハンサムなだらう…など、どうでもいいことまで想像を巡らしてみたりする。

そもそもそういう他人に興味を持つ事自体おれには珍しいことなのに、その家族にまで枠を広げて催すなど、以ての外だ。

自分自身に呆れるのはもう慣れたが、こうなると、頭のどこかのネジが緩むどころか、外れてしまっているに違いなからう。

「リン、何の本読んでいるの？」

あまりに集中しているリンを振り向かせたくなり、おれはとうとう声をかけた。

リンはえ？と言う顔をしておれを振り返ってくれた。

「ああ、これ？色彩心理学」

「…」

相変わらず、雑学の幅広さも甚だしい。この間は「古代国家の帝王学」なるものを読んでいた。

おれにはピンと来ない範囲だ。

「おもしろい？」

「うん、面白いよ。簡単に言うと、人間は色を見ることによって、心理的にいかようにも影響を受ける。まあ、主観的な見方もあるけど、空が青けりゃ気持ち晴れ晴れとなるし、曇天の日には、空気が重く感じ、気持ちも沈んでしまふ…だろ？」

「うん」

「人間にも色がある。これはもう客観的な見方でしかなくなるに違いないけれど、人はその人格を色で区別したがる」

「ああ、それならなんとなくわかる気がする」

おれはスケッチブックを片付けて、リンの隣に座った。

「おれが思うにリンのイメージは金色だ。だけど、容姿から判断するならば、色は紫が似合う気がするんだ。これはどういう意味があ

るのかな？」

「金は王者、紫は高貴。どっちにしても偉ぶってるね。まあ、孤立無援という意味合いでは合っているのか？」

「リンは優美なんだよ。おれ、リンの綺麗さって外見からじゃなくて、おまえの魂が綺麗なんだと思う」

「…」

リンは驚いた風に目をぱちくりさせて首を捻る。

「ミナから褒められると…なんか、不安になってくる」

「…なんでだよ！」

おれの文句も聞かず、リンは座ったままおれの身体を後ろ向きにして自分の足の間に挟み、背中をそっと抱いた。

「ミナは青って感じだな。青弥だしな。青の持つ意味って知ってる？」

おれの頬を撫で、リンの口唇がおれの耳元に触れる。

「…知らない」

少しだけ上ずったおれの声が変に聞こえ、おれは恥ずかしくて熱くなる。

「水…水川の水でもあるね。知性、冷静、悠久、未来…憂鬱…」

「…」

そう言いながらリンはおれのシャツに手を差し入れ、甘い声音で耳元に囁く。

「近頃のミナはなんだか憂鬱そうに見えるけれど…何か俺に言いたいことでもあるの？」

「…」

おれは俯き、身を縮めた。

リンは知っている。

おれの憂鬱を。

おれの欲望を。

おれはこのまま、リンに身を任せるべきなのか、
それとも折角立てた計画を、今ここでリンに話すべきなのか、
頭の中でこんがらがってしまっ…

「誕生日まで待つて欲しい」

言わなくちゃいけないと思って、口を開こうとすると、リンはおれの顎を掴み、自分の方に向けさせ、口を合わせた。

互いの舌を舐めあいながら貪るキスはおれも嫌いじゃない。だけど、今はもっと大事な話があつて…

背後からしっかりと腰を捕まえられて身動きの出来ないおれは、身体を這うリンの指先にも刺激を受けて次第に息が上がる。

「リ、リン…おれ…あの…」声が裏返つてうまく言葉が紡げない。「いやなの？」

リンの甘い囁きにおれは、力なく首を横に振る。

嫌じゃない…そうじゃないけれど…

「いつまでもじらさないでくれよ。俺も気の長い方じゃないんだねえ、いいだろう？」

リンの唇が、おれの耳の後ろから首筋を伝わっていくのがわかる。ぞくりとする。

リンはおれの感じる場所を知り尽くしているのかもしれない。

抵抗なんてひとつも出来ない。

カチャリと音がして朦朧となりかけたおれの意識が引き戻された。下を向くと自分の足元がぼんやりと見える。気が付かないうちに眼鏡を取り外されたらしい。

リンは全く躊躇いもせずに、ベルトを外した俺のズボンに中に手を滑り込ませ、下着の上からではなく、直接おれのものに触り始めた。

「あ…」

おれは息を飲み込んだ。そして急いで右左と辺りを見渡した。勿

論裸眼で0.1もない視力では誰かが居たとしても、はつきりと見えるわけではない。

だけど、まだ宵の口で、しかも外からでも見ようと思えば丸見えの温室の中だ。

リンは本気でこんなところでおれを抱こうとしているんだろうか……それともこれくらいで動揺するおれの方が、ガキなのか……

おれはリンの恋人で、俺はリンを好きで、リンは俺を好きで……お互いに欲しいと思っていて……セックスしたいと望んでいて……それから……

おれは居たたまれず、目を強く閉じた。

リンの触り方は巧みだった。おれが自分でするよりも遥かに要領を得、快感を与えてくれる。

だけどおれはそれが怖かった。

リンに一方的に与えられ、翻弄されまくっている自分は嫌だ。

セックスってそういうものなのか？

おれがまだ何も知らないガキだとしても、おまえに抱かれる側であつても、こんなに惨めな気分でおまえに好きなようにいかされて……

リン、おれはおまえと分かち合いたいんだよ。互いの気持ちを確認しあつて、見つめ合つて、ゆっくりとひとつずつ繋ぎ合わせて、快楽に委ね、与え合い、一緒に辿り着く。

おれはおまえとそういう風に抱き合いたいと思っている。

それはくだらない勝手な妄想でしかないのか？

「うつ……うつ……」

おれはいつの間にか泣いていた。

自分の嗚咽に自分で驚いたが、止まらなかった。

両手で顔を覆い、「無理だよ」と、しゃくりあげながら掠れた声

をだした。

リンは動きを止め、きつく抱きしめていた片方の手の力を弛めた。力の抜けたおれはその場にしゃがみこみ、泣き続けた。

「ミナ…ごめん。ごめんな。そんなに嫌がるなんて…思わなかった…」

リンの心配そうな声が、おれの胸を更に締め付けた。

「もうしないから…泣かないで…」

頭を撫でてくれるリンの優しさが、酷く無神経に思えた。

…ちがう、宿禰が悪いんじゃない。おれがバカみたいに夢を見ていたのがいけなかったんだ。

おまえが欲しいのにおまえにやる勇氣もない…

おれは…なにも、おまえに応える事なんかできやしない、くだらない男なんだ。

おれは机に置いてあった眼鏡とカバンを持つと、宿禰の姿を一瞥もすることもなく、逃げるように温室から走り去った。

寮に帰った後、おれは何度も携帯を手に取り、電話でもメールでも一言リンに謝ろうと試みたが、何と言つていいのか皆目判らず、溜息をつくばかりだった。

同室の根本先輩はいい按配に、部屋にいなかった。どうやら今晚はどこかの部屋にお泊りか、誰かとホテルへ…

そんな事はどうでもいい話だ。

大問題を抱えているのはおれのほうだ。

一体これから宿禰とどうやって付き合っていけばいいんだ。いや、宿禰はもうおれに愛想を尽かしているかもしれない。

だったらおれに引き止める権利はなからう。

だつておれは、リンを…拒んだんだから…

リンに嫌われたかもしれない…

そう思うと苦しいのと切ない感情が二乗になり、じつとはしてられない。勉強も手につかず、こんな時、いつもなら絵を描いて気を紛らわすという逃げ道も今回は役に立たなかった。

おれは…とてつもなく間違つた仕打ちをリンにしてしまったんじゃないだろうか…

「はあ…」机に項垂れて頭を抱え込んだ。

だからもう、恋なんて…するんじゃない…

次の日、おれは宿禰の姿を見ることはなかった。

隣のクラスだから、様子を伺うこともできたはずだが、恐ろしくて近寄れなかった。

おれは授業が終わると逃げるように寮に帰った。

その夜、宿禰からメールが来た。

「昨日の事は俺が悪かった。待つって約束したはずなのに、ミナがあんまりかわいいから待てなかった…まだ怒ってる？」

…嬉しいんだが、返答しがたい内容で、ひとしきり考え抜いた結果、おれは「怒ってないし、リンが好きだ。でも自信が無い」と、返した。

すぐさまリンから「俺も自信喪失中…」と、返信され、気が緩んだのと申し訳なさで涙が零れてしまった。

やっぱり明後日、誕生日にセックスしたいと打ち明けようと、必死の決断で望んだ翌日だったが、宿禰の姿を見ることはなかった。次の終業式も宿禰は学校に来なかった。

三上を呼び止めて、宿禰の行方を聞くと、昨日からリンのお兄さんのいるシカゴに遊びに行くとかで、春休み中は帰ってこないと言う話だった。

…気が抜けてしまったというか…先に言ってくれば良かったのに…と、自分の事は棚に上げ、宿禰のつれなさを随分と詰った。

おれは16の誕生日を、寮の部屋でひとりぼっちで過す羽目になってしまった。

もつと早くから宿禰に自分の気持ちを打ち明け、ちゃんと段取りを踏んでリンとひとつになれていればこんな惨めな誕生日を迎える事などなかったんじゃないだろうか…

今更言っても全く持つて拙いことだらけで、自分のふがいなさが恥ずかしくも罵りたくなり、落ち込みも激しくなる。

「あれゝみなつち、いたの？」

「…いますよ」

夕食後、ベッドで横になっていると、同室の根本先輩が帰ってきた。

「だって、今日は誕生日じゃなかった？宿禰とデートでも楽しんでいるのかと思ったけど…」

と、言いつつ、何故かおれの寝ているベッドに乗り座り込んだ。おれも仕方なく起き上がって、向かい合わせとなる。

「…リンは留学中のお兄さんに会いにアメリカに行きました」

「…宿禰もまたつれないことをするね。恋人が誕生日だっていうのに」

「おれが知らせていなかったんです…宿禰は元々おれの誕生日を知らない」

「…そりゃ残念だったね」と言うかさあ、前もって言っとけば良かったじゃん」

「…」

「そんな大事なことも言えない関係なの？君と宿禰は」

そうなのかも知れない。おれだって宿禰の誕生日は知らない。

お互いの誕生日さえ興味が無いって…そういう恋人同士っていうのも変かもしれない。

だけど、そういう云々より、宿禰と一緒にいるだけでなんか…それだけで十分に居心地が良かったんだ。

「まさか、ボクのあげたプレゼントはまだ役に立ってないってことは…ないよね」

「…」

プレゼントというのはコンドームの事だろう。役に立つものにもおれは力なく首を振った。

「え？マジで…だってみなっち近頃ドキワクな顔していたじゃん。もう初体験しまくったのかと思ってたけど…」

触れて欲しくない事をこの人は…だけど、おれの今の状況を理解

してくれる人は先輩しかいないというのが正直な話。ここは本当のことを話して、相談に乗って貰った方がいいのかもしれない。

おれはぼそぼそと低い声で宿禰との事の顛末を説明した。不思議なことにいつもなら茶々を入れる先輩は、ただ黙って聞いてくれた。

「おれは…おれには初めから無理な話だったんだ。元々男が好きになる体質でもないし、いや、男も女もおれには好きになる価値なんかないのかもしれない。好きな相手になにもしてやれないんだから…」

「別にそれくらいで落ち込む事でもないと思うけどな。まあ、水川が真性のホモじゃないことはわかっていたし、それは宿禰も知ってたからね。宿禰は水川の事を大事にしてくれてただろう？」

「…だからおれは宿禰の思うようにさせてあげたかったんだ。でも肝心な時におれは拒絶してしまった…」

「させてあげたかったてねえ、思い上がりというか…要するに覚悟していたけど腰が引けたってわけだね。水川は自分が男として女みたいな扱いをさせられるのが嫌だった。つまりアナルに突っ込まれるのが嫌だったわけだ。痛いしね」

「そ、そんな事を言ってるんじゃない。おれは…」

「宿禰とは寝たいが男としてののプライドが許せないって話じゃないの？ボクが思うに、水川は自分はどうしようもないと言っておきながら結局は自分が大事でしようがないんだ。傷つきたくない、穢れたくないと思っている。宿禰がそっち方面に長けているのなら、何もかも初めての君が怖気づくのも判るけどね、自分のプライドを守るために価値が無いと泣かれても宿禰がかわいそうだよね」

「…」

自分のプライドを守るため？そんなの考えたことがない。おれは自分が嫌で嫌でたまらなくて…でも宿禰を好きになって本当の自分を少しは好きになれる気がしたんだ。

宿禰とセックスをしたかったのは確かだ。抱かれるのも覚悟していた。

じゃあなぜあの時、おれは宿禰を拒んだんだ。

「宿禰はおれに愛想が尽きたかな…」

「それは君次第だろうね。水川は一体宿禰とどういう関係でいたいの？このまま何もしないで恋人未満で続ける？それとも傷ついてもいい覚悟でお互いの汚いところをさらけ出しあって、付き合っていたいの？」

「…」

根本先輩の言葉は重く、おれは今までに考えた事のない宿題を目の前に出された気がする。

「おれは…リンが好きだ。リンがこのままおれから離れてしまうのはどうしても嫌だ。リンが他の誰かを好きになったり、誰かとセックスしたりするのもおれは…いやなんだ。こんなに誰かに執着したり、独占したいって気持ちになったのは初めてなんだ。おれは、リンと繋がりたい」

「…それをリン君に言えばいいんだ」

「だけど、リンはおれに失望しないだろうか。リンを好くさせてあげれるだろうか。おれはそれに嫌悪感を抱かないだろうか。うまくイクことができるだろうか…どれもこれも不安ばかりだ…」

「誰だって初めはそうだよ。宿禰だってね…勿論経験は豊富だろうけれど…考えてみれば、ボク達とだいたいして変わらない時間を生きてきたんだよ。内容は違ってても生きてきた歳は同じ。そう考えるだけで大分楽になるんじゃない？」

「…」

そうなんだ。宿禰は歳のいった分別のある大人でも、すべてをわかりきった博学者でもない。おれと同級生の男子なんだ。

「まあね、みなっちは3月、宿禰の誕生日は4月だから一年の差はあるだろうけれどね」

「え？先輩、リンの誕生日を知っているの？」

「ちよいと調べればわかるよ。4月14日が彼の誕生日。ちょうどみなっちのひと月後だね」

「…」

「宿禰がアメリカから帰ってきたら、さっきみたいにみなっちの気持ちを正直に話したらいいんじゃない。まあ、アメリカでいい男を捕まえていなければの話だけだね」

と、意地悪そうに笑う先輩におれは眉を顰め、海外にメールが届

くかは判らないが、とりあえず、誕生日のことを知らせようと携帯を手に取った。

メールで連絡を一応してはみたが、あれから一向に連絡はない。とにかくリンが帰国するまでこの件は一旦置いておこうと自分に言い聞かせる事にした。

おれは春休み期間を補修授業を受けるためと理由を付け、寮に残り、極力家には戻らなかった。

春休みにも関わらず毎日学校に登校し、授業が終わると温室でひとりで過した。

花に水をやったり、絵を描いたり、宿禰を知り合う以前と同じような毎日だ。だけど、おれにはもうリンが必要で、傍にいたいことが当たり前になってしまっていて、居ないのはわかってるのに、思わず振り向いて「ねえ、リン」と、呼んでしまうのだ。

リンが恋しい。

リンのことを思うと胸が痛い。

会えないと寂しい…

寂しくてたまらない…

これが恋という感情なのか？

なにものにも替えがたい尊いと思える想い。

おれはどうしても手放したくない。

リン…おれは、…おまえが欲しいんだよ。

新学期が始まり、朝礼が済むとおれはクラス替えの前に、隣の宿禰のクラスに向かった。宿禰に会うためだ。

きよろきよろと教室の中を伺うが、宿禰の姿は見当たらない。三上がおれに気が付いて、宿禰がまだ来ていないと教えてくれた。

「様子がわかったら教えるから」と、言われ、おれは肩を落として自分の教室へ帰った。

二年になり、おれは4階の教室に宿禰は…多分理系のおれとは離れた3階の文系クラスだろう。

一階だけだとはいえ、休み時間にちらりと見るリンの姿が見られなくなるのは寂しい気がした。

考えてみればおかしい話だ。

一年前この学校に入学したばかりの頃は、おれは恋どころが誰かを好きになる事さえ自ら拒んでいたのに。誰かをこんなにも好きで好きでたまらなくなるなんて…

おれは初めて誰かを必要と思い、そして相手におれを必要としてもらいたいと感じている。

リンが…リンがおれを変えてくれた。

おれはなんだか前を、上を向いて歩きたくて仕方ない気分なんだ。

始業式早々に進学校であるヨハネでは6時間までみっちりと授業がある。それが終わると三上はおれの教室にやってきて、宿禰の事を教えてくれた。

なんでも高熱で寝込んでいるとのこと、見舞いがたらプリントを渡して欲しいと頼まれた。

「ありがたい事に二年も宿禰とクラスが一緒なんだ。あいつはいい奴だから離れがたいよ。でも水川はあいつの特別だから仕方が無い。この役を譲ってやるよ。宿禰のマンションは知ってる？」

「知ってる」

「明日は土曜で休みだし、月曜は校内の実力テストだから、良かったら勉強でも宿禰に水川が教えてやってくれよ」

「うん」

おれは思わず顔を綻ばせた。すると三上は小声で「ああ、宿禰が

惚れるのも判る気がする。水川って案外かわいいんだな」と、笑った。

おれは三上の言葉にさえ、もう下を向くこともなく、素直に笑って応えた。

寮に帰り着くと、おれは宿禰に会うために服を着替えた。ついでに下着も新しいものに代えた。明日は土曜で休みだから、うまくいけば宿禰とできるかもしれない。

机に入れておいたスキンの箱から一個取り出し、お守りがわりに財布に入れた。

こんなにセックスの事ばかり考えていると知ったら、リンはきっと苦笑いするだろう。

色狂いだと軽蔑するかも知れない。それでも…

それでも、おれはリンが欲しい…

途中のコンビニでポカリとやわらかプリンとLGなんとかヨーグルトを買った。熱を出すと必ず母親がおれに食べさせてくれたものだ。

マンションに着きオートロックのタッチパネルに宿禰の部屋番号と呼び出しを押した。

暫くして『ミ、ミナ?』と、驚いたリンの声がスピーカーから聞こえた。

カメラからおれの顔が見えているのだろう。おれはどこを向いていいのかわからず、目の前のパネルをじっと見つめながら話す。

「うん。三上に頼まれてプリント持ってきたんだけど…」

『そう…上がってくれ。13階だから』

「うん」

同時に傍らの見るからに頑丈で豪華なドアが静かに開いた。

エントランスに入るとそこはホテルのロビーのようだった。

正面には淡い色調の照明に照らされた高そうな油絵が飾られ、応接間のようにソファとテーブルが並べてある。とりあえずおれはエレベーターを探し、ボタンを押した。

やっと降りてきたエレベーターに乗り、13階のボタンを押そうとすると、息を切らせながら滑り込むように子供がひとりエレベーターに入り込んできた。

小学生になるかどうかぐらいの女の子だ。

「10階をお願いします」と、丁寧に言われ、おれは10階のボタンを押した。

その女の子は珍しそうにおれを見ると「お兄さんは凜一おにいちゃんのお友達?」と、言う。

「え?」

「だって13階を押しているから」

「そうだけど」と、返事をする、彼女はにっこり笑って「凜一おにちゃん、は面食いなね」と笑った。

「リン…いち君のことを知っているの？」

「うん、いつもお菓子くれたり、抱っこしてくれたりキスしてくれたり、大きくなったら凜一おにちゃんのお嫁さんになりたいって言うんだけれど…」

「けれど？」

「好きな人がいるから駄目なんだって。まさかその人って…あなた？」

「ええ！…違うと…思います」

おれは大きく手を振って否定した。こんな小さな女の子にまで、そこまで想像されたくない。

10階で手を振って降りていく女の子を送り出し、おれは溜息をついた。

一体あいつは…誰彼も構わず抱っこしたり、キスしたり…危ない奴と間違えられないか？

と、思っ頭を捻った。なんかちょっと気に食わない。これは嫉妬ではないはずだ。…たぶん…

13階で降りると目の前に広々としたポーチがある。

回りを見渡しても玄関といえるものはここだけだ。表札はなかったが、部屋番号は合っている。

おれは門扉を開け、その玄関のインターホンを押した。

すぐに木造の瀟洒なドアが開き、宿禰の姿が見えた。

久しぶりに見るリンの姿を見て…おれは胸が熱くなった。

「リン…」

おれは無意識のままリンに抱きついていた。
その細い身体を掻き抱き、彼の存在を確かめた。
リンはおれの勢いに負けて二歩後ずさる。
後ろのドアがゆっくりと静かな音を立てて閉まる。
途端に玄関の間接照明の淡いオレンジが足元に浮かび上がった。

「ミ…ナ…」

「リン…逢いたかった。すごく…すごく…」

おれよりも少し高い位置にあるリンの顔を見つめた。

「俺もミナのことばかり考えていたよ」

その言葉はおれを有頂天にした。

リンは熱があるんだからちゃんと看病しなきゃならないんだとか、この間のこともあやまらなきゃならないとか、色々考えていた事など吹き飛んでしまった。

あまりの嬉しさに涙ぐむと、リンは眉を顰めて「ミナは嫌がっても喜んで泣くから、俺は非常に困る」と、真顔で言う。

「これは久しぶりに会えた嬉しさと、リンを好きでたまらないという意味だよ…どっちにしろリンが泣かせているのは間違いない」

「…もつと泣かせても構わないって意味？」

おれはそれを肯定するように、大きく頷き、リンの口唇に自分から合わせに行く。

ひとしきりお互いの口唇を味わった後、リンは優しげに微笑んだ。

「夢を見ているみたいだ。ミナがここにいるなんて…」

「何で来たかって聞かなくてもわかるよね。この間のリベンジだよ」

「…そりゃ…なんとまあ、勇ましい話だね。俺への挑戦？」

「いや、おれ自身へのも思っただけ。おれはリンと繋がりたい…」

「勿論、今度は逃がさない。ただ今は言わせて」

「なに？」

「遅くなったけれど…誕生日おめでとう、ミナ」

リンの言葉におれは相好を崩し、一寸も離れたくなくて、
またもやリンにしがみついてしまった。

リンに案内された先は、思っていたよりずっと広いリビングだった。一面のガラス張りの窓からは、遠くの海が白く淡く霞んで見える。夕暮れの色は曇り空に遮られ、夕焼けは拝めそうもない。

「座れば？」

コーヒーのソーサーを丸い硝子のセンターテーブルに置いたリンは、黒のレザーのソファに座り、手招きする。

部屋の中のどれもこれもがひどくオシャレで、どこかで見た外国のブランドであろうソファの座り心地は確かに高級感がある。

…こういうインテリアに全く無関心の俺でさえそう思うんだから、気が付いていない価値のあるものも多いのだろう。と、金の取っ手の着いたアンティークなコーヒークップをじっと見つめた。

「なに睨んでるの？ 変なもんは入っていないから安心して飲めば？」

「ちがうよ…なんか、粗相をして割ったら大変だなあって…」

「こういう茶器集めは死んだ母の趣味でね。なんか色々あるんだよ。引越しの時に処分したんだけど、思い出のものは使ってやらないからね」

テーブルにはノートパソコンが付けっぱなしになっている。

今度はそれを覗き込んだ。

外国の街が映し出されている。

「ん？ これはシカゴに行った時の写真をパソコンに取り込んでいたの」

「見ていい？」

「勿論」

おれは初めて見るシカゴの街並みをリンの説明つきで次から次へと楽しんだ。

ふと男の人の写真で手が止まった。

リンに良く似た整った人…たぶん宿禰のお兄さんだろう。

手が止まったおれを見て、リンが教えてくれた。

「兄貴の慧一だよ。シカゴの大学院に行っている。来年までは帰れないんだ」

「リンに良く似てすごかつこいいね。けど…お兄さんの方がすごく大人だ」

「…当たり前だろ。9つも上だよ」

「リンが9つ歳を取ったらこうなるんだろうね」

「さあね。兄貴みたいに分別のある人間にはなれる自信はない。兄貴は俺の憧れではあるけどね」

「へえ…リンが誰かに憧れるっていうのはピンとこないな。いつも自信満々だから」

「尊敬すべき人は沢山いるよ。でも兄貴は特別。母親が早くに居ないだろ？親父は単身外国住まいだったし…今は奥さんがいるけどね。俺は姉の梓と慧…兄貴のことね。の、ふたりに育てられたんだよ。姉が死んでからは、俺には家族といったら慧だけだ。慧は俺を大切にしてくれる。俺も慧の手だけは離したくないと思っている」

「でも…リンの家はお金持ちだろ？ここの家もすごく高そうだし…幸せじゃない」

「お金に困った事はないだろうね。でも豊かという点ではどうか…あまりに家族との縁が少ないんだよ。絆という点で、俺はどこか欠落したものがあると思う。兄貴は俺の一番大事な家族だけど、それだつて一緒に居ない期間が長かったからね。ひとりで過すのは寂しいもんだよ。実は昨日も…アメリカから帰ってばかりで、ひとりきりの寂しさからワインで気を紛らわそうとねえ…まあ、俺、あんまり飲めない性質だからすぐに参ってしまつて…それで二日酔いで学校に行けなかったんだよ」リンは苦笑しながら、舌を出した。

おれはリンにそんな暗い面を感じた事はなかったから、リンの生い立ちをリン自身がどう感じているかを知って、同情してしまった。

その思いがわかったからだろうか、リンは少し困った顔をした。

「哀れんでもらおうと言ってるんじゃないよ。これは一方の方向から見ているだけで、他方から見れば、俺はお金に困った事はないし、遊んでくれる大人は大概いい人だったし、価値ある経験も沢山してきた。恵まれている事には違いない。」

ミナだって両親にかわいがられているだろ？でも、それが窮屈で寮暮らしをしている。俺から言わせて貰えば、ミナは両親の愛情に恵まれて幸せ者だと思うぜ。だが、ミナはそうは感じない。同じものを見ていても見る側面は違う。人を見た目から同情したりけなしたりするのはいい。だけど、本人にとっては人の思いなんかは関係ない。

俺は十分幸せだってことは確かだよ。少なくとも愛されているからね」

「…お兄さんに？」

「そう。それとミナにもね。それよりも俺はミナがいつおれとセックスする気になったか知りたいね」

「それ、話さなきゃならない事？」

「俺に取っちゃあ、ミナがここに来たというのは一大事。それも俺とやりたい気持ちで来たっていうんだから天地がひっくり返るぐらいの大ニュースだ。そのきっかけが何であるのかを知りたいって思うのは自然だろう？」

「…」

わかるけど、それを逐一話すのは自分の欲望を晒すのと一緒に、先輩に話すのとは違い、躊躇われるだろう。だって、リンは俺の性の対象者だもの。

「まあ、いいさ。夜は長いし、時間はたっぷりある。泊まっていくなだろ？戦さの前に腹ごしらえな」

「い、戦さ？」

「それはそれは激しくも狂おしい戦いの夜になるでしょう…」

と、おれを面白がりながら色っぽい顔で誘うから、おれはリアクションに困ってしまった。

ふたりで夕食を作り、食べた。作るといってもおれはサラダ担当で、野菜をちぎっただけ。リンはカルボナーラを上手に作った。

「何でも出来るんだね」と、褒めると「毎日外食するより、家で好きに作る方が有意義な時間のつぶし方なんだよ。話す相手がいないのは寂しいけど」と、応える。

同情を嫌うと言うが、俺はリンが今までどんなに多くの時間をひとりで過したかと思うと、可哀相で仕方がない。

おれでよければずっと傍にいてやりたいと、心から思った。

外泊することを根本先輩にメールで伝えたと、「頑張れ」と、短く返ってきてくれた。それをリンに報告すると、「あの人は信用しているよ。ミナの傍にいてもネコだから俺も安心していられる」と、わけのわからないことを言う。

風呂に入るように下着とパジャマを渡され、浴室に案内される。

「一緒に入って、洗いつこでもする?」と、からかわれた。

…いや、一緒でも良かったかもしれない。

風呂を交代して、ソファでぼーっとしていると段々眠たくなり、横になってしまった。

軽く居眠りしていると、風呂から上がったリンに「緊張感が足りねえ!」と、怒られた。

ごめん、このソファ、高いだけあって寝心地いいわ。

ひとしきりリンのお小言を聞いた後、リンはおもむろに立っておれに手を差し出す。

「俺の部屋へ行こう」

いよいよだと思うと、なんだか胸が高鳴って仕方がない。ん？いや、胸が高鳴るはおかしいだろう。まるでめちゃくちゃ期待しているみたいじゃないか。

リンがどんな風におれを抱くのか、不安と緊張で、心拍数が高くなるのだ。

「どうしたの？入れよ」

リンがおれの方を向いて、愛想良く「どうぞ」とドアを開け、エスコートする。

何故か顔が緩んでくる。

…やっぱり、胸が高鳴っているっていうのは正解だ。と、妙に納得した自分が、なんだか可笑しくて仕方がない。

リンの部屋は、シンプルなものだった。

ベッドの大きさには驚いたものの、他には揃いの木目の際立った勉強机と本棚ぐらい。テレビで似たようなものを見たことがあるが、どちらも高価な指物だろう。吹き付けの漆塗りが美しい。

落ち着いた色調の中にひとつだけ目を惹かれたものがあつた。

本棚に飾られているかなり大きめのフォトフレームだ。

近づいてよく見ると、コルク製のマットにコラージュのように沢山の写真が貼り付けられている。

おれはそれを近寄って覗き込んだ。

かわいらしい赤ん坊はリンだろう。両親と兄弟揃つての写真は七五三らしく、リンは千歳飴を持っている。リンに良く似た面差しの母親に抱きしめられているリン。ある時期からはお兄さんとお姉さんの三人だけの写真が多くなる。

リンはいつも真ん中で、ふたりの兄と姉に見守られるようにあどけない笑い顔を見せている。どれもこれもリンは際立って美しく、その両脇を占める兄姉も、リンに相応しい容貌だ。

「リンは子供の頃からかわいいね」

「ああ、天使だって言われ続けてきたんだぜ。慧も梓も俺の背中に6枚の羽があるって言い張るんだよ。俺もその気になっていただけだね」

俺はそれを聞いてリンの姿をまじまじと眺めた。

「…おれには羽なんか見えない」と、言うと、リンは嬉しそうに「だからミナが好きなんだよ」と、言う。

意味がわからなくて、肩を竦めて、また写真の方に目をやる。

「お姉さんって綺麗だったんだね」

「うん、交通事故であっけなく逝ってね。二十歳になったばかりだったんだ。…俺は瀕死の梓を病院でひとりで看取った…悲しかったよ…」

「ひとりで？」

「ああ、その時は俺の他に誰も居なかった。姉貴が死んで俺は酷く落ち込んで、学校にも行けなくなってしまったんだ。梓は母親でもあり、ある意味恋人でもあったから…すぐく愛し合っていた。だから、梓が死んだ時、俺も後を追いたかった…死にたがったんだよ。餓死して死のうとしたら、周りは必死で食べさせるしさあ…」

「…」

「俺はたぶん結婚はしない。それに、この先女の人と恋をすることは無いと思う。梓以上に愛せる女が現れるとは思えないからだよ」

「そんなに…愛していたの？」

「慧がいなかったら、自殺でもして死んでいただろうね。慧が居たから…置いていかれたもうひとりの半身である慧をひとりにしてしまいたくなかった。梓を失ってしまった俺達はもうお互いを失うわけにはいかなかったからね」

「…」

「ミナ…俺はおまえが思うほど強くもないし、綺麗でもない。甘ったれで我がままでもうしようもない人間だよ。それでもいい？」

「リンは前に言ったよね。好きなら相手のすべてを知りたいって。それは相手のすべてを受け入れることを覚悟した時だと思う。おれにとって今がその時だと思うんだ。リンがどんな奴でも構わない。おれの前にいる宿禰凜一がおれの好きな奴で、おれはおまえの全部を受け入りたい」

リンは笑わなかった。伏せ目がちにおれに差しだす右手を、おれは握り締め、指を絡めた。

「リンが好きだ」

おれとリンは立ったまま抱き合いキスをした。

今までとは少しだけ違って、甘さに混じった感傷を感じたのは、それはおれがリンの本当の心に少し触れたからだと思った。

14 (前書き)

R15です。

「服を脱いで」と、言われ、パジャマを脱いでベッドに寝転がる。下着は着けたままだ。

リンは何故かＴシャツとスウェットパンツを着たままでおれの横に寝ると、肌触りのいい毛布を肩から掛けてくれた。

なんでおれは脱いでいるのにおまえは着たままなんだ？と、思ったが、何しろこっちはすべてが初めての経験って奴だから、どうしても宿禰に言うがままにならざるを得ない。

「寝る時は眼鏡はいらないだろう」と、俺の顔から眼鏡を取り、ベッドの脇のサイドテーブルに置いた。

ベッドはおれ達ふたりが寝ても十分余裕のある広さで、両脇のサイドテーブルには洒落たスタンドが置いてある。

「どうしてひとりで寝るのにこんなにベッドが広いんだ？」と、尋ねると「そりゃどんなプレイをしても軋まないベッドの方が、安心してセックスが出来るだろう」と、ほくそ笑んで言う。

おれが黙ったままでいると、

「…嘘だよ。俺は自分の家では誰ともしたことがないよ。ベッドが広いのは、小さい頃はよく梓と慧に添い寝をしてもらってさ。俺、夜泣きする子だったからね。３人でよく寝てたんだ。その所為か、ベッドは広いほうが気持ち良く寝れる」

そう言いながら、リンはおれの背中を横抱きにしながら優しく抱いた。お互いに見つめあう格好になり、おれの胸元にリンの視線を感じてしまう。

「リン…灯りを消してくれない？おれ、恥ずかしいよ」

リンは黙ってリモコンを手にとって真上の蛍光灯を消した。そして、サイドテーブルの二つのスタンドを付けた。

さつきとは明るさも色合いも違う光が、お互いの身体を照らしている。

おれはますます恥ずかしくなってしまう。

「あの…明るすぎないか？」

「真っ暗闇の中であるのもそれはそれで楽しめないわけじゃないけど、初めてなんだから、お互いを確認しあった方が良くない？俺はミナの顔がちゃんと見えていたほうが嬉しいけどね」と、おれの首筋や肩を撫でて言うもんだから、おれは反論なんか出来ない。

「…リンがそう言うのなら構わない」

「ミナは白いね」

「そう？リンも色白じゃないか」

「俺の白さとは違う。ミナを初めて見た時の印象は白い子だなあと思ってしまったもの」

「おれは…リンがあんまり人目を引く存在だったから…目が合った時、思わず怖気づいてしまったよ。まるで、おれとはかけ離れた…リン、そこゾワってくる…」

リンの手がおれの脇腹を撫でる瞬間、おれは軽く痺れたような刺激を受けた。

「じゃあ、ここはミナの性感帯だな」

「…」

そうなのかな？でもそこだけじゃなくて、リンが触るところ、なんか全部…鳥肌が立つくらい…

「リ、リン…」

おれは怖くなってリンにしがみつく。

心臓がバクバクしてる。別にまだなにも始まっていないのにこれじゃあ、後が思い知らされると臆病風に晒される気がした。

「…ミナは誰かを好きになったことはないの？」

リンの手が片方は背中を、もう片方はおれの髪を撫でる。落ち着

かせるような感覚におれは少し安心してリンの質問に答える。

「ない…いや、中三の時に、同級生を好きになった。その子は頭が良くて美人だった。お互い好きになって交際したんだけど…彼女はおれを求めてくれて、おれはそれを与えられなかった。それで、振られたよ…男としてはかなりかつこ悪いよね。たぶん色々考えて…おれを求めたんだと思うよ。おれも応じてやりたかったんだけどなあ…何がいけなかったのかわからない…」

よくよく考えればへんな話だった。好きな奴と初めて寝て愛撫されながら、失敗したセックスの話をしてるだなんて。

「ミナはその子を本気で求めてはいなかったんだろうね。ミナの言うとおり、相手に求められて応じなきゃならないって思うのもわかるけど、ミナは中三だったんだから、まだ子供だ。できなくても仕方がないよ」

「だって、リンは…」

「俺は家庭環境が最悪なもの。誰も監視する奴はいなくてさあ、本人は好奇心旺盛で怖いもの知らず。そりゃやりたい放題だよ。でもしたくない奴には勃たなかったよ」

「本当に？」

「そういうのって、自分が思うより身体の方が正直なのかもなあ。俺は相手を好きじゃないとホテルに連れ込まれてもしなかったからなあ」

「それでどうしたの？」

「股座蹴り上げて逃げ帰った」ふふつと笑うリンにどこまで本当なのか判らなくて、口唇を尖らすと、「セックスの経験はそりゃ同い年の子より多いと思うけど、俺は本気で恋をしたことはないよ」と、真面目な顔でリンは答えた。

「中一の時から男も女とも寝ていたけど、好奇心と気持ち良さを求めていただけだよ。運のいいことに悪い人はあんまりいなかったし

ね。好みの人もいたよ。でも、ドキドキしたりねえ、ミナみたいに大事にしたいっていう相手には出会わなかった。俺が子供だったからなんだろうけど、いつだって守られる側だった。そういう意味では俺もガキだったって事だ……」

目を閉じたまま静かに話すリンだったが、色々な想いが過ぎつつあるのだろう。おれの予想以上にリンは様々な経験を積んでいる。喜びも悲しみも、おれには想像できないほどに。

…その複雑な色合いこそ、おれがリンに惹かれる理由なのかもしれない。

15 (前書き)

R18です。

リンの黒まなこがおれを見ている。

でかくて吸い込まれるようなその目で見入られると、心の奥まで見透かされているようだ。

「落ち着いたようだね。始めようか」と、言うので「リンはまだ服を脱いでいないじゃないか」と、責める。

「じゃあ、脱がして」と、言うから、起き上がってシャツとズボンを脱がす。

ついでにお互いの下着も脱がせあった。

互いの身体を眺め、何故か笑いあい、そして抱き合いながら、また毛布に潜り込んだ。

エアコンは入れてないから、薄い毛布だけじゃまだ少し寒い。

「布団もいる？」と言うリンに「いや、リンのぬくもりがあればいい」と、言った。

「まあ、そのうち汗をかくから、毛布もいらなくなるよ」

そんな一言にさえドギマギしてしまう自分が恥ずかしい。

リンの手が俺の首筋を撫でる。もうひとつの手がおれのものを触ってくる。おれは息を呑んだ。

触り方が優しいのにいやらしくて……おれも慌ててリンのを触った。頭の中ではどんな風にすれば気持ちがいいのかと試行錯誤しても、手は上手く動かない。

それなのに、リンの指はおれのを上手く扱って、リンの口唇はおれの吐き息を吸うように重なってくるから、おれは呼吸が荒くなる。

苦しそうにすると、リンは手を緩め、おれの顔を覗く。

大丈夫？と、目で聞くから、俺も軽く頷いた。

リンは動きを再開し、開いた片方の指がおれの薄い胸や背中をゆつくりと撫でる。

「ここが僧帽筋、天使の羽の付け根だ。上腕三頭筋から順に…二頭筋と続く。脊椎、肩甲骨、そして肋骨。肋骨は何本か知ってる？」

リンの落ち着いた声が、上がった心拍数を宥めてくれるようだ。おれの呼吸は次第に元に戻る。

「…24本」

「そう、両脇に12本ずつだ。昔3ヶ月ほど付き合った人がいて、そいつは呼吸器外科の医師だった。何の趣味か知らんが、肋骨一本一本に季節の花の名前を付けていた。上から…馬酔木、譲葉、ライラック、勿忘草…面白いだろう」

「…変わって、いるね」

「そう、そんな名前に何の意味がある。肋骨は肋骨だよ。骨ではない。花の名をつけることがロマンチストとは俺は思えない。まあ、好き好きだがね。さて、ミナならこの意味をどう捉える？」

言ってることとやってる事がどうにも結びつかなくて、頭が朦朧となってくる。リンは巧みにあやつって、俺を翻弄する。おれも頑張っているのに…適わないや…ああ…答えなきゃ…なんだっけ…そう…

「…結局は…セックスはセックスでしかない」

「正解。ミナは頭がいい。どんなに美辞麗句を並べようが、やることは決まっている。快感を求めあい、気持ちのいい汗を掻くことだ。さて、いかに気持ち良くなるかだが…」

「リン…もう、おれイキそうだよ…手え離して」

「いいよ。そのままイッて」

「嫌だよ。リンの手が汚れるじゃないか」

「じゃあ、飲んでやろうか？」

「や、やめてくれ！」かなり上ずった声でおれは拒否した。

リンは笑って「じゃあ、好きなように」と、いい、強く擦りあげるもんだから、おれはあっさりとそのまま達してしまった。

ハアハア言つて、必死に酸素を取り込んでいると、リンが目の前でおれの精液の付いた指を舐める。

「リ、リン！やめてくれよ。き、汚いじゃないか」

「汚くない。おまえに無理強いはないから、安心しろよ」

そんなことじゃなくて…おまえがそんなことをするのが嫌なんだ。

「ミナは純粹なんだね」

「馬鹿にしてる？」

「いや、ただ、おまえとするのは…少し怖いかな」

「なんで？」

「俺が汚れすぎて、ミナを穢すのが…穢すっていうのとは違う。俺がおまえを染まらせるのが…正しいのか…この選択で間違っていないのか…すぐ考える…ここに…」と、言いながらリンは塗れた指をおれの後ろに当て、ゆっくりと回す。

「…入れるわけだが、どうする？怖いのならやめる。今日じゃなくても明日だって明後日だってできる。ミナはきつくない？」

リンの思いやりが嬉しくないわけがないが、おれは決めているんだ。

「じらさないで、最後までやって欲しい。痛くてもいいから…おれだってリンが欲しくて堪らないんだから…」

おれはリンの首に腕を巻きつけ、哀願する。

「ミナは男らしいね。俺の方がだらしないかな。じゃあ、できるだけ痛くないようにゆっくりやるよ。と、いつでも俺もどれだけ理性が保てるかわからないけれど…」

おれの耳元でリンが囁く。

「実は一年以上セックスはしていないだよ。えらく清き身体だから、

ミナを気持ち良くしてあげれるか心配だ」

ニヤリと笑いながら、おれの肩をベッドに押しつけ、覆いかぶさった。

灯りの影になったリンの顔がひどく大人びて見える。

16 (前書き)

R18です。

リンの指がおれの中に入り込んでくる。リンの口唇がおれの胸を這う。

怖いと同時に背中からぞくりと震えが来る…気持ち悪いんだかいんだかわからない刺激。

おれもなんかしないといけないんだろうとは思っけれど、何をしたいのか全くわからず、リンの背中を撫でてやるのが精一杯だ。

両足の内にリンの身体が落ち着いているのはわかるが、自分の下半身がどうなっているのか、おれは見るのも怖くて目に入らないように薄暗い天井を見上げた。裸眼では天井の模様などわかるわけもない。

蛍光灯とその脇の熱感知器の両方の丸い形が、地球と月のように見える。

不思議と落ち着いている。

自分の呼吸が荒いのも意識をしないのに出してしまう声もはつきりとわかる。

ゴム持ってきたのに、使わないのかなと、思い出したが、つけない方がいいかな、と、どうでもいいことを考えている。案外冷静でいられるもんだ。

ああ、なんだろう。

セックスつてもっと怖くてドロドロしたものだと思っしていたけれど、なんか…とても自然だ。

好きな奴がおれの身体に密着して繋がろうとしている。

ワクワクする。不謹慎かな？

…息が忙しい。撫でていたリンの背中もなんだか遠い…どうなっているのか、と、思ったら下半身に生ぬるい感覚。

リンの髪の毛で見えないが、何をしているのか感触でわかる。
ち、ちよつと待ってくれ。無理だ！

おれは腰を引こうとするが、リンは俺の腰骨をしっかり掴んで離さない。それに後ろからも擦られておれはすぐに力が抜ける。

「リン…お願いだから…もう、入れてくれ。頼むから」

リンはやつと口を離して俺を見上げる。

「まだ2本しか入れてない」

「か、構わない。入れてくれ」

リンに啜えられるより、さっさと入れてもらったほうがマシだ。

今度は腰を軽く引き上げられ、両足を広げられた。丸見えだがもう恥ずかしいとか言ってられない。

何でもいい。好きにやってくれ。

リンはおれに宛がうとゆっくり腰を入れた。勿論痛い。痛くないわけがない。

息を吐いた方が楽だと思い、短く息を吐く。

「ミナ、大丈夫か？」

目の前のリンが眉を顰めて俺を見つめる。

大丈夫だ。痛くても嬉しい。リンと繋がれる。そう思うと恥ずかしいのも痛いのもたいした問題じゃなくなる。

「ミナ…全部入った。苦しくない？」

「う…ん、大丈夫。な、んかすごいけど…リンがいるって、感じる」

「ああっもう、余裕だな、おまえ。俺の方が…よっぽど…もたねえ、かも…動くよ」

「あ…うん…」

すぐにめちゃくちやに揺らされた。

痛いのも気持ちいいのも全部ひっくるめて、まるで波にのまれる

ようだ。

喉から出る声が大げさではなく助けを呼んでいる気がした。
何度も何度も「リン！好きだ」と叫んだ。
ありえないことも口走ったかもしれない。
そんなことはどうでもいい。
どうでもいいんだよ。

リンが好きで、リンを欲しくて、そして、求められ、繋がれた。
嬉しい、嬉しい、嬉しい…ただそれだけ。
それだけなんだ。

おれ達は彷徨っている。

ただひたすらにこれが今、自分達にできうるものと懸命に走る。
求めている。

君を、愛を、自分を信じるために。
…なんという、この尊きものよ。

終わった後、おれ達はベッドに横になり、静かに向かい合っていた。ふたりとも何も着ていない。薄い毛布にくるまっているだけだ。

おれはリンを見つめた。

リンの伏せた長いまつげが濡れている。

リンは泣いた。お互いにイッた後、彼はおれの身体に突っ伏したまま、身体を震わせてしばらく泣いていた。

理由は聞かなかった。

それはおれが触れてはいけないリンのプライドだと感じたからだ。

リンは繊細だ。とても複雑で深いいくつもの層を持っている。

その奥を押し開いても彼は喜ばない。

リンの思いはリンのものだ。

おれにとって一番大事なことはリンと繋がれたことだ。

それだけで良かったはずだった。

だけど…リンとのセックスは想像以上だった。

リンが好きだ。愛している。はつきりとそう感じてしまった。

おれはこの男を失いたくない。

愛とは独占力なのかな。リンをおれだけのものに…ひとり占めしたいと思っている…

おれの前でリンが他の奴のことを思うのは嫌だ…

今まで感じた事なかったのに…

きつとこんなことを考えているとリンが知ったら、おれを見損なうかもしれない。

おれは姑息な男だ。リンに嫌われないためにはどうしたらいいか

と、考え始めている。

まだたった一度繋がっただけの関係なのに。

「ミナ…眠らないのか？」

リンが目を開けておれを見る。慣れてしまっているはずなのに、その眼差しにドキリとする。

「あ…うん。なんか興奮しているからかな。眠たくならない」

「そう…じゃあ、少し話そうか？」

「うん」

リンはいつもの顔に戻って、おれに腕枕を差し出し身体を寄せた。

「初エッチの気分はどう？」

「すごく…嬉しいよ。なんというか…初めての相手がリンで良かった」

「なんだよ、それ。他の奴ともやる気満々って言ってるみたいじゃないか」

「違うよ。そういう意味じゃない。今までのリンを好きな思いと、した後のリンへの想いが…なんか違う気がする。深くなった感じ。それを感じられたのはリンと繋がったからだ」

「そう、良かったよ。もうやりたくないって言われたらどうしようかと思った」

「リンこそどうなんだ？おれは、あの…良かった？」

「ん？なにが？」

「…」

判っているのに言わせたがる。こういうところは相変わらず意地悪だ。

「おれで感じられたかって聞いてるんだよ。もう！本当に、リンは意地が悪い」

軽く胸を叩くと、リンは参ったという風に顔をしかめ、そしてゆっくりとおれの顔に触れる。

「…俺はミナとの初めてのセックスを思い出にはしないよ。たぶん…思い出にはならないと、思う」

「どうということ？」

「ただ想いが、残るんだ。いつまでも。ここにね…」リンは自分の胸を押さえ、目を伏せ言葉を続ける。

「その想いは、思い出にはならず死ねまで残っているんだ」

「リン…」

「つまりは…すごく良かったってことだ。安心しな。ミナの身体は俺とは相性がいい。気持ちよかった。いっぱい色んなワザを試して、どんどん開拓しよう。それでミナの性感帯ってさあ…」

「もういい！もう、わかったから…」

おれはリンの口を押さえた。どこまでが冗句でどこまでが本気なのか…

そういうところも嫌いじゃないのが癪に障るんだが。

「眠れないのなら、羊でも数えようか？そうだ、いいこと思いついた。羊の代わりに、お互いの好きなところを数えよう」

「…それ、けっこう難しいかもしれない」

「まあ、いいじゃん。じゃあ俺から始めるよ。…眼鏡美人のミナが好き」

「…」

「ほら、おまえの番だ」

「…これって恥ずかしくない？」

「恥ずかしいからいいんだよ。こういうなんてことのないことが、心にずっと残るのさ」

「…じゃあ、…リンは潔い。男らしい。すごくかっこいい」「ミナ、一個ずつだよ」「あ、ゴメン」「眼鏡も似合うが、眼鏡をはずしたミナも美人だ」「見かけばっかりだ。見かけならリンが上。非の打

ち所のない容姿。光源氏だ」「それ、褒めてない。ミナはピュアだ。混じり気が少ない原石。加工するのがもったいないが、出来るなら俺が光り輝かせてやりたい」「加工って…なんか怖いな…リンは見目だけでなく、魂も美しいんだ。おれはそこに惹かれる」「…美しくなんか、ないけどね…ミナの方こそ…そうだね、ミナは素直に見えてひねくれてるからなあ」「褒めあいつこじやなかったの?」「その天邪鬼が好きって話だよ」「やっぱり褒めていないじゃないか…」

何かに急き立てられるように言葉を続けるおれ達。

おれは気が付き始めている。

リンの中に、急速に引き込まれる自分に。

それは光の速さで突き進んでゆく…

リンはまるでブラックホールだ。

おれのすべてを吸収して、散り散りにする。

そして僅かに残った塵のおれは、リンの心の核となる。

ずっと…ずっとそこに居続けるようにおれは祈る。

それは、いつまでも溶けない澱のようだ…

「リンの全部が…好き…だよ…」

リンの胸に抱かれながら、

夢の中でも君に会える様に、

祈る…

おれは、祈り続ける…

「引力」
「終わり」。

17（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

「引力」はこれで、終わりです。

宿禰凛一編に続く予定です。

次回をお楽しみにお待ちください。

第二章 焦点（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

第二章 焦点

> i 2 5 1 8 — 2 7 3 <

焦点

1、

リンと初めてセックスをしたおれはどことなく気分が浮かれっぱなしだった。

長年のコンプレックスが解消されたからだろうか、今まで気を病んでいたことがつまらないものに見えた。

リンがおれに教えてくれたのはセックスだけではなく、色んなものの味方だった。

一つの方角ばかりに囚われないで角度を変えて眺めてみる。

美しさは一遍どおりのものじゃなく常に色んな形に変わるものであるし、美しい面もあれば汚い面もある。固定概念に囚われるなということだろうが、中々上手くはいかない。

だって、リンはどこから見ても綺麗だし、おれにとって嫌なところなんてひとつもないのだから。

こんな引つ込み思案のおれを沢山褒めてくれるのも本当なら信じがたく、薄ら寒い嘘に白けてもよさそうなのに、リンが言うとなんだかおれがとても立派な人間に聞こえてくるから不思議なんだ。

単に口が巧いだけなら、おれだって歯牙にかけないのだが、リンの言葉はなんだかおれの心にひとつひとつ刻んでいくようで、いつまでも残り続ける。

初めてお邪魔したにも関わらず、おれは宿禰の家に丸二日間居付き、その間、する事といったらセックスと勉強だけだった。

何回かなんて数えるのも恥ずかしいくらいリンとした。

今まで知らないでいた自分の渴望だろうか、最初はリンの方から

誘ってくれていたが二日目の夕方になるとリンと離れるのが寂しくておれから求めた。

気持ち良いからしたいというだけじゃない。宿禰凜一という人間に惹き付けられてしまったという想いの方が強い気がしてきてならない。

強いて言えばリンへの依存性が強まるのはとても怖い気がした。いつか自分が飽きられる、捨てられるという不安が始終おれの觀念から取り付いてやまないからだ。

だが、それ以上におれがリンを求めている。

リンが欲しくてたまらない。誰にも渡したくないという欲求が遙かにしのぐ勢いでおれの中で成長している。それは簡単に抑えられるものではなく、「恋」というこの圧倒的、狂信的なものに自身太刀打ちできなくて為すがままに翻弄されている気がした。

二日間をリンのマンションで過ごした後、寮に帰った俺は同室の根本先輩からの嫌味や冷やかしを案じていたが、先輩は「良かったね。これで見なっちも一人前の男の子だねえ」と、穏やかに笑い祝福してくれた。リンが言った根本先輩は信用していいという言葉は本当だったみたいだ。

二年になっても俺は根本先輩と同室で、それを先輩は舎監である保井先生が勝手に決めているような言い方をする。

保井先生と根本先輩がどういう関係かなんていうのは野暮で、この寮に住んでいる生徒は大概知っている。

しかも公認であるにも関わらず先輩は他に気に入ったターゲットがあれば食いついていくのだから、保井先生も辛抱強いものである。

おれだったら…おれが保井先生でリンが先輩の立場であつたなら、おれは許せるだろうか…他の奴とセックスをするリンを許せるのだろうか…許せないと思ってもそれをリンに言えるのだろうか。

言葉にすれば二人の関係は壊れる…そう思つて先生は言わないのではないか。

おれはそれを先輩に聞いただした。恋人が居るのに何故他の男と寝たりするのか？と。

「単にぼくがセックスが好きと言うのもあるけど…そうだね、相手の愛情を試しているのかも知れないね」

「試す、んですか？」

就寝すべくベッドに横になった根本先輩は学習机に張り付いているおれをいつも一言呆れた言葉を吐いて寝付く人だが、今夜は珍しくベッドの中で本を読んでいる。

「愛情ほど変わりやすいものはないよ。温度であれ形であれ、たった一つの言葉で浮かれたり沈んだりねえ」相手がぼくのことをいくら愛してゐるって口で言つてもさ、それが見えるわけでもないからね。それに恋人つてさ、すぐくうつるな存在だと思ふんだ。少なくとも…ぼくは三年生だろ？大学は関西の方を狙っているからね。恋人ごっこは卒業したら終わりだよ」

「ごっこ、って…」

根本先輩の実家は三重の鳥羽の方だった。だから関西の大学にと…というのはわかるけれど…

「そんなに簡単に好きな人と別れられるものなんですか？」

「簡単じゃないよ。でも…恋人同士つていつかは別れるもんじゃないのかな。いつまでも愛してるといふ状態の気持ちを持続できるパッションは持ち得ない、と、ぼくは思ふんだ。愛情を信じないっていうのとは違うよ。変わるのは普通だと言いたいだけさ」

「でも、本気で好きになつた人を一生愛したいと思わないですか？だって…期限付きで人を好きになつたわけではないでしょう」

「人間にはもともと期限がある。命っていうね。もつとゆうと賞味期限もある。だから、美味しく感じられる時に食べなきゃ損つてい

う理屈も成り立つ」

「……」

「その逆で、他の甘い蜜には目もくれず、そいつだけを一生味わい続けるっていう希少な動物も……たまにいるのかもね。みなっちはどっちかな？」

「おれは……リンだけでいい。だけど恋愛はひとりでするものじゃない。おれがいくらリンを好きでいてもリンがおれをずっと好きでいてくれるとは保証できない……」

「保証どころかさ、本当に相手が自分を好きなのか？自分は本当にこの相手を好きなのか？いつだって揺れ動いているものだよ、恋って」

「先輩は自分がどう思われているか、本当に愛されているのか……不安にならないんですか？」

「なるさ……不安で仕方がないさ。だからいつ捨てられてもいいようにね、自分が惨めにならない方法を考えるのさ」

「……」

「どっちみち人間っていう奴は独りで生きるしかないんだと思うよ。どんなに好きあってもね」

先輩は読んでいた本と閉じると「おやすみ」と、布顔が隠れるぐらいに布団を引き上げて眠ってしまった。

暗くなった部屋の中、机のスタンドだけが煌々と明るい。おれは開いた数学の問題集を見つめた。

今のおれは問題集より遥かに難しい問題に頭を抱えている。

先程の先輩の言葉は「恋」に浮かれている自分には理解しがたいものではあるが、もしリンを失ったらとても生きてはいけなさとさえ思えるおれは、もう孤独な自分など見たくもないと思うのだった。

第二章 焦点（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsetter.nal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

リンの誕生日は四月十四日。平日だったがどうしてもリンと過ごしたくて、リンのマンションでふたりだけのパーティを催す事にした。

平日の外泊は禁止されている。

根本先輩に相談すると彼はニヤリと笑い、

「じゃあ、今晚、みなっちがリンクんにめっちゃ熱いサービスするって約束するのなら、後はまかせてよ。ついでに、熱い一夜を僕にもれなく詳細に話して。参考にするからさ」

「…なにひとつ先輩の参考にはならないと思うけど…」

「いや、あのリンちゃんだよ？どんなワザを持っているのか知りたいじゃない。みなっちは初めてだからわかんないことだらけだけど、宿禰はねえ。正直さあ、みなっちは宿禰みたいな経験を積み上げた奴を最初の男にしておいて良かったよ。ぼくなんかさあ…相手がウブ過ぎて、困る事いっぱいあるからね」

「最初の男って…」

そういうもののなか…まあ、そうかもなあ。おれのセックス恐怖症もリンのおかげで治ったようなものだし。

「おれにとってはリンが最初で最後の男にしたいですよ」

「そうなるといいけどね」でもね、人間って不思議なもので、ひとりだけを相手にしても飽きちゃうんだよ。リンクんだってさあ、みなっちが新鮮なうちはいいいけど、そのうち飽きるかもね」

「…うるさい」

それだけでなくも自信がないのに煽らないで欲しい。

しかし、確かに根本先輩の性教育は役に立ってはいるし、相談や寮の融通もきいてくれるのだから、これ以上の強い味方はいない。

それとは別に、両親がこういうおれの生活を知ったら何の為に高

い金を出してココにやっているのかと怒髪天間違いないな、と、i
ポットを耳に嵌めて踊っている先輩を眺めながら笑いを堪えきれな
かった。

食事の用意はリンに任せて、夕方、おれはケーキを買ってリンの
マンションへ向かった。

玄関であの時の女の子と偶然出会い、ドアと一緒に潜り抜けてエ
レベーターに乗り込む。

「今日も凜一お兄ちゃんのところ？」

「…そうだよ」

「…本当に凜一お兄ちゃんのためのお友達？」

「只って…」

「親友…」

「ふん。まあ、いいわ。でもお兄ちゃんのお嫁さんはあたしだか
らね」

「…」

「知ってる？男のひと同士は結婚できないのよ」

「…知ってます」

彼女は勝ち誇った顔をしてエレベーターを降り、手を振って見送
ってくれた。

「…なんだか疲れた。」

リンの自宅に伺い玄関に入ると、リンはおれを抱き締め歓迎して
くれる。

それだけで満ち足りた気持ちになれる。

さつき、学校の温室で合ったばかりだというのに、なんでこんな
に嬉しくなるんだらうか。おかしくて吹き出すと、リンも同じよう
に思ったらしく顔を見合わせて笑いあう。

こんな風にリンとふたりだけでずっといられたら…と、心底願っ
ている自分に呆れたり胸が高鳴ったりと忙しい。

食事の用意を手伝いながらエレベーターで出会った女の子の事を話すと、

「ああ、10階のミキちゃんだ。女の子はあのくらいが一番かわいいよね。純真さだけじゃなくてちよつとした媚態も備わっていてさ。俺を誘惑したりするんだぜ、小学一年でさあ。プロポーズもされたしなあ」

「すべからく色んな奴にモテて、さぞいい気分なんだろうね」
面白くなってつい嫌味たらっしい言葉が口をついた。

「…なんだよ、妬いてるのか？ミナ。相手は小学生だよ？」
「べつつに…妬いてないもん」

強がり言うおれを口端だけで笑い、リンはおれの頭をポンポンと撫でる。

「そんなに心配なら、今度ミキちゃんに言っておくよ。恋人ができたから将来の約束は反故にしますってさあ」

「そんなこと…言わなくていい」

俯いたまま赤くなった顔を上げられないでいた。

リンはおれを背中から抱き締め、「愛してるよ、ミナ」と囁く。

おれは泣きそうになる。

嬉しさと切なさと不安で…息が止まる。

言葉なんていらないから、おれの傍にずっといて欲しい。

手巻き寿司とすまし汁にポテトサラダ、それにおれが買ってきたケーキでリンの誕生日のお祝いをした。

「いつもは誰かにお祝いしてもらっているの？」

「うん。去年は兄貴がいたからね。食事に行ったかな。兄貴がいな
い時は、行きつけのジャズクラブで、お客さんやらなんやらで盛大
にお祝いしてもらってた」

「ジャズ…」

こういう時…

おれの知らないリンの世界には、沢山のリンを好きな人がいるの
だろうなあと思い知らされる。

おれが知っているリンはまだ出会って一年、付き合うようになって半年程だ。

何も知らないくせにリンを独り占めしようとするおれは貪欲な人間に思えて仕方がない。

「リン、誕生日のプレゼントだけど…」

おれは自分で描いた絵をリンへの誕生日のプレゼントにした。

クリスマスのにリンから貰った色鉛筆を使って描いたものだ。

温室の草花をカラージュ風に纏め描いたものだが、納得がいなくて美術部の先生に指導を受けた。先生は美術部への入部を盛んに勧めるが、おれは丁寧に断わり続けている。

関心が向くと気が済むまでのめり込むのが自分の性質だろうと感じていた。だから、勉強以外に懸命になりそうな事は避けなきゃならない。

と、言っても今のおれは目の前の奴に懸命になっているから、今までのおれ自身への忠告は恋愛には敵わなかった事になる。

リンはおれのプレゼントを喜んでくれたが、「俺の肖像画を期待していたけど…」と、言われ口篋ってしまった。

本当にはリンを描いた絵をあげたくて、何度も試してみたのだが、何枚描いても少しも気に入った風には描けなくて、断念したのだ。

「この次は…頑張るよ」

残念そうに口を尖らすリンに、おれは済まない気持ちで一杯になる。温室であれだけリンをモデルにデッサンしていたのだから仕方ない話だ。

ケーキを切り分け、食べているとリンの携帯電話が鳴り、リンは「あ、慧だ」と言いつつ嬉しそうに電話を取った。

慧というのは慧一、リンのお兄さんだってことは知っている。リンの誕生日にわざわざアメリカから電話してくるなんて、よっぽど弟がかわいいのだろう。

そりゃそうだろう。リンは綺麗だし、そこに居るだけで陽が差し込むように際立った輝く者なのなもの。お兄さんだって、誇りに思うことだろう。

「誕生日のお祝い？」

携帯を切ったリンに話しかける。

「うん、朝起きたばかりだって」

「リンは愛されているんだね、お兄さんに」

目の前のケーキを突きながら、おれは羨ましげに言う。こついち嫉妬するのも自分自身癪に障る。

「実はさ…春休みに兄貴のところへ行っていただろ？」

「うん」

「それで、ミナのことを聞いてもらっていたの」

「え？なにを？」

「ほら、俺たちうまく…セックスできなかったじゃん」

「…」

「だからさ、慧にどうしたら上手くいくかなって相談してた」

「…マジで…」

おれは羞恥心のあまり、青くなったり赤くなったりとぐるぐるしてしまふ。

なんでそんなことを平気な顔で言えるんだよ。

「おかげさまで上手くいきましたって言うといたから」

「よ、よく…そんなこと身内に話せるね。恥ずかしくないのか？」

「なんで？だって俺はマジで悩んだし、ミナだってネコ先輩に相談したって言ってたじゃん」

「おれは…身内じゃないもん。根本先輩はおれたちの事を心配してくれてたし、親兄弟とは全く別物だよ」

「そうかな…俺は俺の好きな奴のことは慧にも知って欲しいって思っているんだけど…できるなら家族に、というか沢山の奴に理解してもらった方がいいと思わねえ？」

「そりゃ…」そうだけど…

普通は喋らないもんだよ。付き合っている奴とのセックスの事なんか。

リンは相変わらず普通とはどこか感覚が違い過ぎるところがある。

「リンには、お兄さんは特別なんだろうね」

嫉妬も交え、少し呆れた風にぼやくと、リンは嬉しそうに、

「慧は俺にとつて、なくてはならない自分の一部みたいなもんだろうね。遠く離れてても繋がっているような気がするよ」

「…そう」

じゃあ、おれは…おれはリンにとつてどういう存在？お兄さんとおれのどつちが大事？

…まったく不毛な問いではあるが、喉元まで出掛かって飲み込んだ。

どうせ答えは決まってる。

「慧は慧だし、ミナはミナでしかない」と…

その夜のふたりの熱さときたら途轍もなかった。まだ外はこの季節、二番目の春の嵐に吹き荒れているっていうのに…

お互いに求め与え合い、どこまで行けるのだろうと声にした。行けるところまでだよ、と、どちらかが言った。

最後に叫んだのはおれの方だと思う。

堪らない…いい…大好きだ…リン。

どこまでリンを好きになれば気が済むのだろうと、おれは自身の感情の未熟さに怖れをなした。このままではリンがおれから離れていく時、おれの心臓は止まってしまいかもしれない…と。

2（後書き）

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsesternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございま

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

注意：全くだいたしたことのない18禁。

3、

新学期早々の校内模試の結果が張り出された。

学年の順位は各自全員がプリントを貰うことになっているが、学校側としては掲示板に張り出し、意識的に生徒達を競わせようとする思惑もあるのだろう。

その上、一位から10位までは大文字で表してあるから、見ようとしなくたって目に入る。

リンと引きこもって勉強したおかげかどうかは知らなかったが、おれの点数は二位をかなり引き離してのトップだった。

おれはさして順位に興味はないのだが、何とはなしにその順位表を見ると、宿禰の名前が9位にある。

あいつは良くて30位前後って言うていたから、これは大躍進だ。なんだか自分の事より嬉しくなってしまうた。

放課後、温室でそのことを言うと、

「いや、俺の実力と言うよりミナの教え方が良かったんだよ。ミナは先生向きかも知れないぞ。でも、今は俺専用でいてくれよ。他の奴がミナと顔を突き合わせて教えてもらってるって思うと俺も気がじゃない。ミナは時々エロっぽい顔をする」

「エロっぽいって…してないよ、そんなの」

「自分じゃわからないだけだろ。眼鏡はしてるよ。おまえは目に色気があるからな」

「そんなこと言うのはリンだけだよ。それに色っぽいのはリンの方だ」

「まあね、俺はエロいことしか考えてねえから」

トラウザースのポケットから煙草を取り出し一本に火を付ける。
ピアニッシモのメンソールの煙があたりに漂ってくる。いる？と顔
で聞くから、リンの吸った煙草を貰う。

リンの身体に軽く凭れながら紫煙の行方を追うのが楽しい。

リンももう一本煙草に火をつけると、おれの肩を抱いて煙を吐く。
ふたつの紫煙が絡まっていく様に見惚れていると、リンが口を開
く。

「それより…おまえのクラスに高橋とかいう奴いたよな。今回も二
位だったろ？いつもおまえのすぐ後ろにいるから付いたあだ名が『
水川の子魚のふん』」

「そ、そうなの？…それはあんまりだろう」

同じクラスの高橋は何故かおれに敵対心剥き出しで、事あること
に突っかかってくるから、おれも出来るだけ近づくのを避けている
のだが、そんなあだ名をつけられるのはこっちが迷惑だ。

「あいつが何かとおれに言いがかりをつけてくるのは、そういう風
に言われているからなのか？おれは試験の順位なんて気にしてない
けど…」

「今回俺が9番にいたからかね。そのとばっちりがきた」

「…え？」

「ついさっき、その高橋とすれ違い様に俺の方をめっちゃ睨んで『
水川と楽しくやっていられるのも今のうちだからな。おまえなんか、
顔だけの男だ』…と、言ってくれた」

「は？」

「あれは逆に俺の顔がいいと褒めてくれてるんだろうか。…面白
い男だな。残念だが、こっちは全く趣味じゃないけどな」

「…」

「同じ眼鏡でも俺のミナとは雲泥の差だな」と、俺の髪を軽く撫で、
額にキスをする。

恥ずかしがりもせずにそういう殺し文句が許されるのも高橋流に言えば顔だけの男だからか？

しかし一寸の躊躇いもなく「俺のミナ」というリンが、好きで堪らない。

絶対に負ける。

おまけに…

「ね…ミナ」

リンの指がおれの首筋を撫で、その後をリンの口唇が追う。

「少しだけ…ね」

上着を着てなかったのが災いしてか、リンの手は早くもおれのシヤツの中にある。しかも、もう一方の手はベルトにかかっている…

「リ、リン…誰か来たら、やばいよ」

「大丈夫。来たら誤魔化すから」

「…」

どうやって？と、反論する気も失せる。

だっておれの方が我慢出来なくなる。

「かわいい、ミナ。大好きだよ。他のやつにこんなことさせるんじゃないよ」

「リン…」

トラウザースと下着を脱がされ、リンにしがみ付き、抱えられたこの格好は絶対おかしい。

なんか…変態にでもなった気分だ。

「あの高橋って奴だって、おまえとこういう事したいのかも知れないんだぜ、本当のところは」

「ま、さか…」

「本当さ。ミナは自分の魅力がわかってないんだよ」

そんなのどうでもいい…中が疼いて仕方がないから…早く…

「リン…頼むから…」

おれの腰を強く引くリンの首筋に思い切り歯を立てた。そうしなきゃ理性が保てない。

最も理性なんかとっくに無くしている。

「い、いつてーっ!!」

温室にリンの悲鳴が響いた。おれは理性を総動員してリンの様子を伺った。

リンは涙目で

「おまえ…は…吸血鬼かつ!」と、詰られた。

リンの首筋を見ると…それはそれはくつきりと鮮やかに鬱血した状態でおれの歯型が浮かんでいる。

「リンが悪いんだよ。おれの理性を飛ばした張本人だもの」

悪びれずに言うと、リンも負けずに

「じゃあ、お返しにこのままでもう一回。嘔まれないように後ろ向きでね。今度はおまえの声を聞かせろよ」

感情に任せてどうにでもなれというのは敗者の言い分だ。

おれは最後まで理性を保ったまま、声も上げずに歯を食いしばった。

何故なら…

9位の奴には負けたくなかったからだ。

3 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowsesternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございま

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

4、

6月の後半に催される文化祭に、クラスの美術部員から出展が少ないからと、絵を頼まれた。

それでもなくてもこの文化祭のポスターは美術の授業で全員に描かれた文化祭のポスターのうち、おれが描いた絵が選ばれ、印刷されたそれがあちこちの壁に貼られている始末なのに、これ以上美術部に関わるのは、折角歯止めしている絵への執着を再び燃やしかねないと断ったが、顧問の先生にまで頭を下げられ、仕方なく引き受けた。

休み時間や放課後リンが部活で温室で会えない時は美術室に残って、水彩画を描いてみた。

回りの美術部員は油彩に取り組んでいて、その存在感の違いに圧倒される。

はやり水彩と油彩では比較にならない。

先生は試しに油彩をやってみるよう薦めるが、それに手をつけたら後へは引けない気がして躊躇してしまう。

おれは描きかけの温室の花を水彩で色を塗り、提出した。

文化祭ではおれらのクラスは珍しくも無い喫茶コーナーだった。

リンのクラスは焼き鳥やで繁盛していた。リンの姿を辺りに探してもいない。

「詩人の会」は教室を借りて朗読会をすると言っていたからそこだろうと足を向ける。

飲み物が出るものの150円も出して詩を聞く奴がいるのかと訝るが、様子を伺ったら人が一杯で驚いた。

俺はリンから貰ったチケットを出して後ろの方に立った。（実は椅子は全く空いていなかった。しかも父兄というか…ほぼおばさん

たちと校外の女生徒らが占領していた…そして壁に張り付く男子学生…おれも含めて…)

これはもしかしたら…リン狙いじゃないだろうか…と、不信に思っている、その当人が教壇に恭しく立ち、そして詩集を手にくっくりと読み始める。

「ジャン・コクトーの詩集から…」

部屋に広がる心地よいテノールの声…

「嬉しいこともしすぎると 僕らの幸福に傷が付く」

(彼はここでおれにむかって軽くウインクをした。)

「僕の命の蜜蜂よ、どんな悪事を君らはしたか？」

君らの空ろな蜜房が 罪の棲家である以上

僕はもう 幸福になりたいなどと 願いもしまい…」

6月恒例の三者面談に親は来ない。と、いうか呼んでいない。

トップでいる奴に先生も親も何かを問う必要があるだろうか。

あなたたちの望みどおりの大学を受験し、しかも当然合格する一定の成績を持つ俺に、一体何を求めるのだろう。

担任の藤内先生も親が来ないことに文句を言わない。おれに対しても今までどおり成績を下げる事のないように油断なく頑張れと言われた。

ただ…「水川は恋に浮かれても、ちゃんとやる事はわかっているから見直したよ」と、韻を含んだ言い方をされた。

「…浮かれてなんかいません」

「そうか？近頃の温室の花はなんだかやけに艶めかしい色をしている気がするけどなあ」

藤内先生はおれ達が温室で何をしているのか知ってるのか？

まさかリンとあんな事やってるところまで見られているとは思わないけれど…

やっぱり学校内でやるのは控えたほうがいいな…

「ちゃんと世話をしているから、花も綺麗に咲くんですよ」

「恋の花も綺麗だろうが、いつか枯れる時が来る。それを見計らっておけよ」

「恋愛の未来を予測して計算どおりにいつて、何が見つかるんですか？それはおれが求めているものなんでしょうか？…おれは計算どおりに出した答えを望んではいけません。違いますか？」

「いや…驚いたね。水川がそこまではっきり言い切るなんて。恋の力は偉大だな」

「先生。おれはあいつを好きになったことを後悔することはないと思います。もし…花が枯れてしまっても…根があればまた育ち咲くかもしれない」

「そうだね。季節と共に花は姿を変えるが、その花の名前は変わらないもの…水川という花も、自分を失うことなく変わらずに咲き誇って欲しい」

放課後、温室でリンを待っていると、リンも面談だったらしい。しかも担任の藤宮先生になにか言われたらしくえらく機嫌が悪かった。

おれが藤内先生に言われたことを言う間も無く、おれにしがみ付いてくる。

乱暴にキスを求めるリンを責める気には到底なれない。

おれはリンを抱き締めた。

「ねえ、リン…おまえが好きだよ。どんなリンでも、おまえに触れられていられるだけで、おれは自分の存在価値を見出してしまっただ…それってある意味究極の幸せって気がしないか？」

リンは俺を見つめ、そしてゆっくりと見事な笑顔をおれに向けた。

「愛してるよ、ミナ」

その言葉は俺の中で形になる。
どんな形にも属さないシンプレクテック多様体。
さあ、美しい座標を描け。

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

5、

高校二度目の夏季休暇が始まった。

去年と同じように、学院の特別講習の受講の為、おれは実家へは帰らず寮から学校に通う毎日だ。

去年と違うのは授業の選択だ。

国立大学希望者は文理に関係なく全科目の講習を受ける事になる。今年は午前も午後も拘束されるわけだ。

温室でリンと会う回数は少なくなるが、仕方がない。

どっちみち…

毎週末ではないが、月に二回はリンのマンションへのお泊りコースを選んでいる。

同室の根本先輩は恨めしそうに、

「君たちはいいなあゝ恰好のラブホテルがあつてさ。時間もお金も気にしなくてもいい。何より親がいないなんてさ。これ以上の環境はないじゃない。真に羨ましい限りだよ」

「先輩は寮全室がラブホテルじゃないですか。節操がないんだから。それに…ケンカでもしたんですか？保井先生、近頃機嫌悪いみたいとばつちりが来る前に早く仲直りしてください」

「保井は僕を縛り付けただけなのさ。僕は敬虔な使徒じゃないものの。移ろいやすいカナリヤさ」

「…カナリヤって、籠の鳥の比喻ですよ。むしろ自由の象徴はカモメでしょう」

「やだよ。みなっち、チエーホフのかもめ知ってる？剥製になるんだよ。自由のために羽ばたいた一羽のかもめが男のために剥製にされる悲しさよ…いつだってか弱く美しい者は虐げられる運命なんだ」

「…誰がか弱く美しい…だよ。」

確かに根本先輩はそこらへんのアイドルよりかわいって言われるけれど。それに「かもめ」ってそんな話だったか？

ベッドに突っ伏して泣きまねをする先輩の背中を見ながら、ストリーを追いかけてみるが思い出せない。いいや、後でリンに聞こう。

おれはいつものように勉強道具だけを持って部屋を出る。

「じゃあ、行ってきます。届けには実家に帰りますって書いてますのでよろしくお願いします」

「かわいそうなぼくを見捨てていくの」

先輩はオーバーにうつ伏せて泣き叫びながら、手を振ってくれた。…実にイイヒトだ。

リンのマンションには何度も出向いているけれど、どうしても慣れない。

いつの整然としててキレイだし、なんだか人が住んでいると滲み出る汚れというものが極端に少ない。それを問うとリンは「こう見えてもおれは案外神経質でね。見えるところに余計なものを置きたくないんだよね。それにひとりだから使う空間も少ないじゃない。」

俺、家では煙草も極力吸わないしね。だから綺麗なんじゃないかな」その言葉の裏に存在するリンの孤独が悲しい。

晴れた真夜中、広いベランダでふたり寄り添ってよく夜景を見た。現実の世界、勉強や受験や家族に縛られている自分自身を解放できる気がする。生きているしがらみにも寄せ付けない別空間にいるようだ。

それを言うとリンは笑って「縛られていると思っっているうちが花。何かに縛られている方が…本当は楽なのかもしれない…」

そっというリンの横顔は孤独だ。

おれはいつだってリンの中に孤高ともいえる他の者とはかけ離れた感受性、情感、思考、思想に惹き付けられている。

誰に対しても物怖じしない天性の人懐っこさは、おれみたいな内気で臆病な人間には輝ける存在だし、それでなくてもあの容貌だ。すれ違う半分の人はリンをもう一度見るために振り返る。

表情豊かに雄弁に想像と空想世界を語りつくすリンに、おれも同時に飛翔している気分させられる。

それとは逆に、自分の決めた範囲内に決して近づけない距離感。気に入らない者への無慈悲なまでの冷淡さ。

おれにさえ見せようとしないリンの本当の心の内には一体何があるのだろう。

「8月には兄貴が帰ってくるから、ミナを家には呼べないけど、我慢してくれよな」

終わった後、リンのベッドで身体をくっつけ合いながらリンは言う。

「わかった。良かったね、お兄さんが一緒ならリンも寂しくないだろう」

「…」

「なに？」

「もつと、寂しがって欲しいっていうか…残念って顔するのかわかったら、意外だった。本音は解放されて嬉しい？」

「そんなこと、あるわけがなかるう。たださ…」

「なに？」

「…なんでもない」

「言えよ」

「もう眠たいからさ。眠ろうよ。ここに来なくなつて、おれ達はいつだって温室で会えるじゃないか」

「見事にはぐらかされた…まあ、いいけどね」

リンはおれの頭をぽんぽんと叩きながら、サイドテーブルの灯り

を消した。

本当は…嫌だった。

ここに来れなくなるのも、このままセックスを続けてその果てを見るのも…リンのお兄さんがリンと一緒に過ごすのも、そういう嫉妬を感じる自分も…全部、全部おれは…

怖くて仕方なかった…

リンの傍から離れたくない。だけど…しつこくして五月蠅がらる、ちよつとでもおれを煙たがる、そういう素振りをリンがしたらと思うと…とても恐ろしい。

本当にこんなものを抱えて、おれは一生を過ごさなきゃならないのか？

こんなに恋焦がれる奴の…おれを抱き締めるこの腕がいとおしくて、いとおしくて怖いんだ…

お盆休みで一週間ほど実家に帰省した。

相変わらずの親バカの愛情はほどほど頂いておき、昼間は図書館や街をぶらついた。

隣のCDショップでリンに勧められたジャズの曲を探していたところ、後ろから女の声で名前を呼ばれた。

「水川くん？」

振り向くと、どこかで見た顔。

「？」

おれは頭を捻った。

「もしかして忘れちゃったの？」

女は訝るようにおれを睨んだ。…あ、そうだ。

「原田？」

「そう、やっと思い出した？中学卒業してまだ二年も経っていないのに、つれないね」

「…」

「ね、ちょっとお茶でもしようよ。私、青弥のこと、気になっていたんだ」

「…」

面倒臭いと思いつつも、断る正当な理由も思いつかないおれは、中学時代惹かれていた原田理香子の後ろを付いていく。

6 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

6、
直ぐ近くのスタバに入り、おれはラテを、彼女は氷の入ったやつを頼んだ。窓際を避けて、一番奥の静かな席に向かい合わせて座った。

「先週、中学の同窓会があったのよ。青弥来なかったね」

「…学校の補習が忙しくて、こっちに帰っていなかった」

同窓会の連絡はもらっていたけれど、その気が全くなかったので無視していた。大体中学を卒業して二年も経ってないのに懐かしむも何もないだろう。

「いくら進学校でも日曜は休みでしょ？鎌倉だったらすぐに帰ってこられる距離じゃない。私、青弥と会ったの結構楽しみにしていたのに」

「…」

どういう意味かさっぱりわからず、思わず顔を上げて原田の顔をまじまじと眺めた。

顔かたちの変化はよく判らないが、髪が…

「髪、切ったんだね」

「あ…うん、うちの高校、規律が厳しいからね。おかしい？」

「え？別に…」

なんだか髪型がリンに似ているって…そう思ったんだ。

リンの方がもっと黒くて艶やかな気はするけれど…

「え？なんでだ？原田は女でリンは男なのに、なんでおれ比べているんだろう…」

それに、リンの方が圧倒的に魅力的だって…はつきりと感じてしまっ

…だから比べる意味がないだろうよ。バカじゃないのか、おれ。

「…あんまりジロジロ見ないでよ。恥ずかしいじゃない」
「…ゴメン」

そんなに見ていたつもりじゃなかったが、前に座る原田は赤面しながらおれを睨みつけた。

「青弥って中学の時は、私の顔をまともに見ようとしなかったのに、高校になって随分と男らしくなったみたいだね」

「そうかな…」

「ね、好きな子できた？」

「え？」

「もし居なかったら…私ともう一回付き合ってみない？今度は…ちゃんと青弥を受け止めてあげるから」

「…」

おれはゆっくりと目を閉じた。

…何のときめきも高鳴りもない。彼女はもう過去の人でしかなかった。

「ごめん。おれ、付き合ってる相手がいるんだ」

「…そう、なの？」

「うん」

「青弥の高校って男子校だから…てっきり青弥はフリーなのかと思っちゃった」

「結構…多いよ。恋人がいる奴。近くに女子高もあるしね」

「青弥の彼女はその女子高の人？」

相手が男だっていう事は黙っていよう。色々と説明するのも面倒だ。

「いや、違うけど…とても…」

言いながらリンの笑った顔が、思いっきり目の前に浮かんだ。おれは思わず口元が緩んだ。

「大好きなんだ」

「…」

「あ、変な話しちゃったね。悪い」

「あゝあ、また振られちゃった。私の顔をジロジロ見るから、まだ少しは好きでいてくれるのかもって…期待しちゃった」

「…ごめん」

「いいよ。本当は悔しいけど…でもあの青弥をこんなに変えたのがその彼女なら…諦めるしかないわね」

それまで負けん気の強さを漂わせていた原田の空気が一気に緩んだ気がした。もしかしたら彼女は彼女なりにおれに対して精一杯虚勢を張っていたのかもしれない。

おれと原田は店の前で別れた。

「お別れの握手」と、原田が差し出した右手をおれはしっかりと握り締めた。

驚いた事にあの夏に味わった苦さ、惨めさ、自分に対する失望感は、おれの中で思い出として見つめる事が出来るようになっていた。

「元気でね、水川くん」

「うん、原田も」

初恋の人、君を僕の中でひとつの形にする。

小さく輝く硝子の欠片。

お盆休みが終わり、学院に戻った。

補習が終わると温室へ直行だ。

リンはすでに温室に居て、植物にホースで水を撒いていた。

虹色に輝く水しぶきの向こう側で、おれに笑いかけるリンの顔が見える。

「おかえり、ミナ」

「リン…」

手を伸ばすとリンはホースを地面に落としておれを抱き締めた。

「会いたかった、リン… たった一週間会えないだけなのに、バカみたいに会いたくて仕方なかった」

「同じく俺も」

「嘘だ。リンは家族で温泉旅行を楽しんだんだろ？おれのことなんか忘れて」

「なんだよ、家族にやきもちか？本当は家族で行くよりミナと行きたかった。今度いつかふたりだけで温泉に行こう。露天風呂付きの部屋でしっぽりとさあ…」

「言う事が親父過ぎる。スケベ心丸出しだよ」

「ミナだって欲しくてたままないって顔してるくせに…やる？」

「…」

断れるわけがない。

だって、おれの方が絶対に間違いなく…リンを欲しがっている。

それを言うとなんか嫌味つたらしく

「ミナの絶対と間違いなくは信用ならない。何故ならば…ミナは肝心なところで降参してしまうからね、この天邪鬼」

近づいたリンの口唇の熱さにおれは有頂天になる。

その熱さをおれは「恋熱」と呼んだ。

7 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

> i 5 1 9 1 — 2 7 3 <

7、

リンのお兄さんがリン宅に居る間は、おれ達は温室でセックスを
楽しんだ。

と、言っても夏休みは、温室から見える運動場は一日中部活を勤
しむ生徒達が見える。こちらから見えるという事は、あちらからも
見ろうと思えば見えるわけだ。おまけに温室にエアコンなんて付い
ているわけもないから、暑さを凌ぐ為に窓を開ける。

…変な声だつて出せない。

気もそぞろというか、スリルも過ぎると快感より気が散って仕方
がない。

しかし廃屋寸前の温室とはいえ、レトロなレンガ造りでしっかり
した造りになっていて、案外外からは見えにくい盲点の場所もある。
そこに捨てられてあつた机と椅子を置いてその上で…

下半身剥き出しになるのは大体おれの方で、リンはいつも余裕の
表情でおれを翻弄する。

言いように誑かされている気がしてムカつく時もあるが、リンの
いわゆる…慣れたテクニクというか、色んな事にはおれは付いて
いくのが精一杯で言うとおりにするしかないのが実情。

セックスに関してと素人のおれは当然太刀打ちできるわけがない。
。

リンは一体どれくらいの経験をしてきたのだろう…と、時々リン
の過去の相手を妬んだりする。

リンは過去にやった奴とおれを比べたりしないんだろうか。

色々悩むというか…悩んでも仕方ないことだが、焦りや憂鬱は減

りはしないどころか…

おれはリンにとって一番でありたいと…思っている。

思っているがまるで中身が伴わないスカスカのカレーパンみたいな感じがする。

「カレーパン？」「そう」「学食の？」「うん…」「ああ、あれ、当たりはずれがあるよな。具がむっちゃ入っている時とスカスカな時」「そうでしょ？」「変なミナ…なんで最中にカレーパンなんだ…笑うぜ」「わ、笑うな！中、か、感じるから」「ミナが笑わせるのが悪い…ほら…」「…あ、んん」

結局負けるのはおれの方なんだ。でもリンは終わった後、必ず褒めてくれる。

「凄く良かったよ。ミナは最高だ」と。

リンの言葉は何も持たないおれに難なく勇氣と自信を植えつける。それはおれの中で羽を広げ、育っていく。

リンという光を受けて、リンに届くように。

おれとリンが付き合っていることはあまり周りに知られていない。同じ2年でもリンとは教室の階は違うし、校内ですれ違う事があってもお互い手を上げるくらいで話し込んだりは一切しない。

男子校だから男同士の恋人関係も少なくない気はするが、どのカップルも目立つ事は避けているのだろうか、変にいちゃついている現場に出くわしたことはない。

一度、クラスメイトからリンのことを聞かれた。

「水川って4組の宿禰と仲いいの？」

「うん、いい友達だよ」

あまり喋ったことのない興味津々の3人の面々を目の前に、少し顔が引きつったが、おちつけ、平常心だ。

「よく付き合えるな。宿禰って綺麗すぎて近づきにくいっていうか

…なんかあいつ怖くねえ？」

「うん、なんかヤバそうな感じがするよな」

「…別に怖くないし、普通にいい奴だよ」

「中学の時のウワサ聞いてるだろ？」

「ああ、あれな、去年の年末凄かったじゃん。生徒会が必死にもみ消したんだよな」

「前の生徒会長は宿禰と出来てたんじゃないかって噂あったしな」

「…」

「なあ、ホントなのか？水川、知ってる？」

「ああいつの信じる方がイカレてる。何なら宿禰を呼んで来て目の前で喋らせようか？」

「え？…い、いや、いいです」

「あんな綺麗な顔で睨まれたら…想像するだけで恐ろしい」

「それにあいつ、腕つぶしも凄いつて聞いたし…」

「…」

肩を竦めた3人の後姿を一瞥したおれはリンの待つ温室へ急ぐ。

無性に腹が立って仕方なかった。

涙が滲んだ。

あんな奴らの言う事を真に受けちゃ駄目なのに。

リンは今までにどれだけのもつと酷いことを言われてきたのだろうと思うと、心が痛んで仕方なかった。

温室にリンの姿はまだ無かった。良かった…泣いてるところを見られたら、つまらないことを白状しなきゃなくなる。

おれは涙を拭いて温室の花に水を撒いた。

夕刻になると色を変える酔芙蓉の花が赤くなって萎んでいる。美しい花もいつかは枯れる。

いつかは…

「ミナ、どうした？」

背中からリンの声が聞こえて振り返る。少し心配そうなりんに、おれはあわてて笑顔を見せる。

「なんでもない。折角の酔芙蓉が枯れてしまったから、ちょっと残念だ」

「萎んでいるだけだよ。大丈夫だ。明日になればまたキレイに開くよ」

「ホント？」

「本当。それよりさ、いい話があるの」

「え？なに？」

「一昨日兄貴と横浜に買い物に行つてね。抽選があつて、兄貴が箱根温泉一泊ペア旅行券を当てたんだよ」

「へえ、すごいね」

「その当たり券をおれ達にくれるって」

「え？」

「ミナと一緒に行ききたかったから丁度良かった。勿論行くだろ？」

「…本当に？すごい…嬉しいよ、リン」

「箱根なんて珍しくもないだろ？」

「そんなことはない。リンと一緒に泊りできるんだよ。すごい楽しみだ。でも俺なんかが行ってもいいの？お兄さんに悪い気がする」
「いいんだよ。慧はミナと行きなつて言ってくれたんだから」

リンのお兄さんがおれ達の仲を認めてくれるのは、心強い気がする。だけど、なんだかそれも気が引けて仕方が無い。

だってリンのお兄さんへの愛情はひとかたならないものを常に感じていた。普通の兄弟では考えにくい絆の強さがある。勿論それはリンの生まれ育った環境によるものだろうけれど。それとも兄弟のいないおれだから余計それが奇妙に見えるだけなのかな。

「旅行の日程はこっちで決めていいみたい。折角だ。紅葉のきれいな時期にしよう。いい？」

「うん、リンと一緒にならいつでもどこでも嬉しいよ」

「毎度の事だけど…ミナの無意識の殺し文句には参るね」

そう言っておれの額に軽くくちづけをするリンには到底敵わない。

10月、体育祭が近づいている。

リンも応援団の練習で毎日忙しそうだ。

寮の自室でパンフレットを眺めてみた。

おれは一組でチームカラーは赤。リンは四組で黒。縦列で別れるから同室の根本先輩はリンと同じ黒組だ。

先輩はリンと同じく応援団で…と、パンフの文字に俺は息を止めた。

「ええっ？先輩、黒組の応援団長なんですか？」

おれはベッドで漫画を読みながらせんべいを食べている先輩に向かって思わず叫んだ。

「そんなに驚かなくてもいいと思うけどね。こう見えてもぼくは三年生なんだし、これだけ美人なんだから団長ぐらいは当たり前だよ」

「…そうですか」

この人も大声張り上げるんだろうか。
想像したら笑えた。

「みなうちには悪いけど、ぼくとリンくんのラブラブなダンスシーンで会場を魅了するからね。今年は黒組の勝ちだね」

「会場…はは」

なんかのコンテストか？なんでもいいや。見たくなかったら目を瞑っていよう。

体育祭には生徒の家族や先輩方が大勢集まり、毎年お祭り騒ぎとなる。

多くの演目の中でも応援合戦が一番の花形で、各クラスは半年か

けて色んな見せ方を仕組んでくるから見ものだ。

昨日まで雨で案じていた天気も朝にはすっかり晴れ上がった。

赤組の応援席の大弾幕はおれが中心になって描いたりしたものだから赤組には勝ってもらいたいところだが、いかんせん運動の苦手なおれでは点数は稼げない。応援席の隅っこでみんなの熱戦を見守る事になっている。

二年の演目の時、ひときわ大きく「リンくん、頑張つてー！」と叫ぶ声がしてその付近を見ると、なんだか見知らぬ集団が一角を陣取っている。

渋いオジサンやらちよつと怖そうな人…明らかにオカマっぽいひと…後で聞いたらリンの行きつけのジャズクラブの店長と常連さんだと言う。違和感ありまくりで笑った。

その騒がしいグループの中に、ひとりだけ目立つ男の人がいた。すぐにわかった。

リンのお兄さん…慧一さんだ。

アメリカからわざわざ体育祭の為に来たのかな…

写真では何度も見ていたが、実際に見る慧一さんはそのオーラもどことなくリンに似ていて、他の人とは存在感が違って見えた。

見事に調和された美しい人…と言うしか形容できない姿だった。

それよりももっと驚いたのは、

彼のリンを見つめる眼差しだった。

やさしく慈しむ表情とはまた別の…誰にも入り込む余地を見せない強い一途な想い…それが肉親の愛なのかどうかはおれにはわからない。

わからないが…

ひとつだけわかったことがある。

おれが戦わなきゃならないものは、あの人のリンを想う力…なのだ、きっと。

8 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

8、

リンのお兄さん、慧一さんには一言挨拶をしておきたかった。いつもリン宅へお邪魔しているし、箱根旅行券も貰っている。何よりリンとおれの関係を認めてくれているのだから、お礼を言うのは当たり前だろう。

昼休みの空いた時間にでもと、昼飯を食べに学生食堂館へ向かう。おれの両親は来ていない。

成績のことしか興味の無い人たちだし、おれが体育祭で活躍するところなんて皆無だもの。わざわざ呼ぶ必要もない。

学食に行くと、親と仲良く懇談しながら食べている生徒も大勢居る。勿論そうじゃない奴らも多数居るのだけれど。

そちらのテーブルへ向かいひとりで定食を食う。

こういう時は手前勝手だが寂しいものがある。

友情なんて煩わしいし面倒だと思っているのに（事実そうだ）、独りだと寂しいだなんてさ、勝手すぎるよなあ…

昼食後、リンを探しに行く。

多分慧一さんも一緒に居るはずだ。

教室ではないだろう、と、思い運動場へ出た。

辺りをきよろきよろしていると、校舎の端に騒がしい一団がいた…彼らだ。

さっきのオジサンやらオカマの人、慧一さんも居る。

でかいビニールシートに座って、宴会さながらの賑わいで、飲んだり食ったりしている。

しかし、何人いるんだ？…え？七、八…九…にん？

よく見ると今年卒業した美間坂さんや桐生さんもいる。…一体なぜに？

それに藤宮先生までも…

そっぴいや慧一さんとは大学時代の友人だったと、前にリンが言っていた様な気がする。

しかし、なんとまあ騒々しくも楽しそうな賑わいだ。お花見の酔っ払いの方々みたい。

その中心にいるのは、やはりリンだ。

なんて無邪気に楽しそうに笑っているのだろう。

おれは、リンにあんな笑顔を与えたことがあるのだろうか…

校舎の影に隠れて様子を伺っていたおれは、彼らの前へ出て行く勇氣はとも持てなかった。

おれは黙って教室へ戻った。

昼休み後、プログラムのメイン、応援合戦が始まった。

半年かけて企画、構成を練りに練ってきただけあって、毎年どのクラスも面白いし、感心する。

まず校歌を高らかに歌い上げ、その後一連の様式美を舞い、それから各々の創作ものを見せ合う。

勿論おれが気になるのはリンの黒組で、息を呑んで見守った。

なんか、黒の羽織袴のリンを見るだけで胸が高鳴って仕方が無いかつこいいというか…モデルっぽいというか、ひとりだけ様になりすぎている…見ているだけなのに顔がにやけて仕方が無いから、タオルで顔を隠してガン見してしまった。

周りの奴らの声が嫌でも聞こえてくる。

「やっぱり宿禰は目立つよなあ」そうだろ？あいつは本当にかっこいいんだ。

「同じ高校生なのに、なんでこうも輝きが違うんだよ」バカか。比較対象が悪すぎるだろ。リンは特別なんだよ。

「あそこまで決めてくれるともう、逆にファンになるしかなくね？」
そうそう…え？

「あ！あの人！根本さんが出てきた。すげえ！ドレス着てる。しかも似合ってる。こわ…」ええっ？！

…マジでかあ？

なんかミュージカル風味になっている黒組の創作劇は、有名な海賊映画の曲に合わせ勇壮に踊っている中にドレス姿の根本先輩が現れて（どうも悪者の人質になってる姫を助けるという構成らしいが、そんなことはどうでもいい）、王子役？のリンと踊るといって…たわいもない中身なのだが、リンと先輩がどこをどう見てもえらく様になってしまっていて、会場は笑いから溜息に変わっている始末。おれは…まあ、多少覚悟はしていたから驚きはしなかったが、最後に先輩がリンの口唇にキスをした時はさすがに憤慨した。

応援合戦の成績はもちろん黒組が優勝した。

その夜、同室の根本先輩を罵倒した。

「おれのリンに勝手にキスするな！」

「みなっちのリンくんは喜んでました！公開プレイでしっかり舌も入れたもんね」。彼、初心なミナばかりじゃ飽きるって言ったもん」

「リンは、そんなこと言わないしっ！」

下らない挑発だったがあんまり腹が立ったので、即リンに電話を入れたが出なかった。

完全に立ち直れなくなったおれに同情した先輩は、「宿禰はたぶん家に居ないんじゃないかな」と、気を使いながら言い出した。

「どうして？」

「ほら、彼の知り合いが沢山来てただろ？その人の店に集まるって言ってたから。美間坂さん達も行くって言ってたしね」

「…」

リンは学校の中でも外でも、沢山の友情を分かち合う仲間がいる。

味方がいる。

おれには…おれにはリンしかないのに…

あまりに惨めで涙が溢れてしまった。

おれはこんなにも独りなのに、今頃リンは沢山の仲間に見まれて楽しく過ごしていると思うと、どうにもやりきれなかった。

おれは心の貧しい人間だ。自分から手を広げないくせに、欲しがってばかりいる。

リンは、こんなおれを本当に…
必要としてくれるのだろうか…

9 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

http://ncode.syosetu.com/n8107
h/

宿禰慧一編「GLORIA」

http://ncode.syosetu.com/n8100
h/

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768
i

9、

翌日は代休、次の日もリンには会えなかった。

携帯で連絡を取れば簡単だが、一度取ってもらえないとその後、続けてこちらから掛けるのはなんだか気が引けた。

金曜日になってリンから「週末においでよ」とメールを貰った。少し時間を置いて「実家に帰るつもりだったけど…行くよ」と返事をした。

本当はすぐ会いたくて、リンのぬくもりが欲しくて堪らないくせに、本当におれは素直じゃない。

マンションへ行くまでは、リンに会うのは何だかひどく久しぶりで少し緊張した。

体育祭までの3日ばかりはお互い忙しくてゆっくり会えなかった。

リン宅へ行くといつものようにリンはおれを抱き締めて迎えてくれた。

だけど何だか…少し元気が無い。

一緒に昼飯を作りながら、おれは体育祭の日に携帯電話で連絡したのに返事が無かった事を責めた。

「あ、ごめん。俺、出かける時はバイブにしてるからわかりにくいんだよなあ」

「でもその後履歴見て…確認するだろ？」

「…あんまり、気にしてないから…見ないで消したかも」

「…ひどいよ」

「あの日は大変だったんだ。サテュロス、ああ、前に言ってたジャズクラブのね、連中が体育祭に来てくれて、それで終わった後、

お疲れ会があつてさ。新橋の店まで連れて行かれてね。美間坂さんと桐生さんも一緒になって盛り上がったんだ」

「…すごく目立ってたよ、あの一団」

「俺が応援合戦に出るって教えたら、見たいって言い出してね。俺、親に運動会や学芸会って来てもらったことがないからさ。そういうのを氣遣つてくれたのだと思う。あの人たち本当に優しいから」

リンの過去の事を言われたら、おれは何も言えない。

質素で平凡だが、おれは親の愛情は十分受けて育っている。

もしかしたら、うちの両親も少しは見たいと思つたのかな…なんだかリンに感化されて良心が痛んだ。

食事が終わった後、リンとリビングのソファで抱き合った。

やっぱりリンはいつもより少し影が強いみたいだ。

おれはリンとキスをしながら、なんとなく聞いてみた。

「体育祭、お兄さんも来てたね」

「うん」

「アメリカから？」

「予定は無かつたんだけど、急に前日に帰ってきたの。びっくりしたよ。俺の応援合戦をどうしても見たかつたって。それで次の日帰っちゃった…」

「そう…挨拶ぐらいしたかつたな」

「…うん」

「リンが元氣ないの、その所為？」

「そう…かもしれない。色々、考えるよ。ミナに言う事じゃないかもしれないけど。俺はどうしても慧に対して負い目がある」

「負い目？」

「そう。慧と梓の中学、高校時代は俺を育てる為に口々に学校行事に参加していない。慧一は特に…部活も修学旅行も行っていない…放課後すぐ帰宅するから応援団やら、そんなものは一切していなかった。一番楽しむことのできる青春時代を彼は俺の為に味わうことが

出来なかった。どれだけの犠牲を払って俺を見てくれたのだろうと思うとね。俺はどうやって彼に返したらいいのか…考えるんだ」

「…慧一さんは、嫌でリンを育てていたわけじゃないんだろ？部活や学校の行事より、リンの世話をすることが大事だと思っただよ」

「それに返すっていつてもさ。親が子供を育てるって、別に何かを返して貰いたいからじゃないだろ？ごく自然の母性愛みたいなものだろ？リンのお兄さんだってリンに見返りを求めてなんかいないと思うよ」

リンは目を伏せ苦渋の色を浮かべて僅かに呟いた。

「…慧は…親じゃない」

「リン…」

リンはそれっきり何も言わなかった。

その晩、おれ達はセックスをしなかった。

マンションへ来る度に必ずするというわけではなかったけれど、疲れてもいないしケンカをしているわけでもない。

ただ…その夜、リンに情欲の気配はなかった。

翌日、リンは昨夜の暗い影を引きずってはいなかった。

箱根へ行く計画をおれに色々と説明しながら、楽しそうに笑ってくれた。

おれはその笑顔に酷く安心してしまい思わず涙ぐむと、リンは「ごめんね」と、一言言い、おれを抱いてくれた。

リンの腕も身体も細い。おれもそう。だから、お互い頼りないなあと笑う。

だけどおれは…強くなりたい。

自信なんて粒ほどもないけれど、おれはリンを守りたい。

その為に強くなる。

リンの胸の中でリンに揺さぶられながら、おれは強く祈り続ける。

旅行は十一月の学院の創立記念の休日を使って、前日の夕方、学校が終わってから出発した。

待ち合わせの駅でリンは革ジャンでかつこよく決めていた。

リンはおれを見ると呆れたように呟いた。

「なんで一泊なのにその荷物なの？」

おれは大きなリュックを背中に抱えていた。

「だって…着替えと勉強道具にスケッチブック…と、お菓子みたいな…」

「お菓子まで？…はは」

弾けたように笑うリンを見て、おれも一緒に笑った。

9 (後書き)

筆者のBLOG「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blog57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

10（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

> i 5 1 8 2 — 2 7 3 <

10、

箱根湯本までは一時間程で着く。

「旅館へはバスの方が駅からは近いけど、やっぱり登山電車かな。時間はかかるけどそれでいい？ミナ」

「うん。乗りたい」

登山電車は思っていたよりこじんまりとして遊園地の電車みたいと口元が綻ぶ。

日没は早く、辺りの景色はもう味わえない。

客も少ないからリンとくつついて座った。

おれ達は人前では絶対に身体を触れたり手も握ったりしない。そういう風におれが頼んでいるからだ。

リンは人前でも平気だろうが、おれは他人の目が気になる。

誰が見ても男同士だとわかるおれ達を、他人はどう見ているのだろうかとか、変なかんぐりをしないだろうかとか…いや変なかんぐりは当たっているけれど…

気にしすぎと言われても、おれは普通でありたい。

下らない見栄だし、嘘をつく意味があるのかと自分自身を罵りたくなるけれど、やっぱり世間の目が怖いんだ。どうしようもなく…

リンは「別にミナがそう思うのは当たり前だと思うよ。俺は気にしないから大丈夫。ミナに合わせるよ」と、平気な顔をする。

リンが平気なのはそういうゲイだとかを含めたとしても、リン自身が魅力的なのだから彼の尊厳を少しも損なうことはないと感じさせられるからだ。おれには無理だ。おれは普通の常識的な人間であることが、おのれの意味を示すことのような気がするのだ。

「箱根が初めてなんて珍しいね。俺は小学校の修学旅行やら、親戚連中と4、5回は来てる」

すっかり日が暮れた外を見ても景色は判らないが、そうしても目は窓の外を向く。

ガチャリガチャリと登山電車のスイッチバックの切り替えて進路が逆方向に変わる。

「おれんとはは小学校は水戸で、中学は信州だった」

「俺は中学の時は行ってない。不良でしたので」と、舌を出して笑うリンに暗さはない。

どんな不良なのかおれには全く想像できないけれど、リンがどんな過去をもつていようと、今のリンを構成しているのならば否定することはない。

おれにとって大事なものは、今のリンの存在なのだから。

小涌谷で降りた。辺りには誰も居なかったから、暗い夜道をふたり手を繋いで歩く。

「たぬきが出るかも」「へえ、見たいね」「いのししも出るって。でも襲ってきたらたまったもんじゃないけどな」「それはちよつと怖い…逃げたら間に合うかな?」「さあ、無理かもなあ。それより、寒くない?」「おれは一杯着てる。リンこそ薄着だろ?大丈夫?」「ミナの手があったかいから平気だよ。でも旅館に着いたらすぐに風呂につかるうぜ」「うん」

山なりの小道を15分ほど歩いたら漸く旅館の全景が見えてきた。一目見て格式のある老舗旅館だとわかる。

独特な和風建築の玄関に入り、宿の方々の丁寧な歓迎を受ける。リンがフロントで受付をしている間、おれは靴を脱いで広い板張りのロビーをウロウロと見学する。一つ一つの調度品が時代物の骨董品らしくてなんだか大正時代にスリップしたみたいだ。

「ミナ、おいで」

リンが呼ぶ。

「離れのお部屋だつて」

「へえゝすごい」

おれは仲居さんの後に続くリンの少し後ろを付いて行く。時折後ろに居るおれを確認するように振り向くリンがたまらなく好きだ。

案内された離れは間取りも広く、風呂も内風呂と露天と二箇所あって景色も良く見える。庭は真っ暗だけど照明に照らし出された紅葉が少しだけ見える。

広縁の籐の椅子に座って庭を眺めていると、リンの姿が見えない。
「リン、どこだよ？」

「ミナ、早く来いよ。俺、もう露天に入ってるから」
…早い。

さつき仲居さんが出ていったばかりなのに…

おれは玄関の鍵を閉めて、脱衣所で服を脱ぐと浴室へ向かった。
内湯から露天までは敷居もなくそのまま繋がっているから、内湯で簡単に身体を洗ってリンのいる露天に向かった。

「リン、早いよ」

「早く温まりたかったの。ミナもおいで」

差し出す手につかまりながら、ゆっくりと湯に入る。

「熱いね」

「源泉掛け流しだつて。すぐに気持ち良くなるよ」

家の風呂と違って外の暗さと薄暗い照明の所為で妙にリンが色っぽく見えて仕方が無い。

「眼鏡つけたまま？」

「うん、初めての場所つてなにがどこにあるのかわからないからね。蛇口の場所も見えないんだもん。それにお湯に濡らせば曇らないしね」

「そりゃそうだけどね…でもまあ…外さねえと、色気が足りねえ…かな？」と、言ってるリンはおれの眼鏡を外して、後ろからおれを抱

き寄せる。

「リ、リン…しないよ。ご、はん、部屋食でしょ？」

夕食を7時に予定していたからもう30分もない。リンのが立ち上がっているのは判るが、今は困る。

「そうだね。夕食が終わったらいっぱいしような。あ、でも大浴場もあるから、そこへも行こう。折角だしね」

「うん」

いつもながらリンは潔い。おれがうじうじ悩んでいる間に自分のすべきことを決めてしまう。

おれ達は充分に温まり、お互いの身体を洗い、軽くキスをするだけでさっさと露天から上がった。

「え…これなんだろ」

「献立表に書いてあるよ。え〜と、こつちが鮎味噌で、こつちが鰹かな？」

「はあ…なんか珍しいもんばっかで…どれから箸をつけていいのか悩むね」

ふたつある和室の広い方の部屋で食事を取る。たぶん狭い方はお布団を敷くんだろうな。

広いテーブルに載りきれないほどの豪華な料理が次から次へと出てくるから、啞然とする。

「料理がいいとリピーターが増えるっていうからね。今はどの旅館もこんな感じだよ。ミナは家族旅行はしなかったの？」

「父の会社の保養所は行った事あるけど、こんな豪勢じゃないし…それも小学生の頃に2、3回で。親父は根っからの技術者だから家庭サービスには向かないタイプだね。母親もおれもそういうのをあまり気にしてはいないからいいんだけど…だからかな…リンとこんな風に贅沢させてもらうのがとっても不思議だよ」

「俺も親父が再婚してから家族旅行へは行くようになったんだ。親戚連中とも最近は付き合うようになったけど、とにかく昔は俺が手

をつけれないどうにもならないガキでさ。思い上がっていたから目に余っていただろうね。今になって考えるとちゃんとかわいがつてもらっていたのに、あの頃は同情なんかいらねえって息気がつてね。伸ばされた手をことごとく払いのけていたんだな」

「リンは今幸せなの？」

「うん、すごくね。大好きな奴とこうして向かい合わせで箸を突きあうなんてさ、これ以上の幸せはないよ」

恥ずかしげも無く言い切るリンを正面切って見れないのはいつもの事だが、リンはわざと赤面するおれの顔を覗き込んでからかうんだ。

食事が終わった後はお腹が落ち着くのを待って、大浴場に行った。平日でお客さんはそんなに多くない。気持ち良くお湯に浸かっていると、品の良い老年の方が声をかけてくる。

「きれいな坊やだね。女の子かと思いました」とリンと見て笑う。

リンは長い髪を髪ゴムでポニーテールにしているのに確かに顔だけを見たら女子に見えるかもしれない。

「小さい頃は良く間違えられましたけどね」

「学生さんにお見受けするけれど、家族で来られたの？」

「いえ、従兄弟と二人です。明日は学校はお休みなんです。ここのクーポン券を貰っていたので、ふたりで来たんです」

「そう、今は紅葉が見ごろだから、どこを観光しても美しいですよ。でも若い君達には退屈かもしれないね」

「いいえ、紅葉を楽しむに来たんです。彼は絵を描くんです。いい穴場があったら教えていただけますか？」

「絵を描かれるの？それじゃあ…」

リンは知らない人と直ぐに打ち解けて仲良くなれる体質だ。さつきも仲居さんが食事の用意をしていると、彼は仲居さんにこっそりと小さなポチ袋を渡していた。何かと聞くと「心付けだよ」。

要はチップみたいなもん。ちょっとした金額でも、その気持ちが接待に繋がるって、ママさんがゆってた」

「和佳子さん？」

「そう」と、ニコリと笑う

継母とリンは仲がいらしい。近頃彼の口からちよくちよくその名前が出てくるようになった。

確かに仲居さんはおれ達みたいな子供の客にも、とっても愛想が良かったし、色々気を使ってくれていた気がする。

おれ達二人の関係を聞かれたら、リンは即座に「従兄弟です。母同士が姉妹なんですよ。小さい頃から兄弟みたいに育ってて。なあ？高校もたまたま一緒になって、いまではクサレ縁ですよ」と、デタラメの話をスラスラと講じる。

あの顔で言われたら信じる他はないので、仲居さんもすっかり騙されてる始末。まあ、どう考えても高校生の友人同士で泊まる部屋ではないよなあ」と、俺は苦笑いをする。

大浴場から部屋に戻ると、思ったとおり6畳の和室にはお布団が二つ並べて敷いてある。普段ベッドしか見ていない風景とは違って、なんだかちよつとエロく感じる。それを見透かされたみたいに関が「フカフカの布団ってなんだかやらしいな。後でたっぷり楽しもうな、ミナ」とおれの耳元で囁く。

そうは言っても幾分湯中りの所為か、冷蔵庫からミネラルウォーターを出して籐の椅子に座り込んだリンはおとなしい。

「ちよつと疲れたね」

おれも向かいの椅子に座って、リンの飲みかけたペットボトルを貰う。

生乾きの髪がばらばらと浴衣の襟に散らばって、その合わせた襟がしどけなく大きく広がって胸の奥まで見えてしまうから、いつもよりリンの色気が増している気がする。恥ずかしくて直視するのを避けたいのに目はどうしてもそこにいつてしまう。

リンの肌は白い。

おれの病的な白さと違って表面が薄い桃色に滲んでいる。その薄桃と影になった暗い部分のグラデーションの細やかさをカンバスに描けるかな…

見惚れたままぼうつとしていると、リンが物憂げな顔をして口端だけで笑った。

「ミナが今何を考えているか、言ってやろうか」
「…」

そんなこと口に出さなくてもわかっているだろう。
おまえが欲しくて堪らないんだよ、リン。

11 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

11、

リンが手を伸ばすから俺も右手を伸ばす。

おれの手を口の近くまで持っていくと、リンはおれの指を一本一本口に咥え、ゆっくり舐めて味わう。

目を軽く伏せたり、おれをじっと見つめたり、少しだけ不遜な笑みを浮かべたり。

おれはこういう時、大体金縛りにあつたみたいに動けなくなる。そう、いつもリンのペースでおれ達の世界は動く。

でもそれじゃ駄目なんだね。だって恋愛しているんだもん。お互い同じ分の秤を持たなきゃ…

…それが何なのかはまだよく判らないけれど。

「リ、リン」

わざと音を立てて舐め続けるリンに追い込まれないうちに勇気を奮って尋ねる事にした。

「なに？」

「リンに聞きたいことがあるんだ」

「なんでもどうぞ」

「リンは…今までに何人の人とセックスした？」

「…」

リンはおれの指を離して、怪訝そうな顔で上目遣いに睨んだ。

「それ、今、ここで言わなきゃならねえこと？」

「前におまえが言ったよね。知る事と知りたいって思うことは違うって。おれはリンの過去を知りたいんじゃない。リンと言う人間を知りたいんだ。だから…リンがどうやって他の人とセックスしたのか…なんだか気になってしまっただ。変かな？」

「いいや、俺だってミナが俺とこうなる前に誰かとセックスしてい

たとしたら、やっぱりその話は聞きたいかもしれない。そうだね…
数えた事はないけど、セックスした相手は50人…ぐらいかなあ」
「ご、五十？」

想像もできない数だったから思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「そんなに驚くなよ。一夜で終わった相手も結構いるし、性病には
気をつけていたからちゃんとつけてしてた。だから安心していいよ」
「そういう問題じゃなくて…そ、そんなにして、誰とも恋愛になら
なかったの？」

「恋愛には、ならないねえ…50人の四分の一は女性だったが、こ
れは殆ど1、2回で終わる。なぜなら相手はどうしても大人の女性
だからね。上目線で俺を扱おうとするのさ。お金は要らないって言
うのに、何でも買ってあげるからってしつこく迫られたりね。それ
が嫌いだったから長続きはしなかった。男の三分の一は俺が入れる
ほうだが、これも圧倒的に年上が多い。と、やっぱり指示してくる
おまえ、想像してみるよ。上からしてるのにああしてこうしてって
言われてみる。こっちはまだ中学のガキだぜ？そんなに上手く出来
るわけじゃない！って、なる」

「はあ…」

少しだけ蠱惑的な微笑を湛えながら、リンは言葉を続けた。

「後の三分の二が俺が受け入れる側だが、これは案外上手くいく。
理由は簡単だ。俺はキレイなガキで相手は大体羽振りの良さそうな
大人の男だからね。たまにはサディスチックな奴もいたが、要領を
得ると上手くかわすことができるようになったんだ。だから手荒い
事は早々されていない。それに…」

リンは残っていたペットボトルの水を飲み干した。

「彼らは俺を甘やかしてくれる。あの頃俺は本当に…ひとりだった
からね。…温もりや優しさにどうしようもなく飢えていたんだよ。
鳶谷さん…ああ、体育祭にも来てくれてただけど、ジャズクラブ
の店長さん」

「あの…髪を後ろで結んだヒゲの人？」

「そう、あの人と出会って幾分投げ遣りな自分を戒めることができた。と、言っても遊ぶ事はやめなかったけどね」

「…」

「慧が…慧一が俺の元に帰って来てくれたから、俺はそういう生活と足を洗うことができた。兄貴の愛情を感じたから、飢える事はなくなっただと思う…」

おれは聞いていいのか迷ったが、軋むような声で彼に尋ねた。

「お兄さん…慧一さんとは…寝たことがあるの？」

「え？…寝たってセックスしたって事？」

「…う、ん」

「ないよ。慧とはキスもハグもベッドと一緒に寝たりもするけど、セックスはしていない。何故なら…」

「…」

「兄貴にはその気がないからね」

「…そう、なの？」

「俺が必死に誘ってもそういう気にはならないらしい」

「あんなに…リンのことを愛しているって…おれでも感じるのに」

「…兄弟だったら普通はセックスはしないもんだろ」

「そりゃそうだけど…」

普通はそうだろう。だけど、リンと慧一さんがもしセックスをしたとしてもそれが絶対許せない事とはおれには感じられない。あの人のリンを見る瞳は、肉親の愛情だけではないって、おれはあの時感じてしまっている。

本当にリンをそういう目では見ていないのだろうか…

「まだ他に聞きたいことがあるの？」

「いや、もう十分だよ。すまなかったね、リンの昔話を無理矢理聞きだしてしまつて。でも何だかすっきりしたよ」

「何が？」

「リンはセックス経験は豊富でも、恋愛は少ない。おれとタメだね」
「そこ、見栄張るところ？」

「だって、なにもかも勝てないんじゃない？ おれの面目がないじゃない」
「セックスじゃあ、いつも泣いてるくせに」

「それは…リンが泣かせるからだよ…意地悪なんだから」

「嫌いになる？」

「そんなことがあるわけないだろう」

「ミナを…愛していると誓うよ。今までセックスした誰よりもミナとする方が、何倍も快感を得られる。それはたぶん…身体で繋がっているだけじゃなく、心という精神愛が共有されているからだと思うんだ。とても貴重な絆だと思う」

「うん」

「大事にしたい。この想いもミナも」

「おれも…リンを離したくない」

おれ達は同時に立ち上がった。

目的は同じだ。お互いを共有し合いたい。理解を深めたい。好きと言うこの想いを相手に知らしめたい。この身に感じたい。めっちゃくちやにおまえに溺れたい。

帯を解きながら飛ぶように次の間の布団の上に飛び込んだ。

悠長な睦言を言う余裕はどちらにもなかった。欲望が勝っていた。お互いの名前だけを呼びながら、お互いの身体を、その奥を貪りあうことに没頭した。

リンがしてきた今までの相手の思い出なんか、おれがリンの身体からきれいさっぱり消してしまいたい。

言葉にならない口でそう告げると、リンは「思い出はいつか消えるもの。だけどミナを思い出にはしない。そう言っただけ？…きつと俺たちは繋がるために生まれてきたのさ。そうでなきゃ…こんなに、

気持ち良くなんか、ならないよ、ミナ…」

リンの言うがままだけではなく、おれからも求め、動いた。

それは二重に絡み合う美しい螺旋を描く。ダブルヘリックス。まさにDNA。

知ってるか？DNAって地球上の全生物が持っていて、細胞の遺伝情報を司るんだぜ？

情報の蓄積、保存、複製…何倍にも広がっていくこの恋愛の形が無限に続けばいいなあ…

…ねえ、リン

> i 5 5 5 5 6 — 2 7 3 <

12 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

翌日は出来るだけ早く起きようとしたが、身体中が痛むのと腰がだるくなかなか布団から出られない。

リンも同じで、しばらくお布団の中でくっついて遊んでいたが、朝食も部屋食だし八時に予約しているから、のんびりとしてられない。

露天に浸かったら身体のだるさも消え、何とかかなりそんな気がした。

朝食もひとつひとつが繊細な和風料理が並べられ、なんだか本当にお殿様気分になったみたいだと少々呆れ気味になる。

「全部食べきれるかな」

「無理しないで残しておけばいいよ」と、言うリンは、茶粥をおいしそうにお代わりしていた。

旅館を後にして、バスで移動。箱根園からロープウェイで駒ヶ岳に登った。

幸いな事に快晴で、展望台から見る富士山は声もないぐらいに美しかった。

雪の冠をかぶった姿を納めようと、デジカメのシャッターを何回も押す。

「巧く撮れてたらしいけど…」

「それより描かなくていいの？」

「だって、時間がないよ。他のところにも行きたいし…」

そう言いながら10分だけ時間を貰って、おれは芦ノ湖からの全景をスケッチブックにラフ描きした。

その後、元箱根から桃源台まで遊覧船に乗ったのだが、これが見

事に映画で見る海賊船のようで驚いてしまった。

リンはゆつくりできるからと特別船室のチケットを買い、お客の少ない船室で正面から見える景色を楽しんだ。

特別室のお客さんしか昇れない前方のデッキに上がって船首のヘッドをスケッチしてみた。

暫くするとリンがデッキの階段を上ったところから手を招く。

近づくと「ほら、タイタニックみたいにしようぜ」と、おれを背中から抱き寄せ、先頭に立たせた。

「恥ずかしいよ」

「誰も見てないから大丈夫」

確かに朝早いしお客さんもあまり見かけなかったけど…ま、いいか。旅の恥は掻き捨てとも言っし…

おれはリンに凭れて両手を広げる。

目の前に広がる湖と緑と赤の混じった山から覗く白い頂きを冠した富士山の眺望は圧巻で…何よりも背中に感じるリンの温もりがいとおしくて…

目から見える眺望とリンの存在を同時に感じてしまったおれは、涙が止まらなくなった。

「なんで泣くの？」

リンが驚いておれを抱き締める。

「感動しすぎると涙が出るんだよ。本当に…キレイだ」

「ああ、晴れて良かったね」

そう言っつて鮮やかに笑うリンの顔を見てまた涙が溢れる。

「涙腺が壊れたみたい」と、笑うおれをリンは「ミナはかわいいなあ。もしタイタニックみたいになってもミナを独り置いてはいけないね。死なばもろともだな」

「うん、そっちの方がいい」

誰も見ていないことをいい事におれ達は、抱き合っただままキスをした。

頬を切る風が冷たくても少しも寒くはなかった。

桃源台からはロープウェイに乗って大涌谷へ。そこで遊歩道を登って展望台から富士山を眺めた。

ここまで来ると大勢の観光客で賑わい、ゆっくりとスケッチをしている場合ではなくなってくる。

目にする人が黒いものを持っているので何かと尋ねたら「温泉卵だよ。硫黄と鉄分でああいう色に変色するって。でも殻だけだよ。食べたけど味はただのゆで卵だもん」

「へえ」

「食べてみる？一個食べたら7年長生きするって」

「…いらない。別に長生きしたいって思わない」

「まあ、俺もそうだね。要は長く生きるかじゃなくて、どう生きるかだもんなあ」

ロープウェイとケーブルカーを乗り継ぎ、公園上で降りたおれ達は軽い軽食を取った後、午後は美術館と紅葉を楽しむ事にした。

平日だったが、紅葉の季節とあってどこの施設も観光客で一杯だ。

年配の方が多く、おれ達みたいな学生の男同士にはついぞ見当たらなかった。

強羅公園で昨晚大浴場で出会った品のいいおじいさんに再会した。

ご夫婦づれで仲むつまじくされている様子を見て、リンもおれもなんだか微笑ましくも、羨ましくなった。

あんなに歳を取っても人前で腕を組んで仲良く生きていけたら、どんなに幸せな人生なのだろうね…そう、感じているとリンも同じように思ったと言う。

「男同士でも別に無理な事じゃないさ。そういうゲイの恋人達も世界には沢山いるよ」

「…そう」

「でも、ミナをそこまで縛り付ける権利は俺にはない。だから、ミナにあんなになるまで俺の傍に居て欲しいとは思わないよ」

「それって…いつかはおれと別れるってこと」

紅葉に惹かれ、山沿いの細い小道を散歩がてら歩いていた。

「そうじゃない。ただ…お互いを縛り付けるのはやめようっていつているんだ。おまえが他の誰かを好きになっても、それは自由ってことだよ。その感情を押さえつける権利は俺にはない」

「おれは…リン以上に惹かれる奴が現れるとは思えない」

「…まだ16、7年しか生きてないのに言い切るなよ…先は長い。」

ミナはそのうち俺にうんざるすると思うがね」

「なんでそんなこと言うんだよ、リン」

「不安定だつて言っているんだよ。今日好きあつていたって、明日おまえの目の前に運命の人が現れるかもしれない。その時を俺は覚悟している…ただそれだけだよ」

「…」

おれは立ち止まった。リンのあまりの言葉に胸が押しつぶされそうになる。

「どうして…」

どうして…昨晚はあんなにお互いを求めて愛し合ったのに、そういう言葉が出るのか信じられない。おれが誰を好きになっても、リンはそれを寛容するって事だろ？それっておれを大して必要としていないって事じゃないのか…

「ミナ…」

後ろを向いて立ち止まったおれを見つめるリンは冗談を言っている顔ではなかった。

「リンにとつておれの存在ってそんなものなのか？」

「そうじゃない…俺だつてわからないんだ」

「何が？」

「おまえを…ミナが俺から去ってしまったら、その時、どうしたら

いいのか…恐ろしすぎて考えられなくなる…だから…」

「…」

「ゴメン。止めよう、ミナ。俺も夢見ているんだよ。あの夫婦みたいに死ぬまでミナが傍にいればいいって…思っている」

リンは済まなそうな顔をしておれを見つめる。

「…根本先輩もリンと同じ事を言ってたよ」

「え？」

「高校三年間の期限付きの恋を楽しむってことにしたおいたほうが、自分が惨めにならなくて済むから、って…」

「…」

「そんなの…嫌だよ。初めから期限を決めて人を好きになるなんて…本当の恋じゃない。そうは思わないか？リン」

「根本さんは別れの辛さを知っているから、そう言うんだよ。真実は言葉の裏にあつたりするものさ。彼は…本気で好きなんだよ」

「…保井先生のこと？」

「そう…ミナももっと大人になったらわかるんじゃないかな」

「…」

「ほら、着いたよ。仙石草原」

「あっ…」

ずっと下を向いてたから、目の前に広がったススキの群れにしばし言葉を失った。

夕暮れの薄い光に金色に輝きながら優しく揺れているススキの海原。

踏みならされた土と砂利の道を歩く。

「砂利に足をとられるから気をつけろよ」

伸ばすリンの手を俺は取らなかった。

あたりには観光客が沢山いた。その目が気になったのだ。薄情なのはどっちだ。

あんなにリンを責めておきながら、人前で手を繋ぐことさえ躊躇っているおれはサイテーだ。

「ほら、ここいらからの景色が一番きれいだよ。スケッチか写真でも撮りなよ」

リンはあまり気にしていない風に、おれを気遣って言う。

「うん」

おれはデジカメを取り出し、構図を探す。

ススキの波の中をゆっくりと歩いていくリンの背中を目で追った。

ふと足を止めると彼は陽の沈む山々の方を仰いだ。

影になった後姿は彼特有の孤高な姿が映し出されている。

彼の腰まであるススキがゆらゆらと波打ち、まるで岩礁に立つセイレーンのようだ。

この風景…リンのいるこの風景を描いてみたい…

おれはデジカメのシャッターから指を離した。

これはおれの目に焼き付けるもの。留めておくべきもの。おれが描くべきものだ…

夕焼けを眺めているリンはゆっくりとその右手を上げ、自分の口元を押さえた。

感傷の、切ない、哀しみが流れてくる。

孤独…誰も寄せ付けない魂の孤独が彼を満たしている。

今の彼の中に、おれはいない…

そう理解した。

胸が痛い。

おれは怖くなって目を閉じた。

リンの心を見るのが怖い。

違う、そうじゃない。リンと対峙するためには、目を閉じてはい

けないんだ。

… ゆっくりと目を開ける。

さつき居た場所にリンの姿はなかった。当たりを見回してもその姿は見えない。

「リンっ！」

焦ったおれは声を出して、リンのいた場所まで急ぐ。
ススキの波を掻き分け、リンを必死で探す。

「リン、どこだよ！お願いだから出てきてくれよ」
返事はない。

「リン…」

涙が込み上げてくる。お願いだから…
「ミナ、ここだよ」

リンは後ろからおれの背中を抱き締めた。

「驚いた？ちょうど隠れ鬼やるにはいい場所だよな」

「バカっ！本当に消えたのかと…思ったじゃないかっ！」

おれはリンの胸にしがみ付いて叩いた。

「ミナ？」

「本当に…ホントに怖かったんだから」

「なんだよ。神隠しなんて信じてるわけでもないだろ？」

「リンなら…遭うかも知れない…」

「ミナを置いてどこにもいかないよ」

「嘘だ…リンはいつかおれの前から消えてしまっんだ…そしたらおれはひとりぼっちになる…」

「いかないって…約束するよ。それより…ほら、いい加減離れないと人が見てるよ、ミナ」

「いいんだ…」

そんなことはどうでもいいんだ。

おれはリンが好きなんだ。誰になんて言われようと、リンが好きで堪らないんだ。

「リンが好きだよ」

「俺も…ミナが好きだよ」

おれを抱くリンの腕が強まるのが、涙が出るほど嬉しかった。

「リン、おれ絶対忘れないから。リンと過ごした時間を。この瞬間を心に留めておく」

「ミナ」

「おまえを愛してるんだよ、リン」

太陽が山に隠れ、辺りが暗くなってもおれ達はその場所から動かなかった。

時間が止まれなんて、そんな事を望んではいけない。

ただ…この「恋愛」という時間が過ぎていくのが…怖いだけなんだ…

> i 5 2 8 2 — 2 7 3 <

13 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

13、

翌日の放課後、おれは美術部の顧問の町田先生に美術部への入部の許可をもらった。

あのススキが原に立つリンの姿を水彩ではなく、油彩で描きたかったからだ。

2年のこの時期に？と、少々呆れられたが、元々勧誘していた経緯もあって、快く承諾して頂いた。

油彩道具も何ひとつ持っておらず、お金に余裕があるわけでもなかったが、カンバスだけは新しいものに描きたかったから購入してあとはあるものを貸してもらおう事にした。

初めてのことばかりで戸惑う事も多いが、好きなことだから少しも嫌になる事はない。

おれは先生の指導を受けて、描き続けた。

「これは…箱根の仙石高原…だね？」

「そうです」

先生はスケッチブックに描いたおれのラフ画と、下地塗りが終わってある程度の色塗りに目安がついたカンバスを交互に見ながら、うーんと唸った。

「どこか…おかしいところがありますか？」

「これは風景画なのだろう？ここにいる…人物の印象が強すぎて、せつかくの風景画が心象画になってしまっている」

「…」

「もし、このススキの侘しさや自然の風景を魅せたいのなら、この人物は…無くした方がいいかもしれないね」

「でも、それじゃあ…」

おれは口ごもった。

リンの姿を消す？それでは意味が無い。

「この絵に描かれてる奴って4組の宿禰だろ？」

隅っこで描いてるおれのところへわざわざ近寄ってきた同級生の美術部員が、おれの絵を覗き込んで指を指す。

「水川、宿禰と付き合っているって本当なのか？箱根にデート？お泊り？…あいつとやっちゃったのか？」

「マジで？宿禰って中学の時は売り専してたってなあ。歌舞伎町に立ってたってホント？」

「あいつとやる時って水川はどっちなの？」

「…」

「こらっ！いい加減にしないかつ！誰と付き合おうが恋愛は自由だろっ！それより自分のやるべきことをやったらどうなんだ？初心者の水川の方がおまえらよりも進んでいるぞっ！」

先生の怒号に、冷やかした連中はすぐ自分の席に着いた。いつもの揶揄だ。気にしなければいい。

それでも悔しい…おれは口唇を噛んでカンバスを睨みつけた。

「水川、外野の言うことは気にするな。君が誰を描こうが構わないただ…さっきも言ったとおりこの風景画にこの人物の存在は強すぎる。それだけは確かだよ」

町田先生はおれの肩を軽く叩き、去っていった同級生達を再度叱り付けていた。

おれはまたカンバスに目をやる。

風景画として成り立たせるべきなのか…リンの姿を描くべきなのか…

怒られている同級生達を一瞥し、溜息をつく。

「しかたないよ…初めてだし…」

そう呟いて、おれはカンバスに描いたリンの姿を塗りつぶした。

出来上がった油彩画を先生はとても褒めてくれ、県の高校総合芸術祭に出展することになった。

おれは複雑な気持ちになる。

だって…これはおれの描きたかった絵ではない。

そんな気持ちを引きずったままひと月もしないうちに、その絵が芸術祭の特選に選ばれた。

全校朝礼の壇上で賞状を渡されたおれは、吐きそうな気分になった。

なんであれが…

放課後、温室でリンにおめでとうと祝福され、溜まりたまったものを打ち明けた。

「あんなのを描きたかったわけじゃない。おれは…ススキの中に立つリンの姿を描きたかったんだ。なのに…なんで…」

「知ってるよ。ミナのラフ画は見せてもらっていたしね。掲示板に張り出されていた記事の絵を見たよ。ラフ画と違っていて少し驚いたけど…でも確かにあの風景画に俺の姿はいらないね。あれで正解だったんだよ。ミナが腹立たしく思うのはわかるけど…次は後悔しないようにすればいい」

「リン…ごめん」

「なんであやまるんだ？」

「おれは…」

…描かなかったんじゃない。

描けなかつたんだ。

おれは…あの絵を見る大勢の目が怖くて…リンのことを触れられるのが…冷やかしゃ中傷が怖くて不安で仕方なかった。

だから…描くのをやめたんだ。

一番好きなリンにも、一番自分が正直になれると信じていた絵を

描くことに対しても、おれは自分自身を裏切ってしまったんだ。

悔しくて恥ずかしくてたまらない。

「リン、おれ、本当に自分が情けないよ。リンをこんなに好きなのに…どうして他人の目が怖いだなんて思ってしまうんだろう、ちょっと嫌なことを言われただけでまいってしまう」

「ミナが自分を責めることじゃない。ノーマルな奴らは、男同士付き合っているというだけで汚らわしいものを見るみたいな目をする。そういう既成概念はなかなか打ち破れないものだし、偏見って大勢でこられると怖いからね。だけど、ミナはゲイじゃないしな」

「え？」

「ミナはただ俺が好きなだけ。好きな奴がたまたま男だっただけの話だからさ。ホモとか言われたら心外だろ？…そういう風に言われたりしたら自尊心が傷つくのは当たり前だ」

「…」

「ま、別に俺はホモでもゲイでもバイでもなんでもいいけどね。もてない奴ほど口やかましい。ほっとくに限る」

「そうだね。おれもリンほどは強くなれないけど、リンを好きなことをやましいと思ったことはないよ。自分に嘘をつくくらいなら、何を言われてもいいよ」

「ミナを苛める奴がいたら俺に言えよ。二目と見られない顔にしてやるよ」

「…それは…やめとこうよ、リン」

顔が本気だったので、おれはあわてて宥めた。

正直、自分のプライドなんて気にしたことないけれど、リンの言うとおり、普通でいたいというこだわりこそ下らない自尊心だよな。

二学期最後の模擬試験でリンは学年総合7番だった。

クラスのいつもの馬鹿どもが、机に座るおれの前で嫌味を言う。

「水川って宿禰の家庭教師をしてるって聞いたけど、本当か？」

「寮生の奴が、水川は週末は宿禰のうちへ泊まりに行くってゆって

たぜ。トップの水川に教えてもらっているのなら成績も上がるよな
あゝついでに、勉強だけじゃなくて他の事もやっちゃってるわけ？」
「ねえねえ、ホントのところはどうなんだよ、万年トップの優等生」
「…家庭教師ではないが、解らない事は教えあっているよ。宿禰と
おれは付き合っているからすることもしているけれど、それが何か
いけないことか？」

「…」

3人は平然と答えるおれを見て、揃って口をポカンと開けている。
「どうでもいいが、おまえたちはもう少し成績を上げないと目的の
大学には届かないんじゃないのか？国立希望だろ？」と、おれは学
年全員の成績表が載ったプリントをつまんで、奴らの目の前でひら
ひらとさせた。

「なんならおれと宿禰で教えてやってもいいぞ。ただし宿禰は凶暴
だから、気に入らないとひっぱたかれる。覚悟した方が良い」

「…た、叩かれるのか？」

「うゝん。あの顔で叩かれるのもなあ…はは」

なんだ？そのまんざらでもない顔は。こいつらはリンの隠れファ
ンなのか？口では嘲っているけど、目的はリンなのか？…皆目わけが
わからん。

それ以上突っ込まれる事もなく、消えていった後、今度は万年二
番の高橋が近づいてくる。

また五月蠅いやつが来たと、こちらも構える。

「水川は宿禰と本気で付き合っているのか？」

「ああ、そうだよ」

今更隠そうとは思わない。おれは高橋の目を見据えて言い放った。

「ふゝん」

「なに？」

「いや、あいつと付き合っているけどトップを守っているってことは
…恋愛は学問に影響しないんだなあって思ったただけだ」

「…多いに影響してるさ」

「え？」

「身体と精神が充実していると、学習能力が上がる」

「…ああ、そう…そうか…見習う事にするよ」

今まで険しい顔しか見せなかった高橋の表情が緩み、笑みを見せた。

…なんだ。人の心を解かすのはこんなに簡単なことだったのか。

表情の和らいだ高橋が黒淵の眼鏡のブリッジを上げながら、言葉を続けた。

「だが、宿禰が水川に教える科目はあるのか？おまえが教える一方だろ？」

「リンはああ見えて数学が得意なんだ」

おれは笑い、胸を張って言い返した。

もう迷うことはない。

リンを好きな気持ちは揺るがない輪郭を象っている。

リンへの愛は未来に続くもの…

そう信じる事が出来る。

13（後書き）

次からは宿禰凛一編を書くので、この水川青弥編はしばらくお休みです。

14（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

14、

おれにとって毎年のクリスマスなど何の思い入れもなかった。
だが、それは去年から一変してしまった。

リンと出会ってしまった所為だ。

リンに出会うまでの16年間のおれの人生は単なるプロローグで、
リンに出会って初めておれは自分の足で世界を歩き、見渡すことが
できるスキルを覚えたんじゃないだろうか…と、思えるほどに、平
穩な日常に生きる喜びを至る所に見つけてしまっている。

リンに言ったら、あいつはそれを鼻に掛けるに決まっているから
言わないけれど、本当は感謝してもしたりないぐらいなんだ。

リンの家族は晦日まで帰省しないらしくて、それをいいことにお
れは、ぎりぎりまでリン宅で過ごすことにしている。

リンと一緒にずっといられる。そう思うだけで、口元が緩んでし
まう。

同室の根本先輩はそういう俺を見て、意地悪く

「いつまで持つか楽しみだね」なんていっても相手に困らないリン
君だからさあゝみなうちもそのうち…」

「うるさい！先輩の『飽きられるよ』こそ飽きてますから。どう
ぞ、おれのこととはほつといて下さい。先輩が卒業するまでは保証し
ます」

「つままないねゝ人の不幸こそが甘い蜜なのにさ」

「そういう先輩こそ、そろそろ本気で自分の幸せを考えた方がいい
んじゃないんですか？もう卒業まで時間がないんだから」

「そうなんだよねゝ保井の奴が本気でぼくを愛してるのなら、ぼく
が卒業して関西に行ったら…どうするんだろうねゝ」

「だろうねゝって…人事みたいに。保井先生を本気で好きなら、

こっちの大学にすればいいのに。私立だったら出願するのは今からでも間に合いますよ」

「やだね。なんでぼくが折れて志望校を変えなきゃならないんだよ。保井の方がぼくに夢中なんだから、向こうがぼくを追ってくればいいじゃないか」

「また、無茶なことを…」

子供みたいに頬を膨らませて湯気を上げている先輩を見ると、ほっとけない気分になるんだろうなあ

おれには先輩の言い分が正しいとは思わない。思わないけれど、気持ちにはわかる…

誰でも好きな相手に対して自分は本当に愛されているのか、その重さを量りたくなるものだろう。

おれだって…

たぶんリンにはこんな気持ちはわからない。あいつは誰かに愛されているのかを疑うよりも、自分が愛する意味を考える性質だ。

おれがリンに愛されているのを不安に思うのは、リンに対しての不信感ではなく、自分自身のコンプレックスなのだろうかとも一時期思ってはいたが、リンはそんなおれのコンプレックスも綺麗に取り払ってくれ、おれはリンと真正面で向かい合うことができるようになった。

セックスだって…そりゃおれは受身だけど、リンと一緒に高めあう意義を感じている。どっちが上なんていうのは関係ない。

お互いが対等であればこそ、混ざり方も美しい均等な勾玉の太極図を描く。

それを描いてリンに見せたら、「ミナはこういう体位がしたいのか？」と、呆氣に取られた。

違うと反論したがすでに遅くて、その後は…言いたくない。

大体どうしてあの図からこういういやらしいことを考えられるのか…リンの妄想力には閉口するが、リンは「おまえが願っているも

のが無意識におまへの描く絵になるんだよ。画家ってそういうもん
だろ？」

そう言われたらそうかも知れないと、おれはリンの為すがままに
させられてしまう。これっていうのはやっぱり対等ではなくて、上
下関係大有りじゃないか…と、まさに時遅しとして思考するも、気
持ちはいいのが先行して、結局おれはまたリンに負けたと泣くこと
になるのだ。

とは言え、リンとやるのは大好きなのでそれはいいんだ。

問題はクリスマスプレゼントで、おれはどうしてもリンの絵を描
きたくて仕方ないのだが、ひとりでこっそり描く時間も場所もなく
て困っている。

本当なら折角油絵も手になじんできた事だし、布のキャンバスに
リンを描きたかったが、美術室でないと油絵は扱えない。美術部で
は人の目があり過ぎる。それでなくてもおれとリンが付き合ってい
ることの他の生徒の好奇心とやらは、暇つぶしと思えないほどにし
つこいんだ。

どうしようと考え、去年リンから貰ったリンのお姉さんの形見の
色鉛筆でリンを描くことにした。

これならリンも喜んでくれるだろう。

24日、寮祭に誘ったリンは時間通りにやってくる。

寮祭は年に一度だけの学生寮のパーティで、寮生だけではなく、
招待したい奴を呼べるし、何より先輩後輩関係なく無礼講で楽しめ
るお祭りなんだ。

だけど招待された客はパーティと名を打ってあるからおめかしし
て参加する。

学生服に見慣れているリンがたまに本気で洒落た恰好を見ると、
テレビで見るとのタレントよりもかっこよくてときまぎしてしまう。

リンは時折知り合いの写真家さんのモデルをやっているというが、それをやり始めてから益々オーラが威力を増してきたように思える。自分の見せ方を知っているというか…

何気ない仕草も絵になる。

と、言っても本人の認識はあまりない。あいつはそういう奴だ。自分が客観的にどう思われているのかを気にする方じゃないからな。それも自分への自信から出るものだろうとは思うのだが…

だから、こういう時は俺は客観的な自分との差に…まあ、申し訳なく思うわけだ。

それさえもリンは気づかない。

大体…宿禰家っていうのは美形揃い過ぎなんだ。だから綺麗なものは当たり前で、それ以外は全部空気みたいになっている。

一般の人が夕焼けが赤いと思ってもリンには赤という意味さえどうでもいいことになってしまうのだ。

夕焼けは初めからああいうものだ…と、彼は認識する。

「メリークリスマス、ミナ。お誘いありがとう」

真っ赤な薔薇の花束をおれに差し出しニコリと笑いかけるリンに、抱きつきたい衝動を抑えて平静を装う。

「気取りすぎてるのは好きじゃない…」

いつもの天邪鬼の言葉もそれ以上は出てこない。

だって、おれにはリンが…本当に物語から抜け出した王子に見えたんだ。

それをぼそぼそと呟くとリンは「さしずめミナは白雪姫だ。王子のキスで目を覚ますんだろ?」と、寮のロビーでおれの口唇にキスをしたんだ。

凍りついたのがおれだけではないことは、周りを伺わなくても背中を感じていた。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 6 \\
 & 7 \\
 & 9 \\
 & 1 \\
 \hline
 & 2 \\
 & 7 \\
 & 3 \\
 <
 \end{array}$$

15 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

15、

寮祭のクリスマスパーティーは二度目の事だし、おれも後輩の手前おどおどしたりはしないつもりだが、リンが傍にいと、意識をしなくてもこちらへの視線をやたら感じるから違った緊張感がある。

最もその目線の目的はおれじゃなくてリンなのだが…

後輩はおれに気を使っただけか、おれがリンという時は遠巻きに見ているだけだが、リンがおれから離れた途端、リンに近づいては話しかけたりしている。リンも無駄に愛想良いから後輩からのクリスマスプレゼントをもらってはニコニコしたり、頬にキスしたりと…あいつにとっては当たり前前の礼儀を執り行っている。

あいつは…そういうことを恋人のおれの前でやっても、おれが何とも思わないと思ってやっているのか、その逆なのかわからないが、どっちにせよ問題ありまくりだろ、バカ！

ホールの隅のテーブルに盛られたバイキングのサンドイッチやオードブルを自棄食いしていると、寮生の三上が溜息を付きながらおれの横で同じように手持ちの皿から揚げを取りまくっている。

「あいつは本当にモテていいよなあ」。親友の俺にも分けて欲しいよ」

「…男でいいのか？」

このから揚げの油を口の周りにテカらせている宿禰の親友という三上はノーマルだったはずだ。

「別に男を恋人にしたいとは思わないけどさ、男でも女でも好かれるっているのは気持ちいいものじゃないか？」

「無駄な好意は疲れるだろう。おれはこっちが受け取れない好意は重荷になるだけだから、双方合意の上でって奴が気が楽だと思うけどな」

「まあ、人それぞれだろうし、その好意の種類にもよるだろうが、宿禰への好意って奴は懂れっていう部分が多いだろ？ 見るよ、あの後輩どもの赤面した顔。ありゃファン集いの会だぜ」

「三上、あんまり言うとか傲みを超えて自分が惨めになるだけだぞ。それじゃなくてもおれを見るよ。一応、おれはあいつの恋人だぜ？ なのに…おい、笑うとこじゃない！」

から揚げをフォークに突き刺して笑い転げている三上の皿を取り上げた。

「いや、水川って見かけによらず面白いというか…おまえ性格変わったんじゃない？」

「ああ、誰かのおかげでゆりかごからたたき起こされたんだよ。行く道を迷うばかりだ」

「手を引つ張ってもらえよ、王子様から」

先刻のロビーでの一件を見られたのだろう。さすがにあれは凍りついた。

たまたま後ろにいた舎監の保井先生も口をぽかんと開けていたくらいだからな。

「…見てたのかよ」

「まあな」

リンは全く動じもしないんだが、おれは顔を赤くしたり青くしたりで…正直肝の縮む思いだった。

「宿禰は見かけはああだし、色々心配だろうけどね。水川は自分が変わったって言うけど、宿禰の親友の俺から言わしてもらえばさ、宿禰も随分変わったって気がするよ。上っ面は変わらないけど、人に対する信頼感が厚くなったっていうか…優しくなった。きっと水川が宿禰を変えたんだと思う。恋愛ってお互いを感化しあうっていうじゃない。それがいい方向に育っていければ人間的に成長するんだろうね」

「三上は…成長してる？」

「俺？」

「うん、彼女とうまくいつてる？」

確かこいつが付き合っている彼女って、隣の女子高のユミちゃんとか…リンから聞いたことがあったんだが…

「うん…あんまり会ってないかな…」

「なんで？」

「恋って沸騰してしまえばそれ以上温度が上がらないというか…話すもんがなくなったら沈黙が訪れる…水川はそんなことない？」

「おれ…たち？」

「うん」

「…」

考えてみたが、ふたりでいる時に話のネタに詰まったことはあまりない。一緒にいたって黙って違う本を読んでいたりもするし、話が続かなくても気まずくなるなんてこともない。

第一そういう事にお互いが気をかけていない。

「今のところは…ないかも」

「じゃあ、まだ大丈夫だな」

「まだって…」

「いつかは冷める…それが恋なのかもな」

「…」

恋は期間限定なんて誰が決めたんだろう。

おれとリンには期限なんてない。冷めたりしない、絶対に…

「あ、根本先輩だ」

ホールのドアが開き、スポットライトを浴びた根本先輩がもったいぶった様子で入場する。

余興と称して体育祭の応援団で来たドレスを身に着け、アイドルのような歓声を受けて手を振っている。

それに合わせるように会場がリンと先輩のダンスをコールし始めた。

リンは少し嫌がるフリをして、しょうがないなと頭を掻きながら

ホールの中央に立つ先輩の手を取った。

そういえば去年は美間坂さんとリンは踊ったんだっけ…あの時は女性役だったけど、今日はネコ先輩を綺麗にリードして…そりゃ、体育祭の為に相当な練習をしてきたふたりだから息が合うのは当然だが…三ヶ月のブランクもひとつも感じさせずにふたりは一曲を完璧に踊りこなした。

最後の口唇同士のキスも再現されて、拍手喝采の中、リンと先輩は仲良く抱き合っている。

…いつもの事だから大目にみるけどさ…

ああいう恋人だから諦めもするけどさ…

リン、おれは聖人じゃねえぞっ！

怒りが頂点に向かいつつあるおれを知ってかどうかはわからないが、能天気なリンはおれの方に駆け寄って飲み物をくれと言う。

無視してやると「折角のパーティーなんだから怒るなよ。見たくなかったら目を閉じてりゃいいんだ。どっちにしろ、これが終わったら俺はずっとミナのもんだからさ」と、耳打ちされた。

弱いところを見破られてぐうの音もでない。

ホールの明かりが暗くなってノスタルジーなクリスマスブルースが流れる。

男子学生しかいないのに、何故か曲にあわせて何組かのペアが踊っている。

頭を傾げているおれの手を取って、リンはホールの中央へおれを連れて行く。

片手を繋ぎ見合わせて腰を軽く引き寄せる。

「リン！おれ、踊れないっ！」

恥ずかしいのもあるけれど、本当にこんな社交ダンスみたいなのは無理だよ。

「身体を揺らしていればいいさ。俺に合わせてね」

「だけど…」

「ほら、頭を肩に乗せて…ね」

リンに導かれるままにおれはリンの身体に寄り添うようにして、頭を擡げた。

ゆっくりと回るミラーボールが薄暗いホールの床をキラキラさせている。

リンに抱かれて身体を揺らせて踊っている自分が不思議でならない。

本当にこれがあの水川青弥なのか？

まるで水の中に漂うみたい…時折呼吸が苦しくて…でも気持ちよくて…

なんだか夢みたいだと笑うと「笑ったミナも怒ったミナも全部好きだよ。まさに俺たちは夢の中だ。お互いに夢中になっているんだ」そう笑ったリンこそ夢みたい消えてしまいで、おれはリンの背中を強く抱き締める。

寮祭が終わった後、リンのマンションでふたりだけのクリスマスを祝う。

お互いのプレゼントを交換しあった後、ワインで乾杯した。

キャンドルを灯しただけの暖かいリビングでおれ達は抱き合った。まるで夢の続きをみているみたいに幸せで、ずっと終わらなければいいのと思うけれどね…

そのまま床暖房の効いた床に毛布に包まって寝ていたんだが、ふと目が覚めて抱き合って寝ていたはずのリンの姿がないことに気づいた。上半身を起こしてリンの姿を探した。

暗闇に慣れた目がやっとリンの姿を見つけた。

リビングの向こう…ベランダに続く硝子のドアからリンが見えた。近づいてそっと様子を伺う。

リンはベランダの柵に凭れて空を仰いでいた。

真冬の深夜なのに薄着のまま、じっと空を仰いだまま動かない。
サンタクロースのプレゼントでも待っているのだろうか…

…いいや、違う。リンが待っているのは、彼を最も愛する者達なのだろう。

おれはリンを愛している。彼への愛は誰にも負けたくないと思っている。だけど、どうしても勝てない者がいる。

リンの家族：亡くなっているお母さんやお姉さん、そして遠く離れてもいつもリンの事を思っているであろう慧一さん。

愛してきた時間と重さはおれには到底敵わないものだ。だけど、おれは迷わないよ、リン。

おまえが気づく時まで、おれはおまえを見つめ続けるんだ。
そう決めたのだから。

16、

29日に世田谷の実家に帰りついたおれは、自分の家の色あせた雰囲気に啞然としてしまった。

家が古いわけではない。リンの気配のないこの背景が恐ろしいほど味気ないものに感じてしまっているのだ。

慣れ親しんだはずの自分の部屋だって、誰か知らない他人が居た様な気がする。

両親は久しぶりに顔を見せた親不孝の息子を見て歓迎するも、それがおれの未来に対する重圧に感じてしまう状態は全く変わらず、あなたたちの投資する息子は同級生に入れ込んでいる色狂いの息子なんですよ、と、喉まで出掛かりそうになる。

試しに芸術祭の特選を貰った賞状を両親に見せたら案の定手放しでは喜ばない。

母親は形ばかりの褒め言葉を披露したが、親父の方は賞状を見もせずに「絵を描く時間があつたら問題集のひとつも解いてた方が利口だ。いくら学年一位でも田舎の私立の話だ。世の中、頭の良い奴は腐るほどいるんだからな。ちよつとでも気を抜くと敗者になるんだぞ」

「……」

一体誰と戦って敗者になるんだろう……その戦いになにか意味があるのか？……と、問いたい気持ちにもなるが、今更この人には無駄だ。

昔、母親から聞いたことがあった。

父の親父、即ちおれの祖父は美大生だったが学徒出陣で戦争に動員された。戦後、絵画を続ける余裕はなく、生活の為に中学の教師になったそうだ。それでも絵を描くことは止められず、暇があれば

各地へ赴き風景などを描いていた。家の中でも祖父はアトリエで絵を描くばかりで、子供達の相手は二の次だったらしい。

祖父との交流が殆どなかった父。

父がおれが絵を描くことを嫌うのは、自分を受け入れなかった祖父への恨みがあるのではないだろうか…

夜、自室で落書きしていると母が入ってくる。おれは急いでスケッチブックを片す。

母はそれを知ったか知らずか、コーヒーとケーキを載せた盆を机に置き、

「お父さんはああ言ってるけど、本当は嬉しいのよ」

「え？」

「青弥が特選を貰ったこと。こっそりひとりで賞状を眺めているのよ。素直じゃないところは親子似ているわね」

「おれは…素直な方だと思うけど…」

「親はいつだって子供の将来を考えてしまう。一人前になれるように、ひもじい思いをしないように、いい家庭を作れるように…なんてね。親の勝手な夢を押し付けてしまうものよ。でもそれを裏切っても恨んだりしないのも親だね。青弥が幸せになるのなら、お母さんはどこの大学でもいいと思うわ。無理に丁大を目指さなくてもいいのよ」

「…大丈夫だよ。無理はしてない。ちゃんと自分の為を考えて道を選ぶから心配しないで、お母さん。絵は…気晴らしに続けていくつもりだけど、ちゃんと丁大に合格するから」

「うん…お父さんにそう伝えとくわね」

部屋を出て行く母の後姿を見送りながら、どんよりとした気分になった。

ああ言えば子供が気楽になるとでも思っているのだろうか。

見せかけの優しさか本物かどうかが問題ではなく、当たり前のこと

とをありがたく思えよとばかりに押し付けるのが気に入らない。

おれはリンが母親を早くに亡くし、父親との関わりも少なかったと気の毒がったりしたが、真実はおれみたいになしがらみに縛られないで、楽に生きれるんじゃないかと思ったりする。

正月なんかさっさと過ぎてしまえばいい。

早くリンのいる場所に帰りたい。

正月三が日が過ぎて下見でもしておこうと丁大学近くの駅前をぶらついていたら珍しい人にあつた。

2年先輩の美間坂さんと桐生さんだ。彼らは寮の先輩でもあるし、おれは勉強を教えてもらったりもした。

ふたりは恋人同士で、現在同棲しているらしい。

美間坂さんは実家からの帰りだとかで迎えにきた桐生さんと合流したところだつた。

「水川はひとりなのか？」

「はい」

「じゃあ、昼飯でも食おう。奢ってやるよ」

「でも……」

「真広が奢るなんて珍しいんだからご馳走になるといいよ」

「それじゃあ……お言葉に甘えます」

おれの言葉にふたりともきょとんとして、顔を見合わせていた。

「水川は……変わったな……宿禰の所為だな」

「そう……ですか？自分ではあまりわかんないけど……」

「かわいくなつた」

「昔は口を開くのも無駄みたいになつてなかつたからな」

「……愛想なくてすいませんでした」

頭を掻いて笑つたら、いきなり桐生さんが「か、かわいいなあ」

と、言い終わらぬ間にぎゅーと抱き締められた。

頭ひとつ以上違う身長差におれは逆らえなくてじっとしていたら、美間坂さんがぶっきらぼうに「おれにもそのぬいぐるみを抱かせろ」と、桐生さんに呟いてた。

おれはぬいぐるみか？…と呆れつつも、こうも容易く心を砕くことができるのなら、このぬくもりが優しいものであるのなら、おれはまだ色んなものを許していけるのだと思った。

17 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

17、

長い正月が終わった。

名残惜しそうな母親の姿にも振り返ることもなく、そそくさと鎌倉の寮へ帰った。

翌日にはリンと初詣に行く約束をしている。

年末に別れて一週間程しか経っていないのに、一刻も早くリンに会いたい。

リンの顔を見たくてたまらない。

キスしたい。それ以上のことも…

禁断症状ってこんな感じなのかな。

それとも本当に色きちがいになってしまったのかな…

なんだっていい。

リンが傍に居てくれれば、おれは生きている喜びを味わうことができる。

翌日、初詣に出かける。

リンと会った途端、「ミナの顔を見たらしたくなかった」と、言葉、おれは自分の欲望を見透かされたんじゃないかとしどろもどろになってしまった。

すぐに良く二人が使うホテルでわけがわからなくなるほどやった。

リンはいつもと違って乱暴におれを抱く。

普段はもっと気を使ってくれるのにと、少し不安になった。

病み上がりの所為か体力の消耗はリンの方が酷くて、終わった途

端、おれの身体に突っ伏して言葉も出てこないほどに呼吸を乱す。

そのくせ少し元気になると、「ね、やろう？」と俺に笑いかける。

おれが断れるわけがないことを知っているから癪にさわるけど、

こつちだつて負けないくらい欲しがっているから伏せ目がちになりながらも嬉しくて堪らない。

今日のリンはおれを抱きながら何かに耐えているような顔を見せる。

おれを見つめていても、本当はおれを素通りして見えないものと対峙している…そんな気がしてならない。

おれはリンに対して何か崇高なものを感じてしまうことが稀にある。

背中の方は見えないけれど、リンは少しだけ人間離れしている。それがいいか悪いかは別にして、やはり彼は特別な者なのだろう…（彼の外見を見て判断する多くの奴等をおれはバカにしているが、実は彼の真実を見ぬいているのかもしれない）

一体全体何故リンみたいな奴がおれのような平凡を絵に描いた男を選んだのかは、未だにわからない。

リンは「俺がミナを選んだんだ。ミナだつて俺を受け入れてくれた。それは奇跡とも言えるし必然とも言える。だけど恋はロマンチックの方がいい。ならば深く味わつて酔つてしまおうよ。よりファントステックに…」

その顔じゃなきゃとても言えない台詞だ。

口からでまかせのところもあるお調子者のリンだから、おれも全部信じてはいないけど、彼のおれへの愛情は本物だと…そう信じることが出来るから、おれも繋いだ手を離したくない。

恋は期間限定と誰しもが言う。

もし、リンの愛情が冷めたら、おれはどうしたらいいのだろう。泣き言を言つて困らせるのか、一生恨んでやると罵るのか、かつつけてお互いに楽しんだよなと握手をして別れるのか…

別れの場面などおれには見当もつかない。

ベッドの中、裸のまま寄り添っている。

ついこの間まで酷い高熱で大変だったんだと愚痴るから、てつきり家族と一緒にだと思っていたが、ご両親は居なくて、慧一さんがずっと看病してくれていたのと言う。

それを聞いた途端、今まで感じていたリンへの愛情が変な気持ちへ変わってしまった。

無論愛ゆえの嫉妬に他ならない。

おれにとって慧一さんは鬼門だ。

体育祭の時のあの人のリンを見つめる横顔を見たときから、おれにはあの人がリンをただの弟としての愛情ではなく、恋人として……リンを欲しているのではないかとの疑念が、時間が経つにつれ確信となりつつある。

おれは慧一さんを近くで見たことも話したこともないけれど、あの人が心の底からリンがおれと付き合っていることを祝福しているとは、到底思えないんだ。

どう考えてみてもあの人にとってリンは特別な存在であるはずだ。リン自身がそれを言う。

いつだって慧一さんに対する恩や愛情を恋人のおれに余す事無くなく見せつける。

それほどまでに兄弟の愛情というものが厚いものなのかと、兄弟のいないおれは初めは珍しがっては見たものの、どう考えてもリンと慧一さんの間には、兄弟以上の絆が見えてしまうんだ。

リンと慧一さんの間に身体の関係があるとしても、それはそう驚く事でもない気がする。ありえると思わせてしまう。あの兄弟にはそれが違和感ともまた悪行とも感じさせない力がある。

リンが真実欲しいものは慧一さんじゃないだろうか……

おれは時折思ってしまう。

だけどそれを問いたただす勇気などあるはずがないじゃないか。

もしそれを肯定され、おまえなんかいらなと言い出されたら、おれはどうすればいい。

本来の目的の八幡さまに御参りした後、帰り道を並んで歩く。
リンは一緒にT大学を目指そうとおれに言う。

おれは突然のリンの申し出に言葉を失う。

本当に？…本当におれと一緒に受験してくれるのか？

心の底から舞い上がる気持ちは抑えきれない。

さっきまでの不安な気持ちはいとも簡単に霧散する。

それがおれへの形ばかりの優しさであつたとしても…

悲しみも喜びもいつだって、おまえがおれに与えてくれる。

おれはね、リン…

もうおまえから逃れられない囚人になつてしまつたんだ。

だから、もう…

おれはただおまえの一部分であり続けたいだけなのかもしれない。

離さないでくれ。

繋がれた手錠の鍵は失くしたままでいてくれ。

ねえ、リン、お願いだから…

17（後書き）

「焦点」は終わりです。
次のミナ編は「フラクタル」です。
よろしくお願いします。

第3章 フラクタル 1（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

第3章 フラクタル 1

フラクタル（全体と一部分は実は自己相似である）

1、

新学期が始まった。

最終学年、高校最後の年、そして受験の年。

おれとリンは同じT大を志望している。

リンは建築学科を受けると決めているのに、理系を選ばないでそのまま文系のクラスを志望した為、おれと同じクラスになる機会はゼロだ。そのわけを聞くと、今まで作った友人関係を崩したくないという事らしい。

理系でも沢山友人は作れるのと思うけれど、おれがとやかく口を挿むこともない。

リンのクラスの担任は2年に引き続き、藤宮先生だ。

先生はリンの兄である慧一さんに、留守の間は自分の代わりにリンを見守ってやって欲しいと頼まれているそうで、リンもその事を承知している。

慧一さんは大手のゼネコンに就職したが、日本にはおらず、拠点はニューヨークらしい。

春休みにリンは慧一さんに会いに行っていた。帰ってきててもリンの様子に別段変わったところはなかった気がする。気がするだけで本当のことなんかおれがわかるわけがない。

あの兄弟ならなにがあってもおかしくない。怪しめばそれが真実になる。なにがあってもなくてもリンが口を割らなきゃおれはなにもしらなくて済む。…そう考えることにしている。

おれにしてみれば、これだって精一杯ポジティブな姿勢だと思うのだが…

こんなに気を揉むのも、原因はリンにある。

あいつの貞操観念は緩い。

だとしても、恋人への守操義務は感じているらしく、おれ以外とはしてないと胸の前でさらっと十字を切ったりするけれど…あんまり信用してない。

リンは傾国の麗人的な気色があるから、彼が誘わなくても向こうがほってはおかないんだろうなあ。

だからリンが変な道に行かないようにおれはリンの重石にならなくちゃいけない。

しかし、考えたらバカらしい話で、リンの方が上背もあるし（このところ益々身長差がついてしまった）、腕っ節もあの細身から信じられないほどあるし（実際ふたりで夜街をうろついて何回か絡まれたことがあるが、口でかわせない時はリンはあつという間に武道で相手を投げ飛ばした）おれがリンの心配をするのは全くの筋違いなんだが、とにかくリンが心配でなくなるんだ。

それと同時に寄り添ってくるリンが愛おしくてたまらなく、どう考えても立場は逆なのにリンを守らなきゃならないという気になってしまう。

だから思っんだ。

たぶん慧一さんはおれ以上にリンを守り愛してきた。そしてそれは今もこれからもずっと変わらないのだろうと…

おれはおれに対するリンの愛情を疑ってはいない。というより、リンはおれに対して誠実だ。

いつだっておれを笑わせ、喜ばせ、快樂を与えてくれる。

おれが貰った分と同じだけ返しているとは思えないが、リンはいつだって「ミナが一番だよ」と、言ってくれる。

勿体無い気もするけど、心底嬉しいのも事実だ。

おれの身の回りの話をするならば、同室の根本先輩は卒業し、第

一志望だった関西のD大学へ進学した。残された保井先生は健気にもその後を追いつ、今は京都の私立高校の先生をしている。

たまに根本先輩からメールがくるが、「保井がしつこくて困る」と言いながらもまんざらでもなさそうだ。

リンは「ネコには飼い主が必要さ。だが鈴を付けたって遊びまわるのを止めさせることは無理だろうね。去勢しない限り」などと笑っている。

保井先生にしてみれば、笑い事じゃないだろうと思うけど、リンが先輩みたいじゃなくて良かったと思うのは、誰にも言えない本音だ。

三年になってヨハネ寮のふたり部屋のルームメイトは三上になった。

三上は宿禰の親友だし、おれとリンを応援してくれるからおれには都合がいい。

お互いに恋人の愚痴を言い合ったりしている。

おれとリンが恋人同士であることは、大部分の学生達が知るところとなってしまうている。

ひとりで廊下を歩いていて知らない生徒から指を指されることもよくある。

影で噂されていることも問い詰めなくてもわかる。

内容はだいたい…リンにはおれみたいな奴は相応しくないということらしい。

リンは特に下級生には圧倒的に人気がある。

入学式や卒業式のために、リンは部の代表として詩を朗読するわけだが、それがいつも好評を博しているんだ。その所為か、リンが部長をする「詩人の会」の部員は例年より大幅に増えている。

クラブの中で「宿禰凜一愛好会」なるものが非公式に作られ、日毎リンを崇拜する詩を作っているとかいないとか…どうでもいい噂

が後をたたない。

リンは「そんなに人気があるなら夜道には気をつけなきゃならないな。マジでストーカーに合いそうじゃん」と、本気とも冗談ともつかないことを言って笑っている。

「だけどみんな俺の前ではおとなしいもんだぜ。一応、俺のミナに手を出したらただじゃ済まないからな、とは脅しといた」

「いや…それは…大丈夫だろう。ここは進学校だし、結構みんな真面目だからさ」と、言つと、リンは腹を抱えて笑い出した。

「一番真面目な奴はミナだけだな。ついでに言つとお前は知らないだろうが、ミナを狙っている奴は結構いるぜ。注意しろよ」

「…まさか」

こんな平凡なおれに誰が興味を持つと言つんだろうか。ありがたいくない冗談だ。

おれの担任は生物の藤内先生だ。

おれは化学と物理を選択しているので直接教えてもらうことは少ないが、たまに生物準備室へ行き、自慢のコーヒーを頂いている。

おれがリンと付き合っていることは知っている様子だが、それについては一切触れてこない。おれにとっても都合のいいことだし、そういう話題をしなくていい空間が居心地良く、つい長いをしてしまう。

リンには散々「藤内先生には気をつけろよ。おまえに気があるのがみえみえだ」と、言う。

3年になつても時間があればおれ達は陽が落ちるまで温室で過ごす。

温室の管理担当の藤内先生からは、表向きは温室の植物の世話役という名目を貰っている。先生はおれ達がここで何をしているのかも知っているのかもしれない。

…想像通り、ロクな事はしていないけれど…

「そんな言い方失礼だよ。先生は生徒としてしかおれを見てないよ」

「俺はあの先生は苦手だ」

「どこが？」

「なんて言うか…敵意を感じるね。というか、嫉妬だな」

「え？」

「ミナをものにしちまったからさ。嫌われてるんだよ」

「…」

「俺はこう見えて案外敵が多いんだぜ？見てくれがいいとそれだけでやっかむ奴も出てくるしな」

「そういう態度が無駄に敵を作るんじゃないか。それにリンは外見だけじゃないし…中身も綺麗だもん」

「…それ甘えてるの？」

「違うよ」

「あんまりかわいい顔するなよ。特に、藤内の奴にはそんな顔見せるな。襲われるぞ」

背中からぎゅっと抱きすくめられ、首筋にキス。一瞬息が止まる。温室の窓を開け放っているから、外から覗かれないようにおれ達は温室の隅でそっと抱き合う。

植物の青臭さなのかおれ達の臭いなのかわからなくなるほどに、お互いを求めては絡みついて離さない。

「ミナ、愛してる…」

吐息まじりに耳元で囁かれると、未来なんてどうでもよくなる。

身体を回して今度はおれがリンを求める番だ。

「おれも…リンが…好きだよ…愛してる…」

3年になってもおれ達は温室と言う閉じられた空間で甘い蜜を味わっている。

まるでとり残された巣窟だ。せめて秘密の楽園と言えよ。この温

室は砂漠の幻の都だ。選ばれた者しか見えないし、入る事もできない。千夜一だ。懐かしいね。最初の頃を思い出す。リンの作り話はどれも胸が躍ったよ。格別だった。姫がお望みならいつだって語り聞かせますよ。…ねえ、リン。なに？千夜たってしまったら、その先はどうなるの？知らないのか？ミナ。王様と姫は仲むつまじく幸せに暮らすのさ。話が尽きても？勿論。その先は自分達で話を作るんだよ。千夜一夜の一夜っていうのはその先を意味すると俺は思っているんだ。それは、おれに語らせてくれないか？リン。…ああ、どんな話でもミナが語ってくれるなら…俺は傍にいるよ。

アラビアンナイトが作り話だという事ぐらい、おれは知っている。

> i 1 0 8 2 3 — 2 7 3 <

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i /

2、

夏休みが近づいた。

リンと俺は暇があれば顔を合わせる。

やることは決まっているが、さすがに目の前に迫った受験の嵐には到底逆らえようもなく、他聞に漏れず勤勉になる。

リンはこちらが引くぐらいに気合を入れて勉強に打ち込んでいる。特に英語への意欲は半端なく、TOEFLのスコアも八割は超えている。

留学するつもりなのかと問うと、曖昧に「そうなるかも知れない」とかわす。

大学も一緒に行くと言ったじゃないかと責めると、「勿論そのつもりだよ。でも俺、建築家になりたいんだ。将来は兄貴と一緒に独立した事務所を持って共同でやっていきたいって思っているんだ」と、言う。

それではおれはどうなる？おれはリンと一緒にの仕事はできないし、離れてしまわなきゃならないのか？…リンは困った顔をする。「俺の勝手な予想図だよ。未来なんてわからないだろ？今はミナと一緒にいることが、俺には大事なんだ」

そう言っただけで柔らかくおれを抱き締めるリンは卑怯だ。

反論なんか言えなくしてしまうから。

夏休みが始まった。

だが生活はあまり変わらない。

寮と学校への往復の繰り返しだ。

三年もなると補習は朝から夕方までぎっしりと詰まっただけで、余暇なんてまるで無い。

周りもそれが当たり前のように励むから、おれも取り残されないように机にしがみつく。

リンは「ミナは勉強しなくても余裕でトップじゃん」と笑うが、トップはトップなりの意地とプライドがある。

大体そういうリンがおれにとっては目下一番のライバルなのだ。

彼は上位五位以内に食い込むほどに成績が伸びている。

他の事は置いても勉強ぐらいはリンに勝っていなきゃおれの存在価値というものが損なわれるというものだろう。

今日も朝から蝉の声をBGMにチャート式を広げる。

昼からはエアコンが入る教室も、午前中はなんとか凌げるだろうとエコ節電だ。

いやもう充分汗が流れているんですが…私立のクセにケチるなよ、と隣の奴が愚痴っている。

右に同じだが、凌ぎやすい午後は大量に眠りの森で遭難するから、こちらの方が受験戦争らしいじゃないか。

ぼんやりと外を見ると、中庭の噴水も形ばかりだが水を上げてい
る。水不足でもないのに、蛇口を絞めた所為か、今日は勢いが
ない。勢いは無いが噴水としての責任なのか、暑さを凌ぐ為とばかりにそ
の役目を果たそうとしている。その懸命さがなんとも可笑しくて口
元が緩んだ。あれはおれに似ていないか？

教壇へ目を移す。

古文の和歌が黒板に書かれ、その横に文法が事細かく記されてい
る。

理系であっても国立のセンター試験では国語は必須である。あま
り得意ではない古文の補習にも参加しなきゃならない。

教壇の上では古文担当の藤宮先生が和歌集の抜粋をあげて説明を
している。

「きみにより思ひならひぬ世の中の人はいこれをや恋といふらむ。この意味は？誰かわかるか？」

手を上げた生徒を指し、その答えを聞く。

聞かなくてもこれくらいならわかる。

「…まあそうだな。あなたのおかげで知ることが出来ました。世の中の人はいこれを「恋」と言うのでしょうか。と意識するがこの裏にはもっと深い意味がある。

この作者は在原業平だが、彼は男前で恋多き人だ。女は勿論男にもモテたそうだが。その彼がこの恋こそは真実の恋ではないだろうか」と苦しい胸の内を吐くんだ。真実の恋とは突き詰めると苦悩の連続なのかもしれない」

藤宮先生は何を思ったか、おれの方をちらりと目をやり、すぐに黒板へ向かった。

真実の恋は苦悩の連続か…

おれは…苦しい恋をしているのかな。

それともまだ苦しみが足りないのかな。

いや、この恋は真実ではないのかもしれない。

だとしたら、「真実の恋」になるにはどうしたらいい？

リンはおれとどうなりたいのだろう。

リンはおれと歩く未来を想像してはいないのだろうか。

いや、リンばかりに任せるんじゃない。

「恋」はどちらかが傾いてはいけない。

ちゃんと釣り合っていないきゃ、負担になる。

それは恋の苦悩とは違う苦しみになる。

週末はリンのマンションに出かけるのも日課となる。

一緒に食事の用意をするおかげで、おれも料理のレパートリーが増えた。最も主な味付けはリンが担当するから、おれの味とは言え

ないのだが。

目の前でおれの作った明太子スパゲティを美味しいと喜んでいるリンがかわいい。材料を混ぜただけなんだが…

「夏休みはずっとこっちに居ようと思っていたんだけど…」

「どうした？」

「かあさんが勝手に予備校の夏季講習に申し込みやがって、5万もかかったから絶対受けろって言うんだ。横暴すぎるよ。おれはこの補習で充分なのに」

「そんなのは口実さ。かわいい息子に帰って欲しいからに決まっているだろ？たまには帰って顔をみせてやれよ。後で後悔するぞ」

「…リンはいいね」

「何が？」

「自由だもん」

「俺だって心配してもらいたい親が欲しいと思うことがあるよ」

「そりゃ…そうかもしれないけど…親の愛情って重すぎると反抗しなくなるよ。縛り付けるなってなる。リンはならない？」

「え？何が？」

「慧一さんはリンをとて愛してるだろ？その思いって親と同じじゃないか。重く感じたりしない？」

「…昔はそういうこともあったね。反抗期だった頃かな。いちいち干渉するなって腹が立ったよ。兄貴は本当に心から俺を心配してくれているのにさ…それをわかっててもその時はうぜえってなつたよ。今のミナと同じだな」

「そうだよな」

「でも…今は俺への愛情がどんなに深くても重荷には感じない。受け入れてしまえる器が出来たって感じかな。居心地いいよ」

「そう…」

穏やかに笑うリンがいる。

リンはこんな顔で笑っていたかな…

その顔を見ていると、なんだか胸が苦しい。

彼はおれを愛してくれているのだろうか。

慧一さんの愛を受け入れる器があるといった。

おれの愛を受け入れる器は…慧一さんよりも大きいのか？

それとも…

痛い…苦しい…

これが真実の恋であるのなら、おれは幸せなのかもしれない…

月曜の放課後、温室へ行くとリンがリボンタイを手に持っていた。どうしたの？と聞くと、クラスメイトとじゃれていて、倉庫の窓の釘に引っ掛けて破れてしまったんだ、と言う。

「もう使えないな」

「そうだね」

おれは赤いリボンタイの破けた部分を確かめた。

縫ったらどうにかなりそうだけど…さすがにリンがミシン掛けをするとは思えない。

「そうだ、いい考えがある。ミナ、手を出してごらん。左手」

「え？」

リンの言うままに左手を出した。

リンはおれの手首に破れたリボンを一度巻いて結び、その残りを自分の右手に結んだ。

繋がれた手を呆然と見ていると、リンはにこりと笑い、

「ほら、運命の赤い系の代わり、赤いリボンだ。これでミナとは離れられないね…なんてね。ガキっぽい？」

「…」

窓から差し込む夕日に映えたリンの身体が眩しすぎたのだろう。

胸が詰まって言葉が出ない。

こんなもの子供だましたと、とても笑えない。

おれはただ…

ふたりを繋ぐ赤いリボンが、一生結びついたまままでいたらと…
それだけを願っていた。

> i 9 4 5 6 — 2 7 3 <

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i /

3、
その夜、寮に帰ったおれは、夜遅く、同室の三上が眠ったのを確認して、隠しておいたリンの破れたリボンタイをそつと机の引き出しから出してみた。

あれから、俺たちは結び付けられたリボンにお互い身動きが取れないと閉口しながらも、楽しんだ。

二人並んで座り、おれはスケッチを、リンは読書をしようとする。絵を描くにもつい左手を動かすから、そうなると隣で本を読んでいるリンがぎゃつと叫ぶ。ページを開こうとした手が弾かれて、破いてしまったのだ。

「どうする？これ図書館の本だぜ？」

「テープじゃ駄目かな？」

「逆に目立つな。このままにしておくか。破れたといってもちよつとだしな」

「……いや、十センチは重症の部類に入る。だけど、本が本だろ。誰も埒谷雄高なんか読まないよ」

「そうか？コレ、アングラではウケてるって話だぜ。確かに難解だが、俺みたいな異端者には丁度いい」

「……」

自分のことを異端って言うリンが可愛かった。

その後、まあ、色んなことをしている最中も、繋がれているリボンが何をするにも邪魔になった。

片腕しか使えないことの不自由さは勿論、繋がれた方の腕はふたりで協力しなきゃ快感も得られないなんて……やってる最中、なんでこんな不便なことをしているんだ？この縛り付けているものを外す

のは簡単じゃないかと、恨めしげに口にしたが、リンは一向に構わなかった。

片方の腕だけで器用におれの腰を抱くと、そのまま混ざりこんだ。「手首も身体もお互いを結びつけ欲を食い散らかしている。こういうのを一心同体っていうのかね」と、悪どい顔でねめつけ、おれの目じりを舐める。

皮肉のひとつもこの状態で言えるわけが無い。

片方の腕でリンの背中に必死でしがみ付く。

燃える吐息が夏の最後の夕暮れで紅く見える。

あれは情念というものかも知れない。

帰り際、リンとおれを繋いだリボンを解き、リンは一瞥も無くゴミ箱に捨てた。

おれはリンには黙ったまま、このリボンを拾って自分のものにした。

今はもう薄っすらとしか残っていない左手首の痕を撫でる。

明日には消えてしまうものだが、この肌に甘い痕が刻まれてしまったことに違いは無い。

これだけじゃない。おれの身体の至る所まで、リンという人間の情念が刻み込まれている。

それに触れるだけで、たちまちのうちにおれの肌は燃え上がる様に、作り変えられたのだ。

別に後悔はしていない。

が…

リンは…一体おれという人間をどうするつもりなのだろう。

八月になって、おれは世田谷の実家へ戻った。

両親は久しぶりに息子と暮らす日々を味わいたかったのか、喜び

を隠しきれないでいる。

おれの部屋のエアコンは新しく買い換えられ、部屋の隅にコンパクト冷蔵庫まで置かれてあったのには驚いた。

「階下まで降りなくていいようにね。青弥の勉強の手を止まらせちゃいけないもんね」と、ペットボトルを冷蔵庫の中に入れつつ、母親は自慢げに言う。

愛情のベクトルが何か間違ってないか？

…まあ、いいけどさあ…

こういう場合、家に居ても落ち着いて勉強なんぞしてられるかと、なるから、朝早く自宅から脱出して図書館へ直行。時間が来れば夏期講習の為に予備校へ通う。終わったら、残って自習か、街をふらつき、夕食ぎりぎりに帰宅する。

夏期講習には中学の時の同級生の顔がちらほらと見えたりもするが、お互い会話をするわけでもない。それはそうだろう。ライバル関係以外の何者でもないのだから。

盆も近まった或る日、予備校のロビーで掲示板を見ていたら「水川？」と、声を掛けられた。

振り向くと懐かしい顔があった。

「桐生先輩！」

「この夏期講習を受けていたのか？」

「はい。母親が勝手に申し込んだんですよ。それより先輩はどうしてここに？」

「俺はこのアルバイト講師。折角だし、時間があるなら話でもしないか？昼飯まだだろ？おごるよ」

「はい。ご馳走になります」

人見知りのおれだけど、穏やかで外連味の無い桐生さんには何故か逆らえない。

強がる振りも自分を飾ることも、この人には通用しないというか…

結局は大人ってことなのかな…

近くのファミレスでランチを食べた。

先輩の恋人の美間坂さんはお盆が近いので、京都の実家に帰省していると言う。

美間坂さんの実家は大きな総合病院で、美間坂さんは跡取りなのだが、本人は継ぐつもりはないらしい。

「先のことなんてわからないよ。特に男同士の付き合いなんてさ、証なんて何ひとつないんだから、感情が違えば簡単に別れられる」

「…根本先輩も同じようなことを言っていました。だけど意外だな。」

桐生さんは美間坂先輩との付き合いをそんな風に考えているんですか？一緒に住んでいるんでしょう？それでも不安になりますか？

「いつだって不安だよ。世の中に不安のない恋愛なんてあるのかな？それは男女の結婚でも同じだろう？他人同士が愛によって一緒にいるということは、不安定なものなんだよ。それでも男女だったら家族ができる。それは血の繋がりになる。一種の聖域だな。…残念だが俺達には持てないものだ。それでも人は愛を求め、それでしか生きれない俗物でもある。だから、美間坂に愛されている限りは付き合っていくつもりだが…だが、世間の事情って奴が美間坂を壊すというのなら、俺は自ら引くことには拘らないよ」

「…諦めるんですか？美間坂さんを」

「愛を貪っているばかりでは生活は成り立たない。俺だってこうやってバイト費を稼いでいるんだ。授業料以外に親に世話にならなくていいようにね。本当はゲイの息子に授業料だってやりたくないのさ。だけどこんな息子でも血の繋がりのがあるのだから、仕方ないのだろうね。幸せになりなさいと言う」

「…」

「充分にありがたいと思っているよ」

「おれは…恵まれすぎているのかな。今の今まで親に有り難味を感じたことはなかったけど…」

「目の前に出された食べ物がどんなに好物でも、押し付けられると美味くは感じない。人とは全く持って複雑だね。水川は間違っではないよ。愛情とは自分の感情だ。その感情の表し方は一様ではない。友情、恋、家族愛、憎しみ…どれも愛には違いない。愛するなと言っつのは構わないが、それを受け入れるかどうかは本人にしか決められない。その逆も然り」

「…」

桐生さんの言葉はどれもこれも俺にはなぞ掛けのようで釈然としない。それでも否定する気が起きないのは、どこかで受け入れてしまっているからだろう。

この人は大人だ。俺にはわからないこともこの人にはわかるのだろうか…

「桐生さん」

「ん？」

「リン…宿禰のことなんですが…」

「リンって呼んでるんだろ？リンでいいよ」

「おれにはリンがわからない。リンはおれを愛してるというけど、リンの語る未来におれの姿は無いんです。それって…おれと一緒に生きていく気はないってことでしょ？勿論、桐生先輩の言うとおり、恋に保障なんてない。感情だって移り変わるものだ。だけど、おれは、おれにとつてリンは今まで生きてきて一番大事な…何事にも代えられない人で、この感情ももう他にはありえないくらいリンに繋がれていて…これを失ったらおれは…生きてはいけないうらいに思っているのに…。リンは違う。おれを愛していると誓うのに、おれみたいに必死じゃない。おれがいなくても…」

リンには慧一さんがいる。

切っても切れない血の繋がりが。しかも家族愛だけではなく、彼らには…愛という情念がある。

おれは……ふたりの絆の強さにどうしても勝てる気がしないのだ。

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

4、

「…水川は俺のことをどう見ている？」

「え？」

「真面目な優等生…って思ってたない？」

どう見たって桐生さんは品行方正にしか見えないけれど…

「はい、思っています」

「今はそう見えるかもしれないけど、高校に入るまでは目も当てられないぐらいに荒んでいたよ。家庭環境の所為もあるけど、どこかで自分を壊したかったんだろう。悪い奴らとつるんで多少の悪事にも加担したり…家出をしては連れ戻され、恨めしいと泣く母の顔を見るのが辛くてまた家出をするの繰り返し。未来なんか見えなかった。…俺を救ったのは社会人の男の人でね。俺はまだ14、5のガキで相手は二十以上も離れた大人ではあったけれど、俺達は愛し合っていた。本物の恋をしていたよ。でも、彼が海外に転勤が決まって…当然別れ話になった。俺はどこまでも付いて行くって必死で頼み込むが向こうは許さない。道理だろうけれど、その頃の俺には彼が居ない世界なんて考えられなかったんだ。高校一年の夏だったよ。捨てられたと思い込んだ俺は自暴自棄になった。寮生だったが学校もサボって街をうろついては誰とでも寝ていた。学校の先輩とも誘われれば抱かれていたよ。そういう俺を美間坂は見るに耐えなかったんだろうな。寮の同室でクラスメイトでもあったから…彼は俺を裏庭に引きずりこんでこう言った。『俺はおまえを軽蔑する。おまえは自分の価値さえ測ろうとせずに自分を貶めるくだらん奴だ。俺の目の先におまえのような奴がいるのが俺には我慢ならん。肅清してやる』って脅すんだ。俺は何されるのかわからずにビビるばかりでね…」

温和な桐生さんからは想像もできない過去だった。

綺麗に整った容貌、それでいて控えめで大きな怒号ひとつ声に出すこともない。闊達で有無を言わさぬ美間坂さんの後ろにそっと控えている姿しか俺には思い浮かばない。

「怖くて震える俺に真広はこう言った。『そんなにセックスがしたいのなら、俺がおまえの相手をしてやるから他の奴とはやるな。俺は男は初めてだが、おまえなら勃ちそうだから抱いてやる。俺と付き合ってマトモな人間になれ。俺がおまえを救ってやる』って……」
「……それはすごいな……美間坂さんってそこまで暴君だったんですか？」

「そうだよ。笑えるだろう？でも、俺にはその力が必要だった。だから真広は身を挺して俺を救いあげたんだ。そこに愛はあったんだろうか……いや、真広の思いは俺への哀憐と同情だっただろう。俺だってそうさ、真広を愛して付き合い始めたわけじゃない。その時は真広に救われたけれど、俺は俺を捨てた男をずっと慕っていた。それを白状しても真広はかまわないと一蹴するんだが、俺は真広だけを愛せない自分を責め続けたよ。真広だけに繋がれていたいと願うのに、心のどこかで未だに彼のことを思い続けている……そんな自分が許せなくて別れてくれと頼んだこともあった。けれど真広は決して手を離さなかった。『どんな千尋でも俺は受け入れてみせる』って言うんだ……俺は幸せだと思う？」

「思います。だって本当の愛を桐生さんは与えられている」

「だけど、俺は真広に与えていない。お互いにすべてを与えないと本物じゃないのかな……本物じゃないと一緒に生きられない？」

「……わかりません」

「慈しみあう愛は恋のように激しくは無いが、優しくなれるものだよ、水川。俺はね、昔の宿禰を知っている。

彼を見たのは『サテュロス』っていうジャズクラブだ。去年の体育祭に来てた連中だけど……知ってる？」

「はい、ちらりと見かけたけど、言葉は掛けられなかった。なんか

…太刀打ちできない雰囲気だったから」

「だろ？彼らは独特なもの。でも中学生の宿禰は全く違和感なく溶け込んでいた。と、言うか、他の誰とも違った存在だった。彼は誰も寄せ付けない孤高でありながら、欲をそそる魔女みたいに魅惑的だった。俺も遠目から眺めるだけだったよ。彼は特殊だと言える。」

あれが水川のことを遊びだと言えはそうだろうと誰もが一笑して終わるような性質^{たち}だったよ。だけど、今の宿禰は昔とは違う気がするんだ。水川の言うように百パーセントの愛情ではなくても宿禰が水川を愛しているのなら…それは本物になる可能性もある。勿論先のことは俺にもわからないけれどね…彼を信じ続けられるかどうかは…水川次第だよ。もし傷つくのが怖いなら、水川から別れを切り出せばいい」

「…おれから手を離すなんて…無理です。そんなこと…できやしない」

「…だったら水川、宿禰を信じることだ。もしかしたら、宿禰が求めるものを水川は持っているのかも知れない」

「リンが求めるものって…なんですか？」

「当事者でもない俺がわかるはずもないだろう？それを見つけないとが水川のやるべきことだろう。それは君を…救うことになるんだろうからね」

桐生さんのくれた宿題は難題だった。だがおれはそれを解き明かさなければならぬ。リンを失わずに済む何かを探し出せなきゃならない。

おれは最後に桐生さんに問うた。

「もし、今、昔の彼が桐生さんの前に現れたら…桐生さんはその人を選ぶんですか？」

「…いや、もう俺には真広の存在の方が大きくなってしまっている。けど…まだ彼のことを思い出しちゃう程に整理もついていない。情も潜んでいる。それがいつか結晶になった時、俺の胸からそ

れを取り出すのは真広の手であって欲しいと願っているんだ」

「青弥は彼女でもいるの？」

「え？なに？唐突に」

夕食のテーブルで母親と向かい合って食事を取る。

父親はいつもの残業で帰宅するのは10時過ぎだ。

「だって帰ってくるたびどこか大人びてる気がするから」

「別にいいよ。おれ受験生だよ。勉強でそれどころじゃないし……」

「それはそうだろうけれど……彼女が出来たらお母さんにも教えてね。どんな子が楽しみにしているわ」

本当のところは……真実なんか何ひとつ聞きたくないんだ……

言ってもわかるまい。

おれにもわからないよ。なんでこんなにリンを好きなのかって。

お盆も過ぎ、寮に帰る日の昼近く、携帯のベルになる。

着信音でリンだとわかった。

「リン？」

『ミナ、まだ家に居る？』

「うん」

『今日、寮に戻るんだろ？』

「昼から帰るつもりだけど……」

『俺、おまえの家の近くまで来てるんだけど、今からそっち行っていくかな？』

「え？ええっ！いい、家に？」

『うん、で、一緒に鎌倉に帰らないか？……なんか都合悪い？』

「い、いや……いいけど……あ、場所わかる？」

『うん、大体……住所がわかってるから行けると思うよ。じゃあ、次

の駅で降りておまえんち探すわ』

切れた携帯を暫く持ったまま呆然とする。

リンが…ココへ来る…

え？

なにをどうすりゃいい？

慌てて階下へ降りて母親に告げる。

母親も驚きながらも、訝っている。

そりゃそうだろ。おれが友人を家に招き入れるなんて生まれて初めてかも知れないんだから…

しかも…そいつはおれの恋人で…

「その子ってどういう子？寮の子？クラスメイトなの？成績は優秀なの？志望大学は？お昼は食べるのかしら？ねえ、青弥、何か用意しなきゃならない？てんやものでいいの？それともっと上等の？」
あまりにも俗悪な審問にウンザリだ。

おれはまだ見ぬ客を値踏みする母親を嗤いながら、こつそりと呟く。

おれのリンはこの世で最も美しく誰にでも誇れる比類ない恋人であり、

おれ達は不健全性的行為をこの上なく楽しんでいる関係ですよ。

十分後に玄関に立ったリンの姿に見惚れた母親は、言葉も出なかった。

「これ、つまらないものですが、お盆で実家に行ったので。金沢のお土産です」と、リンは愛想笑いを浮かべて紙袋を母親に渡した。

母は恐縮しリンから受け取る瞬間微かに手が触れると、舞い上がった母はお土産の紙袋を落すというTVでしか見たことのない一連のリアクションを披露してくれた。

おれはもう我慢できずに、声を出して笑い転げた。

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

http://ncode.syosetu.com/n2768i

5、
昼飯は豪勢にうな重が出てきた。

二階のおれの部屋に運んできた母親は、さつきと違ってしつかりお化粧直しをして、リンに愛想を振りまいていた。リンは慣れた調子でそれに応え、上っ面だけのふたりの会話に、俺は閉口した。

「よくあんなどうでもいい話に付き合ってられるな」
痩せたうなぎを口に入れるリンをおれは眺めた。

「なんで？ いいお母さんじゃないか。ミナはあのお母さんのどこに文句があるんだ？」

「文句って…別に無いけど…」

「急にお邪魔したのに高いうなぎまでご馳走してもらって悪かったね」

「母さんのあんな…顔初めて見たよ。母もイケメンには弱かったんだな」

「ミナのお母さんに気に入られる顔で良かったよ」

「けどなんで急にうちに来こうと思ったわけ？」

「ああ、昨日鳶谷さんのマンションに泊まっていたの。で、ミナが今日寮に帰るって言うてたのを思い出して、それで行こうってなったの。鳶谷さんにあげるはずのお土産をミナン宅へ持ってきたってわけ」

「あ、そう」

鳶谷さん^{とつや}ってのは、リンの行きつけの新橋にあるジャズクラブのマスターで、リンを息子のように可愛がっているらしい。去年のうちの体育祭の時にちらりを見ただけで、渋くてかつこいおいおじさんだった。いわゆるちょい悪系親父で、しかもゲイだ。

リンが鳶谷さんのマンションに良く泊まることは知っているけど、

彼らの関係がどこまでか…なんていう下世話な憶測はしたって仕方ない。

リンはおれ以外とは寝ていないと言うが…

彼は別の言い方もする。

『嘘も方便というが、それは相手による。真実を話すということ裁判では原則ではあるが、果たして日頃の付き合いにおいて、真実だけで上手く人間関係が続くのだろうか。特に恋人同士において、お互いが聞きたくない真実を伝えるのはどうだろう…良く人は言う、だって本当のことだから仕方ない。だけど、言わなきゃ済む話も沢山あるはずだ。悪意でも好意でもなく真実を伝えるのは報道だけでいい。個人のやりとりにおいて優しい嘘は必要だよ』と、リンは言う。

だから…リンが寝ていないと言ってもそれは彼にとってはおれに對しての「優しい嘘」にもなりかねないという事だ。

本当のことを言うなら、リンがおれ以外の奴と寝るのは当然気分のいい話じゃないし、ムカつくのは当たり前だ。

だが、結局のところ、リンが他の奴と寝てもそうじゃなくても、おれがリンを好きでいられるかどうかって話なんだ。

そして、おれはリンが他の誰かと寝ていても、おれがリンから離れられるわけがないっていう真実を誤魔化せないっていう事なんだ。

「金沢って…実家に帰っていたの？」

「うん、今年はお袋と梓が13回忌と7回忌なんだ。で、お盆にまとめて法要しようって話になってさ。段取りは親戚連中がやってくれるんだが、さすがにまかせつきりってわけにはいかないだろう。親父も兄貴も日本にいないんだから、俺が挨拶回りやらなんやらしなくちゃならない」

「へー、旧家って大変なんだね」

リンの実家は金沢で代々営む古い造り酒屋で、昔は地元の名士だった。それこそ今でも地元で蔵元さんの名前を知らない人はいないという。

リンのお父さんは長男で跡継ぎを期待されたのだが、商売が性に合わなくて、弟さんが跡を継がれている。昔ほどの勢いはないが、堅実に造り酒屋を継承しているらしい。

「普段はあまり親戚の付き合いはないけど、法事は個人的に済まされないしなあ。まあ、俺は別にかまわないけどね。いい子のフリは得意だ」

「お継母さんも来たのか？」

「勿論。和佳子さんも人付き合いも上手いからね。五月蠅い親戚連中も文句は言わない。だけど法要が済んでからがまた大変だ。例の家族旅行に付き合う羽目になる」

「また？ いいね、今度はどの温泉？」

「金沢から和倉へ行つて…それから、別れた。向こうは向こうで勝手にやってくださいってことで、俺と兄貴は別行動で、那須のペンションで過ごしてた」

「慧一さんと…ふたりで？」

「…そうだけど。なに？…なにか引つかる？」

気が引ける態度をとるならまだしも、リンはなにかを企むかのような挑発的な態度を取る。しかもそれに触れたらこちらが絶対火傷をしそうな気がしてならないから、聞きたいけど聞けない。それさえも計算に入れているんじゃないかと思わせる…そんな素振りなんだ。

迂闊に慧一さんと何かあったのか？なんて…絶対こっちから聞くもんか。

母はリンのことが気になるらしく、階下に降りる度に、リンの事を事細かく聞く。

「ね、宿禰くんは頭いいの？」

「いいよ。宿禰は俺と同じ丁大を受ける予定だよ」

「そうなの？あんなにハンサムで頭もいいんじゃない？モテるでしょうねえ」

「後輩の子らにも人気だよ」

「天は二物を与えるってああいう子を言うんでしょうねえ。親御さんも嬉しいでしょうねえ」

「宿禰は…お母さんは小さい頃に亡くなっているし、お父さんは外交官で外国に居るから…独りで暮らしているんだよ」

「そうなの？…じゃあ、青弥が色々と力になってあげたらいいわね」
「…そうだね」

と、おれは苦笑い。

夕方、おれ達は自宅を出た。

見送る母はいつもより長く玄関先で俺たちを見送っていた。

「ありや、ミ―ハー魂に火がついたかね。リンの追っかけでもやりかねない」

「俺、どこでもオバサン達には可愛がられるんだよ。ニューヨークの慧のアパート連中からも色々貰ってたもん」

どこに居てもリンはリンでしかないのはわかっているが、恋人としてはちょっぴり恨めしいのも本音だよ。

リンとおれが自宅界限を歩くのも初めてだが、こういう時は何故か奇遇というか運命と言うか、へんてこりんな歯車が噛み合うようで、駅の近くで、ばったりと会ったのが、中学時代付き合ってた原田理香子で、その隣に彼氏らしい男性と一緒にだった。

声を掛けてきたのは向こうからだ。

「水川くん、久しぶりだね」

「あ、…ああ、こんにちは」

にこやかな笑顔にこつちもやましいものはないから会釈で応えた。手に持っていた大きな目の旅行カバンを見て、彼女は「今から旅行？」と、尋ねる。

「いや、鎌倉の寮へ帰るところだよ」

「ああ、そうか…こちらは…お友達？」

リンを見て少し恥らうように顔を傾げる。

リンを見る人はみんなこういう顔をするなあ

紹介しようと口を開きかけたその時、リンは一步前へ進み、手を出しながら彼女の質問に答える。

「初めまして。宿禰といいます。水川くんとは同級生でして、彼は成績バツグンなので色々と教えてもらっているんですよ。今日も水川くんの御宅にお邪魔して勉強していたというわけです」と、強制的に原田と握手しながら、相変わらずの営業スマイル…つつか…水川くんってさあ…

「水川くんの中学のお友達ですか？お綺麗ですね。で、そちらは？」握手された手を慌てて引っ込めた原田は、おれの方を向いて隣の男の肩を叩いた。

「森山くんだよ。ほら、覚えてない？中学の時の…」

「そうだったけ？」

あからさまに不機嫌そうなその顔を見つめるが、全く思い浮かばない。

「いいよ、理香子。水川は昔から他人に興味がない奴だったから、俺のことも覚えていないわけないだろ。それよりもう行こうよ。映画の時間に遅れるよ」

「そうだね。じゃあ、水川くん、宿禰…さん。さようなら」

リンの顔を見て明らかに顔を赤らめた原田の頭を小突く彼氏を見送った。

勿論なんの感傷もない。彼女らが上手くいけばいいなとは少しは思っただけだ。

「俺たちも行こうか？」

幾分いつもより優しいリンの声に促されて、駅の構内へ歩き出した。

平日の夕方、仕事帰りの人ごみの中、上りの電車を待つ。

「あれがミナの言ってた昔付き合ってた彼女なのか」

「何故そう思う？」

「勘だよ。それにミナの好みの顔だ」

「そうかな…おれは自分が面食いだとは思わなかったけど、リンの顔を見ているとつくづく綺麗に出来てて、ずっと見てたいなあって思ってしまうよ」

「…おまえ…さらっと惚れるなよ。ここがプラットホームじゃなかったら押し倒しているぞ」

「え？おれ惚気たのか？」

「ばーか。だからミナはかわいすぎる。このまま寮に無事に帰れると思うなよ」

「え？」

「まずは俺のマンションへ直行だ。誘ったのはおまえだからな。嫌とは言わせない」

「言つもんか」

だって、今日、リンの姿を見た時から、ずっと身体が疼いて仕方なかったのは真実だよ。

絶対言わないけれど。

込み合う人ごみに紛れ、微かに触れる程度に指先を絡めて、おれ達は家へ帰る電車に乗り込む。

>
 i
 9
 5
 1
 3
 —
 2
 7
 3
 <

6 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

九月になり、校内が体育祭の準備でざわついている。

受験生である3年生は、本当ならこの時期、勉強以外に気を散らす暇なんかないのだろうが、何故かヨハネ校の学校行事に文句を言う生徒は少なく、この体育祭も楽しみにしている奴らが多い。

おれも昨年続き応援の横断幕を描いてくれと頼まれ、デザインから仕上げまで関わっている。

リンは去年の応援団が好評だった為、特別に応援団の前座に当たる模範演舞をやる事になった。

前学院長直々に神道流の指導をされるそうだから、流石のリンも恐縮しまくっている。

「演舞って言っても、毎年やるわけでもなく、生徒会がやれる生徒を選考、それから職員会議で審議して決まるそうだ。普段見かけない名誉学長だから、初めて挨拶した時は緊張したけど、優しいおじいさんだったよ。72だそうだが、そうは見えなかったな」

「リン、すごいね」

「何が？」

「だって、そんな偉い人に直接指導を受けるなんて、滅多にないことだろ？」

「二年前は美間坂さんがやったじゃん。刀じゃなくて和槍だったけど。でもそんなに期待しなくていいよ。居合い抜刀までやるけど、刀はレプリカだよ。まあ、形だけの演舞だし、二分程度だからそう期待しないでくれ」

そうは言っても、大勢の生徒の中から選ばれるってことはこれ以上ない名誉なことだ。

「じゃあ、今年の体育祭も、リンの勇姿を見に沢山来るんじゃない？」

「うん、鳶谷さん達は来てくれると思うよ。兄貴は仕事で無理だけど…」

「慧一さんは来ないの？…残念だね」

「鳶谷さん達がビデオに録ってくれるそうだから、それを送るよ」
そついうリンもどこことなく残念そうに見える。

剣舞の練習は予想以上のハードスケジュールで、リンとおれは温室で会う時間が全く取れなくなっていた。会いたい時に会えないのは寂しいと文句を言うのと、じゃあ、うちに来ればいいとリンが言うから、前よりもつとリンのマンションへのお泊りが多くなった。

と、言っても始終いちやつくわけでもなく、受験生らしく勉強に勤しんでいる時間が多かった。

ひとつは剣舞に集中している所為なのか、リンの纏う空気が欲情を生み出さなくなっていた。

刀という神秘的で清浄な力に引き寄せられているのかもしれない。
正直言つと、おれの方は物足りないんだけど。

体育祭当日は、秋晴れで大勢の観客に溢れていた。

おれは相変わらず応援席での観戦が多いのだが、たまにクラスの競技に参加しなきゃならなくなる時は、「頑張れよ」と、リンが必ず声を掛けてくれる。

だから、おれも精一杯高校最後の体育祭を楽しんだ。

昼食と一緒に食べないかとリンに誘われるが、リンの応援団は独特だし、おれの知り合いはひとりもないから、断った。

ひとりで食堂に向かっていると、後ろから「みなっち！」と、呼び止められた。

おれをそう呼ぶのはこの世でひとりだけだ。

「根本先輩！」

「お久しぶり〜元気してた？」

「はい。ネコ先輩こそ、相変わらず…」

ひと目見て絶句した。

元々派手な人だが、髪は金髪になってる…水玉のシャツにピンクのカーディガンに細身のズボン…ジャニ系アイドルみたいだ。それが似合っているからまた始末に悪い。

「かつこいいだろ？ボク、関西の雑誌だけど、モデルやってんの。結構人気者なんだ」

「それは…良かったですね。で、わざわざ体育祭を観に来たんですか？」

「そうだよ。だってリンクくんが剣舞をやるって聞いたからね〜去年の応援団の恋人役としては是非とも観ておきたいじゃん。それで、みなっち達は、さすがに別れた？」

「…続けてますよ」

「ふ〜ん。宿禰も真面目だねえ〜」

地味な学生食堂で目立って仕方ない先輩と、安価な定食を食べる事になった。

「うん、懐かしい味だね〜ここのコロッケはやっぱ美味しい〜」

「そんなことより、先輩こそどうなんですか？保井先生とはうまくやっているんですか？」

この学院の体育教師だった保井先生は、根本先輩と恋仲で、先輩が関西の大学に進学したのを追いかける形で学校を辞め、今は京都の高校に勤めていると聞いていた。

「保井？もうとっくに別れたよ」

「えっ！わ、別れたんですか？」

「うん」

驚いて次の言葉が簡単に出てこなかった。

遊び屋の先輩だって、先生との恋は本気だったはずだから…

「だって、保井先生は先輩の為に、ここを辞めて京都まで追っかけ

ていったんですよ？」

「ボクが頼んだわけじゃないもん」

「そうだとすると…先輩だって先生のことを好きだったじゃないですか」

「うん。その時はね…本物の恋かと思ったけどさ。やっぱり違ってた。まわりつかれるとうざくてさあゝきっぱり話をつけたんだ」

「…そう、ですか…」

別に憂えう風でもない先輩に少し腹が立った。おれは先生が先輩に夢中だったのを知っているから、余計に先生が可哀相になる。

「みなっちは保井に同情するだろうけどさ、恋愛ってどっちが可哀相とかどっちが悪いとかは当事者じゃないとわからないんだよ。保井もボクからやっと解放されて自由になれたと思うんだよね。ふたりの未来の為にはこれで良かったと思う、ことにしてる」

「…」

殊更に明るく言う根本先輩だって、本当は不安なのかもしれない。だって、誰も自分の未来なんか見えるわけではないのだから。

昼食後の最初のプログラムは応援合戦。その場を整える意味でリンの剣舞が行われる。

練習の成果もあってリンは見事な刀の舞を見せた。

その力強さと精悍さに誰もが圧倒されたと言ってよかった。

リンが舞っている間、観客は静まり返っていた。

おれ達生徒の中にはリンを気にいらなくて野次る奴もいたが、リンの演技はそれさえも黙らせてしまった。

おれはリンが舞っている間、何故かわからないけれど、胸が締め付けられる気がして堪らなくて、泣きそうになるのを必死に堪えていた。

終わった後、周りのみんなはリンを褒めたたえ、おれにさえもお礼を言うほどだった。

以前のおれなら、リンの恋人には相応しくないだとか簡単にいじ

けたりしただろうけれど、リンが褒められるのが素直に嬉しかった。リンの恋人として誇らしかった。

そして、おれもリンに誇れるように懸命に励もうとさえ思えたんだ。

こんなおれにしてくれたのはリンのおかげだ。

つまらないおれを救い上げ、顔を上げて空を見上げるようにしてくれたのは、リンがおれを愛してくれたからだ。

だから…おれはリンを信じる。

そして、ずっと…ずっと愛し続けるんだ。

体育祭が終わって、温室に足を運んだ。

リンが来る様な、そんな気がしたからだ。

花に水をやっていたら、リンが現れた。

剣舞の見事さを褒めると、リンはおれのことを思いながら演じていたと言う。

それがリンの優しい嘘でもなんでも、そんなことはもうどうでもいい。

おれへの「愛」は本物だと感じたから。

ああ、これが人を愛すると言うことなのだ。

おれ達は身体を寄せ合ったまま、温室の窓から夕日を眺めた。

背中を抱くリンの腕の中は、おれが生きてきた中で一番安らかな居場所だった。

7 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

7、
十一月に入ると、大学の推薦試験が始まり、合格した生徒は授業中でも暢気に昼寝を決め込んでいる。そいつらのアホなツラを馬鹿にしている奴らも、日を追って自らの人生の進路の虚ろさに顔面蒼白、必死さに拍車がかかる。

「あゝあ、俺も推薦にしときゃ良かった〜」
と、寮の同室の三上が溜息を吐く。

三上は長野出身だ。

初めは私立の推薦を狙っていたが、成績が向上した為、国立狙いに進路を変えた。口先は不平を言いつつも、鼻歌なんぞで具合のいい三上が少し不思議だった。

「三上、なんだか今日のご機嫌だね。なんかあった？」

「え？俺、機嫌良く見える？」

「うん。おまえ、ここんとこ塞ぎ込んでいたじゃないか。ちょっと気になってた」

「水川にも心配かけてたか…悪かったな」

「いや、それはいいんだ」

「ほら、俺、彼女とあんまり上手く言っていないって言うてたじゃん」

「ああ、ユミちゃんだっけ？」

三上には隣町の女学院の同級に一年生の時から付き合っている彼女がいる。

「そう…で、俺も第一志望は長野だし、彼女は都内の大学希望だし、このまま付き合っているでもどうせ遠距離で続くわけじゃないじゃん。彼女もそれわかって、それで、別れようってはっきりは言わないけど、そんな雰囲気になっててさ。それを宿禰に相談したんだよ」

「宿禰に？」

「うん」

リンと三上は同じクラスで親友でもある。相談してもおかしくはない。

「それで？」

「宿禰はそんな簡単に別れるなんて納得できないって言い出して。好きなら遠距離だろうと努力して続けられるだけ続けてみるって…で、俺の携帯でユミに電話してあいつが説得したんだよ」

「はあ？」

「今日ユミと会って、やっぱりお互い好きだって確認して、それで続けていこうって…なんか久しぶりに幸せって気分」

「そりゃ…良かったな」

「うん。でも宿禰が人の恋愛事にあんなに必死になるなんて、思わなかったから、逆に感動したわ」

「そりゃ、おれも驚くよ。あいつはそういう事はお互いの問題だからって一切口を挿まないタイプだろう」

「だから不思議なんだよなあ…。まあ、俺としてはユミちゃんと元の鞘に納まったから有り難いおせっかいだったけど」

「…うん」

確かにリンらしくないおせっかいだ。

後日、それを確かめたくてリンに尋ねてみた。

リンは穏やかに笑って、

「みんなが幸せになってくれりゃいいなあと思って。三上が諦めきれてないのは知ってたから、背中を押したただだよ。この後、三上達はどうなるかはふたりの問題だろうけど、少なくとも、三上の気がかりは減ったことだし、これで思う存分勉強に打ち込めるだろう？余計なおせっかいだろうけれど…あいつは俺にとって初めての親友だから幸せになって欲しいんだ」

そう言うリンの横顔が少しだけ物憂げに見えたのは、気のせいな

のだろうか。

十二月になれば模試の連続で、息つく暇はない。

桜が咲くのを夢見て、誰もが必死で猛勉強だ。おれもリンも今までに無いくらい毎日が赤本との格闘だった。

同じ大学に入学して、桐生さんたちみたいにふたりでアパートに住んで、一緒に大学へ通えたらと、想像するだけで、気力も沸く。

リンもおれも、模試では充分合格ラインを越えていた。

だから、きつと大丈夫だねと笑いあっていた。

「そうだ、ミナ。今年のクリスマス予定ある？」

久しぶりに温室でゆっくりと草木の世話をしていた時だった。

「え？…いつもと同じで寮祭に参加するぐらいだよ。今年はゆつくり楽しませてもらえるしね。その後は実家に帰るけれど…」

「三年はそろそろ寮から出て行くんだろう？」

「うん」

基本、三年生は三学期は自由登校になる。

地方出身で地元の大学を受ける生徒は、地元で勉強した方が効率がいいし、授業も補習スタイルだから、気になる科目だけ受けたりする生徒が多い。

おれは都内の大学を目指しているから、授業を受けなくてもいいけれど、自宅に居てもつまらないから、ぎりぎりまでは寮で過ごすつもりだ。

「センター入試が近くなったら自宅に帰るけれど、それまではここに居るよ」

「そうか…ね、クリスマスはふたりでホテルで過ごさない？」

「え？…ホテル？」

「うん、スカイラウンジでフルコース食って、その後、スイートで一泊ってどう？」

「…高校生のやることじゃないよ。第一お金かかるよ」

「いいじゃん。ミナへのクリスマスプレゼントだよ」

「でも…」

「高層ビルからの夜景って綺麗だよ。ミナにも一度見せたかったんだ。高校最後の記念だし…」

「う…ん」

高校最後って…別に区切らなくても、大学に入っても一緒に居られるなら、いつでも行けると思うけれど、リンは思いついたプランを下げようとはしないからおれも甘えることにした。

「じゃあ、俺が見晴らしのいいホテルを探して予約しておくね。クリスマススイブの寮祭を早めに切り上げて、ホテルで会ってどう？ ロマンチックだろ？」

「わかった…楽しみにしてる」

「その日だけは勉強のことは忘れて、めっちゃくちゃ楽しもうぜ。ゴージャスなダブルベッドが壊れるくらい可愛がってやるから」

「…それは…適度でいいデス」

テンションの高いリンに乗せられる感もあったけれど、クリスマスが近づくにつれて、その日が待ち遠しくてたまらなくなった。

リンへのプレゼントを色々考えてみるが、いい案が思い浮かばない。

仕方なく三上に相談した。

三上は彼女にオルゴールをプレゼントすると言う。

「自作オルゴールなんだ。好きな曲と箱を選んでネットで頼むんだよ。ネームも入れられるし、そんなに高くないし…水川もそれにしたら？宿禰もオルゴールだったら、意表を突いて驚くかもよ」

「オルゴールって…女の子にあげるもんだろ？」

「宿禰はロマンチストだから、絶対ウケるって」

「…ウケるかな…」

予想外に三上が推して来るから、結局、おれもオルゴールにした。

おれも大概優柔不断だなあ

曲はリストの「愛の夢」。

…あまりにリンに似合っていて、自分で選んでおいて笑ってしまった。

二学期が終わり、クリスマスイブに会うことを約束してリンと別れた。

寮祭の準備でヨハネ寮生たちが騒がしい中、おれは明日の予定に少し浮かれていた。

夕方、携帯が鳴った。

リンからだ。

「悪いけれど明日は会えない」と、リンは言った。

8 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

8、

…明日は会えない。どういうことだ？

リンの言葉に戸惑ってしまった。

「…どうしたのさ」

『今、成田なんだ。今からニューヨークへ行く』

ニューヨーク？どうして？

そうか…慧一さん絡みに違いない。

「慧一さんに…何かあった？」

震える声で問う。

リンに悟られなきゃいいけれど…

『うん。どうしても行かなきゃならなかったんだ』

焦ったリンの声が響いた。本当に心配な状況にあるんだろう。

だけど、おれだって…

「そう…残念だよ。…楽しみにしてた…」

『ごめん。ごめんな、ミナ。この埋め合わせはちゃんとするから…』

切羽詰った声だった。

これ以上リンを責めてはいけなと感じた。

「いいよ。気にしないでくれ。緊急なことなんだろうから、仕方ないよ。気をつけてね、リン。年を越したら学校で会おう」

精一杯平気な振りをした。

電話を切った後、少しだけ涙が溢れた。

だって仕方が無い。本当にすごく楽しみにしていたんだ。

リンとふたりだけで過ごせる高校最後のクリスマスを…

楽しめたかったんだ…

…

翌日の寮祭もお祭り騒ぎの皆に合わせて、はしゃいだりもするけど、やっぱり寂しい。

同室の三上はなにかとおれを気遣ってくれるけれど…

「水川、そんな顔をするなよ。宿禰ものつぴきならない急用があったんだよ。あいつ、約束を簡単に破る奴じゃないもの」

「わかってるよ、三上。わかってる…」

わかつてるさ。

…リンにとつて慧一さんがどんなに大切な人か。

血の繋がった兄というだけの関係じゃない。もっと深い絆であのふたりは結ばれている。

おれが辿り着けない場所で、あの兄弟は理解し合えることができるんだ。

慧一さんにはリンしかない。もしそうなった時、リンはどうするのだろう。

リンは何を差し置いてでも、慧一さんを選ぶんじゃないだろうか…

それは確信だった。

そう結論付けてしまったら、後に残る答えは必然的にひとつしかない。

リンが選ぶのはおれじゃないって事だ。

世田谷の実家に帰ってからもリンからの連絡はなかった。

いくら思いあぐねても仕方ないから、一心に勉強に励んだ。

勉強をしていれば、なんとかリンの事は忘れられる。

晦日、リンからメールが届いた。

慧一さんが不本意にリストラされたこと、何とか再就職が出来たこと。ニューヘヴンという街に引っ越しだこと。慧一さんが落ち着くまで、そこで一緒に暮すこと…

最後に、「T大合格は二人の目標だから、精一杯頑張ること！」と、綴じられていた。

ふたりの目標…リンはそう思っている。
だったらおれも頑張らなきゃならない。

リンの本音がどうであれ、おれに出来ることはリンを信じること
だけはずだ。

リンを疑っている時点で、おれは慧一さんに戦いを挑む権利など
持たなくなってしまうんだ。

リンを愛している。だったら、おれは最後までリンを信じるだけ
だ。

新年が明けた。

おれは寮に戻った。

わかつているが、リンは帰ってこない。

去年も一昨年も一緒に行った八幡宮へ独りで初詣に行った。

一緒に大学へ行けますようにと祈願した。

リンの分のお守りを買って、大事にポケットに入れた。

おみくじを二人分引いた。ふたりとも大吉だった。

リンといつも一緒にいれる様にと、ふたつのおみくじを合わせて
木に括りつけた。

一年前も二年前も、リンはこうしてくれた。

今はリンは居ないけれど、きつと一緒にならこうしてくれるに決ま
っている。

大丈夫だ。おれはリンを信じられる…

三年生の三学期は、基本自由登校だ。

私立の進学校だから、遠方の生徒は帰省したまま、戻らない奴も
多い。

俺も授業は選んで、補習に力を入れた。 図書館や自習室に籠も
る時間も多い。

骨休みは温室で過ごした。

水やりや草木のデッサンをしているだけで心にゆとりが持てる。
無心に植物を描いていると、その隙間にどうしてもリンの影を描き込んでしまうクセがついた。

リンと温室の植物たちは、おれの絵には当たり前に必要な題材となつてしまっていたんだ。

居ないリンの姿が温室のあちらこちらにはつきりと見えてしまう。その姿をデッサンするのは容易い。

リンの笑った顔や真剣な顔、ちよつとひねくれたり凄んでみたり…ああ、どんな表情だつて、描ける喜び。

「リン、早く帰つて来いよ…」

そう声に出して途端、涙が溢れ止まらなくなった。

「ばかだなあ…おれ…ほんと、ばかだ…」

だって、ほんとうに、リンが、好きで…好きでたまらないんだよ。

> i 1 2 4 8 2 — 2 7 3 <

9 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

9、

センター試験が目前の明後日に迫った。

リンはまだ帰ってこない。

おれは東京の試験会場を選んでいるから、夕方には実家に帰る予定だ。

補習授業が終わり、自習室へ向かおうとするおれにクラスの高橋が声を掛けてきた。

「いよいよ明後日だな」

「ああ」

「水川とは色々あったけど、おまえがいてくれたおかげで、俺も充実した高校生活を送れたよ。礼を言う」

「…別におまえに礼を言われるようなことはしてないけど」

「おまえの存在が、俺の自尊心を打ち砕いてくれたんだよ。この学校に来るまで、俺は勉強では誰にも負けたことはなかった。だけどここに来て、初めて自分以上勉強のできる奴に出会った。おまえに負けたくない一心で俺は俺なりに頑張ってきた。最後まで、おまえに勝てなかったけれど…悔いはないって思えるんだ。だからありがとうって言わせてくれ」

「…うん」

差し出した高橋の右手を握った。固く握手を交す手を見つめる。

そうだな…拘っていた下らないプライドさえ、きっと大切な意味があったかも知れないんだろうな。

「宿欄も大受けるんだろ？おまえと同じ物理工学科？」

「いや、あいつは建築学科だよ」

「俺と…同じじゃないか。最後まで俺の足を引っ張る気なのか…嫌味な奴だ」

「…」

別にリンはおまえを相手にしてないと思うけど…と、心で思ったが口には出さなかった。

口では嫌がる風を気取る高橋は、本気で嫌がっては居ない…どころかなにやら少し嬉しそうでもある。

「皆受かるといいな」と、らしくないことを言う。

「きつと…絶対合格するさ。おれたちはそれだけのことをやり遂げただろう?」

「ああ、俺もそう思う。まあ、水川には勉強も敵わなかったし、恋の相手にも太刀打ちできなかったがね」

「…恋愛は楽しいばかりじゃないけどね」

「…そりゃそうだろう。相手は数学でも国語でもない。正しい解き方もない。だから、人は恋をするんだろうか。自分だけの答えを導くために…なんてね。まあ、俺は恋より、豊かな老後の為に生きる方が大事だがね」

「恋に狂うのは愚か者だろうから、高橋の生き方は正しいのかもしれないね」

「人間の愚かさは無限だって言うじゃないか。だったらそれを追求しても楽しいんじゃないか?…俺はおまえがうらやましいと、言ってるんだぜ。絶望なんかするなよ」

「ああ、そうだな」

言うべき本音ではなかったが、つい口に出してしまった。

どっちにしてもこの学院ではおれの事はいざ知らず、リンの話題が出ない日はない。

ひと月以上も姿を見ないリンが、どこで何をしているのかを、おれに毎日尋ねる後輩だっているんだ。

皆ゴシップ記事みたいにおれ達の行き先がどうなるのか、噂しているに決まっている。

教室を出て、しばらく自習室で過ごした。

その後、日課の温室の水遣りをする。

さっきの高橋の言葉がきっかけで、押さえていた感情が膨らんでいくのがわかった。

高橋の言うとおりだ。

これは、この感情は愚かな恋なんかじゃない。
たとえそうであっても俺自身、この想いを誇れるほどに愛おしい
と思えるんだ。

おれがリンを愛している。

これこそが一番輝かしいものではないだろうか。

リンに会いたいと思った。会えなければ、声だけでも聞きたいと…
携帯電話は寮に置いてきた。今、ニューヨークは何時だろうか…
12時間前だから…夜中だ。それでも許してくれるだろうか。

水撒きを急いで終わらせ、ヨハネ寮に帰った。

部屋に戻り、机から携帯を取り出す。液晶画面にリンの番号を確認して、ボタンを押した。

心臓がバクバク鳴ってるのが可笑しい。顔が火照っているのも笑
うしかなかった。

…リン。どうか、電話を取ってくれ。

『ミナっ?』

「お、どろいた…取るの早い」

『ちょうど、ミナに電話しようとしてた。俺、今、温室にいるんだ
けど』

「え?リン、こっちに居るの?い、いつ、戻ってきたの?」

『あ、言ってなかったか…ごめん、昨日鎌倉に帰ってきてた。で、
今日久しぶりに登校したの。ミナを探しに教室まで行っただよ。
高橋は学校には来てたって言うから、あちこち探したけど見つかん
なくて…ミナ、どこに居るの?』

「寮に戻ってたんだ。携帯を取りに帰ってた。リンに連絡したくて

…」

『そうか…会いたんだけど、会える?』

「う、ん。勿論、おれも会いたい」

『じゃあ、寮へ行くよ』

「いや、おれが行くから、温室で待っててくれ」

『いいけど…おまえ、また外に出なきゃならなくなるだろ?もうすぐ日も暮れるし、外もここも寒くなるよ』

「いいんだ。温室で会いたいんだ」

『わかった。待ってるから早くおいで』

電話を切った後、大きく息を吐いた。

こっちに帰って来てるなんて思いもよらなかった。

学校に来てたのに、会えなかったなんて…よっぽど運が悪いや。

ああ、すぐ行かなきゃ、早く会いたい。

…落ち着けよ。馬鹿みたいにはしゃいで、肝心なものを忘れるな。しまっていたリンへの贈り物を机から取り出し、紙袋に入れた。

焦る心を落ち着かせるように、深呼吸をひとつして、部屋から出た。

温室まで、駆け足で急ぐ。

早く行かなきゃリンが消えてしまふみたいで、焦ってしまう。

空気の冷たさなんて感じない。

背中を射す夕日を振り返る暇なんてない。

リン、君を確かめなきゃおれは…

温室のドアを開けた。

「リンっ!」と、叫ぶ。

だが、返事はない。

「リン、どこだよ!」

中を見渡してもリンの姿は見えない。

間違いなく温室で待ってるって言ったのに…

「リン…」

帰ってきたっていうのは嘘だったのか？それともあの電話の声は幻なのか？

…そうだよ。だいたい学校に来ているなら、そういうニュースがおれの耳に聞こえてもいいはずだもの…

あれはリンの嘘だったんだ…

期待が大きかっただけに、ひどく落胆した。

椅子に座り、窓の外を眺めた。

ちょうど太陽が教会の屋根に隠れる寸前だった。

ガラス窓に映った自分が見えた。

情けない顔でこちらを見ている。

「まるで桜が散った受験生の顔だな」

おれじゃない声がガラス窓から聞こえた。

ガラスに映るおれの顔の後ろに、リンの姿がはっきりと見えた。

「…」

おれは怖くて、後ろを振り返れなかった。

だって、振り向いたら消えてしまうかもしれない。

「リン…？」

「うん。…ただいま、ミナ」

おれの背中を抱き、その口唇がおれの頬に口づけるのが、ガラスに映る。

おれは回されたリンの手を握り締めた。

立ち上がり振り返り、両手でその身体を確かめる。

「リン…会いたかった…」

それだけ言うのが精一杯だ。後は声にならなかった。

リンの胸は温かく、おれの涙をぬぐう口唇は柔らかい。

…愛おしい。愛おしい…離れないでくれ、離れないで…愛している。

沸き起こる得体も知れないすさまじい感情。

このおれに？

孤独で恋に怯えていたおれに、こんな感情が存在するのか？
あるとは思わなかった。思えなかった。

リンはおれの感情をまさぐる唯一のものだ：

未来永劫こんな恋を知るのは、おれには、リンしかない。

10（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h/

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h/

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

10、

リンに誘われるままに、そのままリンのマンションへ行く。
早くリンのすべてに触れたかった。

おれの欲しいものは、すべてリンが持っている。それ以外、おれは要らないとさえ思えてしまう。

ベッドの上に座り、服を脱ごうとした時、リンは「肝心なことを忘れてた」と、紙袋を渡してくれた。

「お土産だよ」

袋から出してみた。二十センチほどの丸い輪に羽飾りが垂れている。インディアンのお守り、ドリームキャッチャーだ。

温室で渡したクリスマスプレゼントとお守りをリンはとても喜んでくれたのだが、代わりにおれが貰えるとは思っても見なかったから、これはハッピーサプライズだった。

「これ、知ってる。悪夢から守るんだよね。この蜘蛛の巣みたいな網目に悪夢が引っかかり、良い夢だけが通り抜けるんだろ？」

「そうだよ。オジブワ族が作った本物の奴だから、きっと効き目があるだろうね」

「…悪夢でもリンが出てくれば、別に見てもいいんだけどね」

「ミナにとってそれが良い夢なら、悪夢とは呼ばないんじゃないか？」

「最もだね」

…リンが出てくる悪夢なら、何度も見ている。

おれにさよならを言うリン。懸命に後姿を追いかけるが、どれだけ走っても追いつけないんだ。

「どうしたの？ミナ」

黙りこくったおれを、リンは心配そうに覗き込んだ。

「いや、なんでもない。このお守りがおれを守ってくれると思うと心強いよ。きつと丁大合格だね」

「お守りに頼らなくてもミナは大丈夫だよ。まあ、俺も落ちる気はしないけどね」

「すごい自信だ。頑張ったんだね、リン」

「ああ、そりやもう…三度の飯以外は受験勉強三昧だったもの」

「おれも…机にかじりついてばかりだった。だからかな、リンの夢ばかりみてた…」

「ごめんね、ミナ。クリスマスの約束は破っちゃうし、ずっとほったらかしにしちまうし…甲斐性なしの恋人だね。代わりに沢山愛してやるから、割り引いてくれよ」

そう言つて、おれをシートに押し付けるリンは、前よりも色気が増した気がしてならない。

触り方もエロくて…翻弄される。

ひと月以上何も経験していない奴だなんて、絶対思えないから、ムカつく。

どっちにしても、リンの身持ちの悪さは了承済みだが…こちらが好き勝手に弄ばれると腹も立つ。

「そこ、やだよ」「じゃあ、やめる?」「や、やめない…いや…」

「どっちがいいんだよ、ミナは」「リンがいいに決まってる。でも優しくしてくれ。頼むから」

リンはいつだって余裕でおれを抱く。百戦錬磨の策士だ。

「ミナ、かわいいね」

黒々とした黒曜石の瞳が何を考えているのか、おれは知る由もない。

翌日、別れを惜しみつつ、おれは実家に帰った。

試験会場がリンとは違うから、一緒には受けられない。

二日間の試験が終わったなら、リン宅へ直行することだけを楽しみに、おれはセンター試験に挑んだ。

自己採点で第一段階はクリアしていた。

両親は手放して喜ぶが、まだ二次試験があるからと、家を出ようとする。

「あら、もう学校の授業はないんでしょ？わざわざ鎌倉に行かなくてもいいんじゃない？」

「本番はこれからなんだ。学校の補習も受けたいし、何より集中して勉強できるから、寮に帰る」

「…本試験はまだまだ先だわね。てつきりうちに居てくれるものかと思ったのに」

「母さんだって仕事で忙しいんだから、おれが居ない方が家事が減っていいんじゃない」

「それは…そうだけど。男の子は家から出て行って一人前っていうけれど、青弥は早く大人になっちゃって、お母さん、寂しいわ」

「…じゃあ、行ってきます」

生活に困らない保障をしてくれる両親には、感謝するし、愛情だつて充分に理解しているつもりだけど、将来のおれは、親の期待に沿う人生ではない事がわかるから、何となくでも心が痛む。

リンへ連絡したら、品川の高層ホテルで食事をしようと言う。

クリスマスディナーをすっぱかした償いだと言う。

そんなに気にしなくていいと言ったものの、単純に嬉しさは隠せない。

駅から少し離れた緑に囲まれた静かなホテルでその夜は過ごした。窓の向こうの夜景を見つめ、ふたり抱き合い寄り添っていた。

「試験どうだった？」「大丈夫だと思う」「俺もさ。まあ、化学は少し自信がないけど…」「おれは現社だ。世界史にしておけば良か

ったよ」「今更言っても仕方ない。やることはやったんだ。人事を尽くして天命を待つってこういう事だよな」「全くだな…」「ミナ、寒くない?」「大丈夫だ、リンがあつたかいから…」

おれ達は未来を話すことはしなかった。

ただ今ある現実だけを語り続けた。

その現実がおれを支える過去になるかもしれない。

それ程にこの一刻一刻が大切に思えた。

ふたりとも無事にT大の第一選抜に合格した。あとは二週間後の本試験まで気を抜かずに集中することだけだった。

リンは常におれの傍に居て、失いかける自信や苛立ちを慰めてくれる。

リンが居れば、俺は迷わずに済んだ。

おれがあんまり、リンから離れようとしなから、まるで捨てられることを畏れる子犬みたいだとリンは笑う。

違う、リン。

捨てられるのを怖がっているだけじゃない。おれは…自分を見失うのが怖いんだよ。

本試験が終わり、後は卒業式を待つばかりだった。

寮での生活ももうすぐ終わる。

試験を終えた同室の三上も自分の机を片している。

「水川とは一年だけだったけど、良かったよ、おまえと同室になれて」

「え?なんで?」

「自然と勉強が身についてくる。わからないところも色々教わったしな。ありがとう」

「いや、こっちこそ…三上には色々助けてもらった…宿禰の事なんかも…」

「俺はなんもしてないよ。それより良かったな。宿禰も丁大合格は自信があるって言ってたぜ。これからもずっと仲良くしろよ」

「うん、ありがとう…」

屈託のない三上の言葉はありがたいが…一方でおれはある噂を耳にしていた。

リンが日本の大学には行かずに、アメリカに留学するという噂話は、なんとも否定できないような気分になった。

それを本人に聞いたただす勇気も持たないおれは、ただリンとの蜜月に浸るばかりで、目を瞑るしかなかった。

卒業式を明日に控えての予行練習を終え、生徒達が一斉に下校する。

おれは温室をいつもより丁寧に掃除をしていた。

この温室とももうすぐ離れる事になると思うと、なんだか寂しさを通り越して辛くなる。

おれの高校生活の居場所をくれた空間だった。

リンと出会い、語り明かした。好きだと誓った。

…何度も愛し合った。

ずっと一緒にいると誓い合ったのもこの場所だった…

おれ達がいなくなった後、また誰かがおまえ達の世話をしてくれるといいなあ…

大切に育てた草木に水を撒く。

ドアが開き、リンの姿が見えた。

「あ、綺麗になったね」

「もうすぐこともお別れだからね。立つ鳥跡を濁さずって言うからね」

「…そうだね」

リンは窓際に立って、ローズマリーの葉を指に取り、水を切った。

「ミナ…話があるんだ」

陽の影になったリンの横顔が、綺麗だった。

11（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

11、

おれは黙ったまま、ジョウロを置いた。

リンには近づけなかった。少なくとも楽しい話ではない。

代わりにリンはおれの傍に近づいて、手を伸ばせば触れるほどの、真正面に立った。

「ミナに謝らなくちゃならない…俺は、合格しても丁大には行かない」

「…」

リンの顔を眺めた。どことなく憂えた端正な顔…少しだけ眉間が歪んでいるけれど、美しい。

「明日の卒業式が終わったら、アメリカに行く。…向こうの大学へ行こうと思ってる」

その意味はわかっていた。

「そ…うか…リンは前から留学したいって言ってたもんな…おめでとう」

「ミナ…」

「だ、いじょうぶだよ。おれ、ま、ってるから…うん、四年ぐらいすぐだ。それに夏休みや冬休みは帰って来られるだろ？おれも、バイトしてリンに会いに行くから…大丈夫だ…」

鼻の奥がツーンとなり、涙が出るのを必死で押さえていた。

「ミナ…ごめん。もう…ミナとは会えない…」

「…どうして？」

聞かなくてもわかっていた…なのに、口は勝手に動くんだった。

真実を暴き出したってなにも良い事なんか無いのに…

「…慧一の傍にいたいから…」

リンは目を逸らす事無くそう言い切った。少しでも弱みを見せてくれたら、俺だって哀れと思うのに。その姿は誇らしくさえある。

「じゃあ…なんで、今までおれと付き合ってた。ただの遊びか？暇つぶしに、世間知らずのガキを丸め込んで好きに惚れさせて…楽しんでいただけなのか？」

そうじゃない…リンは誠実だった。そんなことはわかっていた。

リンとおれは本物の恋をしていた…

それだけは真実だ。

「結果的にミナと歩けないのだから…そう言われても仕方ない。ミナ…俺を憎んでくれていいよ」

「…ひどいね」

バシッ！

…リンの頬を叩いた音が驚くほど温室に響いた。

おれの平手打ちなんか、避けようと思えば簡単にできたはずのリンは、正面からそれを受け止めた。

リンの左頬が瞬く間に赤く腫れ上がった。

「…一度でいいの？ミナは幾らだって俺を殴る権利があるよ」

「これ以上叩いたら、こっちの手が持たない。一度だけだって、ひりひりしてる」

「…ゴメン」

「いや…いいんだ。どちみち長続きする恋じゃなかったんだ。リンとおれでは価値観も生まれ育った環境も違いすぎる。リンは慧一さんと暮すのが一番幸せだろうし、おれも…丁大に行って勉強して…いい恋人でも探すよ」

「…」

「ねこ先輩が言ってた期限付きの恋っていうのは…本当だったんだな…」

「ミナ」

「本当の恋だと信じていたんだ…でも、しょうがない。だって恋はひとりでするものじゃないもの。それは片思いつて言うんだろ？」

「…」

「いいよ。もう…いい。充分楽しんだから、もう、おれに関わらな

くていい……」

「俺は……」

「しばらくひとりにしてくれないか、宿禰。水遣りが終わってないし、泣き顔でここを出て行くわけもいかないから……」

「……わかった」

温室を出て行くリンの姿を振り返ることはしなかった。

そんな力はどこにも残っていない。

精一杯の強気でリンに別れを言えただけでも、自分を褒めてあげたい気分だ。

さつき叩いた右の手の平を見た。

「あれがリンに最後に触れた温もりになってしまったのか？」
溢れてくる涙を抑える必要はなかった。

リン以外の奴が、この温室に来るはずはないのだから……

夕暮れになり温室を出た。

枯れるまで泣いても、心は浮かび上がる気配はない。

校庭を突き抜けて校門に向かうおれに、担任の藤内先生が教室からおれの名を呼んだ。

手招きして呼び寄せ、「おれが入れた最後のコーヒーを飲んでいけ」と、言う。

黙って頷き、化学準備室へ入った。

ゆっくりと昇る湯気を眺めた。

先生は黙っておれにコーヒーを差し出した。

「立派な磁器のカップで頂くなんて初めてです」

「最後だからな」

最後か……

始まりがあれば終わりが来るのは当然だ。

それに…なんとなくは…いやはつきりとわかっていたはずだった。リンがいつまでもおれのもので、おれの傍にいてくれるわけはないと…

夢を見続けたいと願っていただけだ。

「水川は…」

「はい？」

「将来なんになりたいのか？…なんてことは聞く気はない。それより、ここで過ごした三年間は水川にとってどうだった？有意義な過去になりそうか？」

「…ええ…とても…」

リンのことを思っただけで泣いてしまう。

「水川だけが辛いんじゃない」

「…わかってます」

「俺は君に言ったことがあるね。つまらん常識やプライドに捕らわれていると後で後悔するぞ…」と

「…」

「おまえをけしかけた一端の責任が俺にはある。それをおまえに謝るべきなのかな？」

「…いいえ、先生。あの時先生が背中を押してくださらなかったら、おれは…おれはリンと恋をする勇氣は持てなかった…おれは、リンを愛したことを…一ミリだって後悔していない」

先生は黙っておれの言葉を受け止めてくれた。

教室を出るおれに、先生はひと言だけ言葉をくれた。

「…水川、卒業おめでとう。君の行く道に光溢れんことを、祈る」

寮に帰り、部屋を片付けた。

あらかたの荷物は実家に送り終わっている。残った教科書や参考書は後輩に譲った。

明日の卒業式には母親も出席すると言う。

成績優秀者に送られる県知事賞を贈呈される姿を見たいと言っただ。

こんな気持ちを悟られるわけはいかない。
ただ冷静に式に望むことだけ心がけた。

その夜はなかなか寝つけなかった。

事の次第を察した三上は黙って、冷たいタオルを差し出した。涙で腫れた瞼に置いた。

あんなに簡単に別れを告げられるとは思ってみなかった。

「憎んでくれていいよ」と、言ったリンの本心がどこにあるのか…それを考えなきゃならない気がした。

リンはおれを嫌いになったわけじゃない。

慧一さんの傍にいたい…と、言っただ。

リンは…悩んだんだろうか…

「一緒に受験、頑張ろう」…あの言葉はおれへのやさしい嘘だったんだろう…そして試験が終わるまでずっとおれの傍にいてくれたんだ。

リンはとつと決めていたんだ。この日に別れを告げることが…

「リン…おまえを憎めたらもつと楽になれるのかい？でも無理だ。憎む気持ちなんて少しもおきやしない…」

こんなに好きなのに…別れなきゃならないなんて…

…夢を見た。いつもよりはつきりと、でもいつもは逃げていくリンなのに、今日の夢はおれを抱いて笑っている。

「愛してる、ミナ、愛してる」と、繰り返すリンに「おれも、ずっと、一生、リンが好きだ」と、応える。

リンは「俺もだ。ずっとずっと…ミナに恋している」
そう言った。

雨天の予報が見事に外れた朝だった。

少しだけ温んだ西風が校庭の砂塵を巻き上げた。

卒業式が無事終わり、夕方から寮で送別会があるからと、母親を先に返した。

校庭のあちらこちらで別れを惜しむ生徒や後輩で埋め尽くされていた。

教会の影に藤宮先生と…慧一さんの姿を見た。

遠くからでも人目を惹く、美しい人だ。

あの人とリンが血の繋がった兄弟で愛し合う仲であっても、軽蔑したり卑しんだりする気は起こらない。

逆にあの人じゃなきゃ、リンを受け止める人はいないんじゃないだろうかとさえ思えてしまう。

…あの人を憎めたら、少しは気が晴れるかもしれないけれど…憎むにはあまりにも、あの人を知らなすぎる。

踵を返し、温室へ向かった。

最後にあの空間と別れを惜しみたい。

温室に着いたおれはポケットから指輪を取り出した。

リンと一緒に買ったおそろいの銀の指輪だ。

それを左の中指にはめた。

別れたのに愛していると誓った指輪をつけるなんて未練らしいけれど、今日からは高校の規則に縛られないでもいいんだから、好きなアクセサリーぐらいしてもいいだろう。

最後の水遣りと草や花のひとつひとつに丁寧に水をやる。

温室の草木の世話は、おれ達が卒業したら、藤内先生がしてくれると約束してくれたから大丈夫だろう。

水遣りが終わり、今は盛りのシンビジュームのデッサンを始めた。花屋で去年の冬にリンと選んで買った花だ。世話は大変だったけど、今年も無事花を咲かせてくれた。

しばらくしてデッサンをしていた手元が急に暗くなり、今まで晴れていた空が曇天に変わった。

すぐに夕立のような雨が勢いよくガラス窓を打ちつけ始めた。

おれは急いであちこちの窓を閉める。

遠くで雷鳴が響いた。

「春雷か…春を促す兆しだな」

おれは中断していたデッサンを続けた。

朝から、リンを姿を見れずにはいられなくて、ずっと追いかけていた。

リンはおれを見ようとはせず、周りの友人や後輩に囲まれて別れを惜しんでいた。

…おれのことなんか、もうきれいさっぱり片付けてしまったんだろうなあ。

いい思い出にするには、しばらく時間がかかりそうだ。

「リンのばか…」

呟いても誰も返事はしない。

執念深くいつまでもリンを思い続けてやるのも慰めになるかな。いつか同窓会で会ったら、恨み辛みを嫌味ったらしくと言ってやるんだ。

そしてリンを一杯困らせてやるんだ…

だけど、リンはきつと…きつとそんな戯言をさらっと流して、「ミナは、かわいいね」って、きつと…

不意にバタンと、温室の扉が開いた。

髪も制服も雨に濡れたリンがゆっくり、入ってくる。

「ちょっと雨宿りさせてくれよ」

それは、リンがおれに言った最初の言葉だった。

おれの心臓があ頃と同じように早くなる。
あ頃とは全く違うおれ達なのに…

12 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

12、

濡れた髪からいくつかの雫が落ちていた。

あの時と違い、この季節では寒かろう。

じっと立ち止まっておれを見つめるリンに、おれはカバンからハンドタオルを出して、彼に渡した。

皮肉な事だが、ハンドタオルもあの時のものだった。

この一連の偶然をリンが覚えているのかは定かではないけれど、受け取ったリンはにっこり笑い「ありがとう」と、言う。

昨日叩いた頬は腫れてなかったから、少し安堵した。下に目を移すと…なんか変だ。

「釦…」

「あ、ああ、回りの奴等にひとつ残らず取られてしまったよ。なんでもブレザーの釦に拘るのか、俺にはさっぱりだ。なにか適当な事例があつたら教えてくれ」

「みんな…リンの着てたブレザーの釦が欲しいんだよ。ただの釦じゃない。リンが三年間腕を通したっていう記憶があるんだ」

貰った奴らが少し羨ましく思えて、ムキになつてしまう自分が恥ずかしかった。おれだってリンのものだったらなんでも欲しいもの。

「ふん、そんなもんかな」

リンは頭を傾げ、おれのハンドタオルでがしと髪の毛を拭いている。

「ミナ、また描いてたの？ああ、綺麗なシンビジュームだね。良く描けてる」

机に置いたスケッチブックを手を取ったリンは何枚かめくり、眺め始めた。

草木の絵も多いが、それと変わらないほど、リンのデッサンをしたためであるから、あんまり見られると恥ずかしいくてたまらない。

「残念だな」

「何が？」

「俺のデッサンはこんなにあるのに、ミナの描いた油絵を見れなかった」

「あ…途中までは出来てたんだけど…」

油絵で描いたリンの肖像画を卒業するまでに仕上げて、リンに渡そうと思っていたけれど、受験勉強に打ち込みすぎて、ほったらかしにしてしまっていた。美術室の倉庫に保管したままだ。

「ごめん。卒業の記念にリンにあげようと思っていたのに…間に合わなかった」

「いや、いいよ。今更、俺を描いても、あまりいい気分はしないだろうから…」

「そんなことはない！」

思わず本気で出た言葉におれ自身も慌ててしまう。なんだろう…ドキドキしてる。

「…リンと別れたからって、リンを描きたくないなんて…思わないよ。だって…」

別れたからってリンを嫌いになったわけじゃない。

おれはリンを見つめた。

昨日とは違う優しく、慈しみのある眼差しでおれを見つめるリンがいた。

「リン…昨日は…悪かった。叩いたりして。良く考えたら、人の人生を自分の好きにしている権利なんかない。リンがおれから離れても、俺が怒ることもなかった」

「そうかな。俺はミナが真剣に怒ってくれて少し嬉しかった。ただ…かっこつけすぎてた」

「え？」

「ミナに嫌われようとしてた。憎まれてもいいから、ミナを自由にさせたと思っていた。それこそ勝手な思い込みって奴だね。それに…あれは本心じゃない」

「…」

リンは左手をゆっくり上げて、俺に見せた。

中指におれとお揃いの指輪…

「ミナが好きだよ。この恋は本物だ。これからずっと続く想いだ」

「…」

「指輪、付けてくれたんだね…ありがとう」

「ち、ちがう。別に深い意味は…」

慌てて隠した左手が恥ずかしかった。今ここで強がるフリなんて意味はないのに…

「ミナ…もう俺を嫌いになった？」

「…昨日別れて、すぐに嫌いになれるわけないだろう。おまえを好きになる時間をどれほど費やしたと思ってる。…簡単に嫌いになるぐらいなら…初めからおまえを好きになつたりしない。おまえを…引き止められなかった自分が悔しいだけだ」

「ミナへの想いが慧に比べて劣っているわけじゃないよ。ただ慧一は特別なんだ」

「…」

「慧一は俺が生まれた時から、俺を愛していた。その愛は偉大で複雑だ。親愛や情愛…俺を欲しいと思う愛情…俺はそういう慧一に大切に育てられた。慧一が居なかったら今の俺はない。これまで何も知らなかった俺が慧一の本当の想いに触れてしまった。それを知った俺は慧一を守りたいと思った。慧一の生きる糧は俺だ。そして…俺も慧一が幸せじゃないと、嫌なんだ。外から見たら気持ち悪いと思うかもしれない。だけど、俺は慧一の傍にいてあげたい。それが

慧一の望みなら、それを叶えてやりたいんだ」

「そんなに？」

「慧一だって同じだ。俺の幸せだけを考えてくれている。だから、ミナを選んでも、俺が幸せならそれを許すだろう。慧一はそういう奴だ。だから…ゴメン、ミナ。おまえと一緒に歩けない。…けれど、ミナを想う心は自由だ。ミナが好きでたまらないから、離れていたって、ミナに恋し続けるだろう。それを、許してくれる？」

「離れたら…なにひとつ共有することはできない。その恋心は永遠じゃないよ」

「感情は寄せては返す波と一緒にだよ。一秒だって同じ流れじゃない。でも寄せる波の中にいつだって…ミナへの恋心が潜んでいる。そう思えば長続きするかもな」

「…最後までリンに言いくるめられてしまいそうだ。信じたくなくなるじゃないか」

「無理強いはしてないよ。ミナの想いは自由だ」

「おれの方が…リンよりずっと強いことを証明したくなる。絶対に…好きな想いはリンには負けないよ」

「ありがとう、ミナ」

「礼を言うな。全部、全部おまえの所為なんだから…おまえに出会ってなかったら平和な学校生活だった。おまえを好きにならなかったら何も悩まずに済んだ。おまえを愛さなかったら…おれは、こんなにおれ自身を愛せなかった…」

「…」

「リン…おまえがおれに愛をくれた。おれの中に愛を植えた。育った花は見たこともないくらいに美しかった。その実を味わうのはおまえとおれじゃなきゃならない…そうだろう？」

眼鏡の向こうに、泣いているリンがぼやけて見えた。

「ミナ…これから…おまえに恋しているから」

お互いの左手を絡めた。涙は流れるが悲しくはない。

一杯になった愛の魂が溢れて涙になっているだけだ。

抱き合ってキスをした。

最後じゃない。

ずっとこれからだって…ね、おれが欲しがればいつだって、
またくれるだろ？リン…

おれの方が、ずっと…おまえに恋しているよ。

13 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

13、

リンと別れた翌日、リンは日本を旅立った。

見送りはしなかった。リンには慧一さんが付いている。

リンはコロンビア大学の九月入学を目指して、SATや小論文の学習力をつけていくと言っていた。

しばらくは日本へは帰って来ない。半年先なのか、一年後なのか……再会の約束などしなかった。

卒業式の十日後、T大の合格発表を独りで見に行く。

掲示板にはおれの番号もリンの番号もあった。連絡をするかしまいか悩んだが、しなかった。

宝物入れのお菓子の空き箱に、リンの受験票を入れた。

母さんは「宿禰君は合格だった?」と、聞く。

「勿論だよ」

「じゃあ、一緒に通えるわね」

「宿禰は、アメリカに留学したんだ」

「え? そうなの? ……」

「うん、ニューヨークの大学を目指すって」

「そう、残念ねえ。青弥も留学したかったんじゃない?」

母さんに言われて、ああ、その手があったのかと、気づいた。

リンと離れたくなかったら、おれがリンを追っかけてニューヨークまで行けば良かったんだ。

…そう思ったが、思うほど簡単なことじゃない。それにおれがついて行くことをリンが望んでいるはずがない。

入学までの期間、運転免許を取る為、教習場に通った。オートバイにも乗りたかったから中免を取った。

理由は簡単だ。

「向こうに行ったら、すぐに車とバイクの運転免許証を取るよ。アメリカに来た時はミナを後ろに乗せてU・Sルートを走ろう」

そう、リンが言ったからだ。

リンに張り合うつもりはないんだが、同じ感覚を味わいたい。

大学生活が始まった。丁大へは自宅から通学することにした。

「行ってきます。バイトで遅くなるから夕飯は要らない」

「いつてらしゃい…あら？また見かけない服着てるのね？昔は服や靴はお母さんにまかせつきりだったのに、高校に行ったら、すっかり自分の好みになっちゃったのね」

「おかしいかな」

「すごく似合ってるわよ。青弥がこんなに服のセンスがいいとはお母さん思わなかったわ」

服のセンスはおれにはない。私服の半分は高校になってから…それもおれと付き合うようになってから買ったものだ。自分で買った分より、リンのお下がりや贈り物も多い。

あいつは「俺のお下がりでなんだけど、要らなくなったから、ミナ、着てよ」とか「買ったけど少し小さかったから、ミナにあげる」と、言っておれに色んな服をくれた。

どれもおれに似合う色やデザインで、わざわざおれの為に買ったものもあったのかもしれない。

リンはおれに比べて随分と裕福だったから、おれが僻まないように色々と気を配っていた。

実質的なリンとの別れは、おれにとって大打撃にはならなかった。と、言うより、リンが最後にくれた「ミナは永遠の恋人だ」と、言う言葉がおれの生きる輝きとなっていた。

会えなくて寂しいけれど、悲しくはなかった。

リンも頑張っているのなら、おれだってリンに恥じないように生きなきゃならない。

リンにずっと思い続けてもらえる為にも。

リンがくれた服を着ると、リンに触っていられるみたいで、少し寂しさも癒される。

大学はつまらないものだった。繰り返される授業も高校で習った事の繰り返しに過ぎなかった。

それは期待はずれというより、わかっていたことだった。リンがいない場所に意味はない。

リンと一緒に合格して通学できると思ったから頑張れたんだ。

ここで何を学ぶにしてもおれの望んだものは見つからない気がしていた。

同じ学部の奴が声を掛けてきて、「合コンをやるんだが、人数が足りないんだ。水川、悪いけど加勢してくれないか？」と、言われ、別にいいかと思ひ承諾した。

十人ほどの集まりで、おれはひとりの女の子と付き合う羽目になった。確かに可愛い子には違いなかった。好みかどうかと言われたら…よく判らない。

一週間後、その子がラブホテルに誘うから、おれも何事も経験だと自分に言い聞かせて、言われるままにベッドに雪崩れ込んだ。

しかし、なんというか…全く燃えるどころじゃない。リンは良くおれに「ミナはゲイじゃないから、女の子とも普通に付き合えると思うよ。一回寝てみたらいいよ」なんて軽口を叩いていたが、全く本意じゃない。

結局最後まで行ったんだが、頭の中でリンとのセックスを妄想させてやっと思った感じで、後味が悪いっただけありやしない。

二日後、丁寧なお断りを入れた。

向こうは口先だけでも残念そうだったから、こちらのプライドもなんとか保てた。

問題は、じゃあ、おれはやっぱりゲイなのか？と、なる。

試すにしても誰とでもじゃ節操がない。大体そういう地域に行かない限り、そんなに簡単にゲイの奴を見極められるはずもない。

合コンに誘ってくれた瀬川という同級生が、お礼にと何回か昼飯をご馳走してくれた。

付き合った女の子との状況を説明し、別れたと言った。

「悪かったな。水川を無理矢理誘つといて、嫌な思いさせてしまった」

「いや、いい経験になったから、謝ることもないよ」

「水川、変なこと聞くようだけど、男は大丈夫？」

「へ？」

「いや、俺、実はバイなんだ。水川みたいなさらってした奴、好みなんだけど……」

「……」

「どう？」

「どうって？」

「試してみない？」

「何を？」

「セックス」

「……」

リンに似ていたわけじゃない。リンみたいな完璧で馬鹿みたいにキレイな人間なんかこの世にいないのは判っていた。

だが、瀬川という男は、清潔な感じがした。敢えて言うならそこがリンに似ていた。だから、寝てみてもいいかなと思った。

結果：リン以外にオーガズムを感じることはなかった。

空しいのか悲しいのか全く呆然とする事実だったが、心に残ったもの傷ではなく、喜びだった。

リンへの「愛」を確信しただけの事。

それを教えてくれた彼女と瀬川に感謝することにした。

大学に行くのもつまらなくなった俺は単車を買ったために、バイトに打ち込んだ。

中古のオートバイを手に入れ、リンから貰った携帯イーゼルを入れた絵画用のリュックを背負い、どこへともスケッチへ出かけた。

土手に座りのんびり川の風景を描いていると気分も落ち着く。ふと空を見上げ、リンを思った。

この空がニューヨークに続いているのなら、リンに伝えて欲しい。

会いたくてたまらなくて仕方ない時は、どうすれば良かったか？リンならいいアイデアを思いつきそうだ…リン、おれは一体何をしたいのか、判らなくなってしまうたよ。物理工学科なんておれのやりたいもんじゃねえもん。親も友人も自分のやりたいことなんてすぐに見つかるわけない。今は何でも吸収することが大事だ…なんていうけれど、リンはもう自分の道を歩いているもんね。凄いや。リンが傍にいたら、おれはちゃんと、見つけられたんだろうか…リン、君に会いたい…

不意に川風に煽られて、ピンで止めておいた画用紙が散らばっていく。

おれは慌ててそれを拾った。

いくつもの風景や草木の絵に混じってリンの素描画が紛れ込んでいた。

こちらに笑いかけているリンを見た時、途中ではおり投げていたリンを描いた油絵を思い出した。

無性にあの続きを描きたくて仕方なくなった。

おれはリュックを背負いバイクに跨った。

あの絵を完成させよう。

急いで走れば、聖ヨハネ学院高校まで一時間もかからない。

14（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

14、

聖ヨハネ学院高校の校門で単車を止めた。

期末試験の最中なのか、正午を過ぎたばかりなのに、下校する生徒で一杯だった。

夏服の半袖シャツに淡い臙脂のトラウザーズ。学年毎に色の違うリボantai。

おれ達が結んでいた赤いリボantaiは今年の一年生に巡っている。三年前はあんな幼い顔をしていたんだろうなあ…懐かしく眺めつつ、彼らの傍を通り抜け、美術室へ向かった。

準備室を訪ねたら、美術部顧問の町田先生がいた。

「先生、こんにちは」

「おや？水川か？ひさしぶりだな。大学生活はどうだ？」

「ふつーです。それより、先生にお願いがあるんですが…」

おれは、美術部の倉庫に保管している油絵を仕上げたいから持ち帰ってもいいかと尋ねた。町田先生は快く承諾してくれた。

「水川の自宅にはアトリエがあるのか？」

「いいえ」

「じゃあ、油絵を描くのは結構大変だぞ。おまえさえ良かったら、ここで描いていけばいいさ」

「え？いいんですか？おれ、ヨハネの生徒じゃないのに」

「最優秀賞に輝いた卒業生に文句を言う奴はおらんよ。何なら校長に許可を貰ってやるよ。画材の余り物も沢山あるし、心残りなく描くといいよ」

「ありがとうございます」

その日からおれは大学へは行かず、毎朝鎌倉を目指してバイクを走らせるのが日課となった。

「水川、進み具合はどうだ？」

「…思いどおりに描けなくて…余り進みません」

「そうか…よく描けてると思うがね。無駄にモデルがいい男過ぎると大変だな」

誰が見てもリンだとわかる肖像画だった。おれも変に誤魔化す気はない。

「目の表情や口元が宿禰のイメージじゃないんです。もっと複雑で…意味がなきゃリンじゃない」

「俺も芸術家の端くれとして、水川ぐらいの気概をもってカンバスにと向き合いたいもんだよ」

「…宿禰…リンに約束したんです。出来上がったらあげるって。でもこれじゃ、いつまでかかるかわからないな…」

「モナリザだな」

「え？」

「ダヴィンチが一生手元から離さなかった肖像画。何度も何度も納得がいくまで描き直して、それでも本当に仕上げられたのか本当のところはわからない。誰の為でもない。自分の為だけに描く絵画は人の評価なんてどうでもいい。ただ自分を支えるものになるんだろうね」

「…そうかもしれません」

「まあ、その絵は一時筆を休めて、他の絵を描いてみたらどうだ？思い通りに描くってことは自分のスキルをあげてこそなんじゃないのか？」

「そう、ですね」

「カンバスから作り上げてみたらどうだ？下塗りの工程だけでも、発色は随分違うものになるぞ。手探りで自分の絵を導いていくことも大切な過程だよ、水川」

「やってみたいです。先生、教えてくださいか？」

「勿論だ。でも本業は大丈夫なのか？」

「…ああ…まあ、なんとかあります」

本業…大学生としての義務は全く果たしていない。と、言うより、前期の試験も近いのにノートすらコピーしていない。これ以上大学へ行き続ける気はないのに、やめる勇気が持てないというか…どうやって親を説得していいのかおれにはわからない。

誰かの助言が欲しいと思い、桐生千尋に連絡を取った。先輩はすぐに時間を取ってくれた。

「水川、元気にしてた？会えて嬉しいよ」

「大近くのカフェテラスで待ち合わせしたのはいいが、何故か桐生さんの恋人の美間坂真広まで一緒だった。」

ふたりは聖ヨハネ学院の二年先輩で、寮生活でも色々お世話になった恩人だ。桐生さんはK大の法学部、美間坂さんはおれと同じT大の医学部だ。

「水川、おまえ、大学にはほとんど来ていないって聞いたけれど、本当か？」

「すみません。本当です」

「苦労して入った大学だろう。幾ら国立が安いとは言え、親から授業料払ってもらっているんだ。一年のうちに単位を取っておけよ。まさか変な遊びでもやっているんじゃないだろうな」

「真広、水川がそんな奴じゃないことは知っているだろう？それになにか相談があるから、俺たちを呼んだんだよ、なあ」

相変わらずの温和な表情で笑みを浮かべられると、こちらまで癒されてしまう。

「はい、今日は桐生さん達に相談があつて…おれ、どうしたらいいのか、わからないんです。おれのやりたいことはこの大学にはない。リンと一緒に入って大学生活を楽しめたのならこんな風には考えなかった。でも…」

「宿禰がいなきゃ、意味がない」

「全く宿禰も無責任というか…水川を捨てて自分ひとり好きな道を選んだんだからな。呪い殺してやりゃいい」

「真広、口が過ぎるよ。宿禰だつてきつと悩んだんだよ。あれだけ水川の事を本気で想っていたんだもの」

「どうだか…今頃ニューヨークで金髪美人と遊んでいるかもしれん」「リンはそんな奴じゃない。おれはリンがどんな思いで自分の道を選んだのか知っているもの。リンはもう自分の未来を見つけているんです。おれも、自分を誤魔化さないで歩いていきたい。両親の期待を裏切ってしまうし、悲しませてしまうけれど、おれはもう、見つけてしまったんだ」

「…」

「おれは絵を描きたい。納得する絵を描く為に沢山勉強したい。だから…今の大学は辞めます」

「やめてどうする？」

「美大を目指します」

「食える画家なんて一握りしかないぞ」

「食える食えないじゃない。自分がやりたいことを押さえられないんです。描くこと以外に、今のおれは生きてる意味を感じられない…」

「いいんじゃないか。俺は応援するよ、水川。二十歳もならないのに自分の道を見つけるなんて羨ましい限りさ。俺なんか就職先はどこでもいいって思っているぐらいなんだぜ？」

「千尋は弁護士になれって言ってるだろ？俺が医療ミスしたら、弁護して無罪にしろ」

「弁護士なんてならないって言っているだろ？この世の中で人と人との争いほど醜悪なものはない。俺みたいな繊細な人間が働く場所じゃないよ」

「自分で繊細と言う人間ほど充てにならないものはない。千尋は繊細と言うより敏感って言っ…てっ！叩くな！」

「変なところ触るからだろ！水川がいるんだぞ」

「あ、そうだった」

「…おれ、お邪魔ですね」

「ごめんね、水川。せつかくの相談だったのに…」

「相談もクソもあるかよ。もうとつくに水川は決めているじゃないか。俺たちは水川の決意を聞かされたただけだ」

「すみません」

その通りだと小さくなつて謝った。

「だが、決意を口にしたが最後、それは目標となり、勇氣にもなる。水川、頑張れよ。迷つたらいつでも来い。宿禰にはなれないが、可愛がつてやるぞ」

「宿禰と比べたら水川が嫌がるよ。…水川、俺も真広も心から君の役に立ちたいって思っている。もし親御さんが反対して家に居られなくなつたら、うちにおいで」

「おい！俺達の愛の巢に他人を入り込ませるつもりか！それとも…千尋、おまえは3Pが望みなのか？」

「…いいね、水川。こいつのことはほつといていいから、何かあったら連絡してくれ」

「は…い」

無視された美間坂さんが怒っているのにも関わらず、桐生さんは適当にあしらっている。そんな二人を見ていると羨ましくてたまらない。

家を出ることになつても桐生さん達にはお世話になるまいと心に固く決めた。

その夜、おれは両親に自分の決意を打ち明けた。

T大を退学すること、美大を目指すこと。学費は出来るだけ奨学金を貰うようにして、親に負担をかけないこと。

父親は今まで見たことないくらいに激怒した。胸倉を掴み、怒鳴りつけられた。殴られはしなかったが…。元々暴力には縁がない家庭だ。さすがに躊躇したのだろう。

どうしても曲げないおれに、父親は最後は涙を見せた。さすがに心が痛みはしたが、それよりもT大に固執する意味がおれには全く

わからない。

「父さんはおれにどんな未来を見ているの？」大に行ったからって、将来の保障があるっていうの？ねえ、おれはおれの人生を生きてみたいって思っていていけないの？おれは生きがいを見つけたんだ。裕福な生活はできないだろう。幸せな家庭も持てないかもしれない。それでも…おれはきつと納得した人生を生きていけると思う。父さん達の夢を壊して悪いと思っている。ここまで育ててくれた恩を思えば、仇で返したと憎むかもしれない。それでも…息子が自分の道を見つけたと思つて、諦めてくれませんか？…たぶん、これ以上の我儘を言う事はないと思うから」

おれの言葉に父親は「勝手にしろっ！」と、放ち、席を立った。玄関のドアの音が激しく鳴った。

二階の自室にこもり、不貞寝をしているところに母親が入ってくる。

「青弥も言うようになったわね」

「…ちよつと言い過ぎた。反省しているよ。…父さんは？」

「自棄酒なんじゃないの？期待してた息子が自分の思い通りにならなくて」

「期待に沿えなくて、本当に悪いと思つているよ」

「お母さんは気にしてないわよ。お父さんだって、ちゃんとわかっているのよ。意地っ張りなだけ。親子揃つて似ているわね」

「…」

「それより、これ」

「なに？」

机の上にいくつかの通帳が出された。

「あなた名義の貯金通帳よ。二百万はあるわ。青弥が生まれてからずっと毎月積み立てて、後は入学や卒業のお祝いやお年玉なんかを貯金してた分。これは青弥のお金だから好きに使いなさい」

「え？」

「お母さんは良く知らないけど、美術大学ってお金がかかるんですよ？絵の具やらなんやら…これじゃ足りないかもしれないけど…あとはバイトして。それでも足りなかったらお母さんのヘソクリも足してあげるからね」

「母さん…」

「青弥の選んだ道だもん。親として応援してあげたいじゃない」

「…なんて言っていていいか…我儘言っでごめんなさい、お母さん。おれ、頑張るよ。絶対に悔いのない生き方をする。だから心配しないでね」

「いつまでたっても心配するのが親の義務みたいなもんよ。あなたが幸せならお父さんもお母さんも幸せよ。頑張りなさい、青弥」

「…ありがとう」

溢れる涙を精一杯堪えて、その通帳を受け取った。

何もわかってくれない、おれの本当の気持ちなんかわかるはずもないと決め付け、頑なに見ようとしなかったのはおれの方だった。

お父さん、お母さん、今まで育ててくれてありがとう。

その恩に報いる為にも、おれは自分の道を歩いて行きます。

15 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

15、

翌日、大学に退学届を提出。その後、鎌倉までバイクを走らせ、町田先生に美大を受けたい旨を伝えた。

町田先生は大学を辞めたことをこそ驚いたが、美大受験に全面的に協力してくれると言ってくれた。

「よろしく願います」

「うん、とにかく学力テストの方は問題ないだろうから、後は実技だ。受ける大学にもよるが学科は決めているのかい？」

「一応、M大の油彩学科を目指したいです」

「俺の後輩になる気か？」

「そうなんですか？」

「だったら教えがいがあるな。実技はデッサンと油絵だ。デッサンはとにかく手当たり次第描き続ける事。油絵は六時間という限られた中で自分の絵を仕上げなきゃならない。早く自分なりの絵を探し出すことだ」

「はい、頑張ります」

高校は夏休みに入ってた。

しかし進学校であるヨハネでは夏休みといえど、生徒達は毎日の補習で日頃と変わりなく騒がしい。

「水川！」

去年の担任だった藤内先生が、廊下の窓から手を振っておれを呼ぶ。

「今から温室の水撒きに行くが、おまえも来ないか？」

毎日のように学院へは来ているが、学校の裏手にある温室には近づかなかった。

あんなところに入ったら、おれは…

「すみません。おれ、用事があるんで、またこの次に」
そう言って、その場から立ち去った。

その日はリンと初めて温室で出会った日だったんだ。それを覚えて
いる自分が何故か悔しかった。

リンは…そんなことなんか、覚えちゃいない、きつと…

校門を出る時に毎回振りかっけて見るチャペルの尖塔に聳えるウリエルの像が、今日は憎かった。

秋が過ぎ、冬になった。

おれはデッサンと油彩のスキル向上に明け暮れる毎日だった。

独りで過ごすクリスマスも気にしなかった。桐生さんや美間坂さんや何人かの友人達はクリスマスパーティーに誘ってくれたりするけれど、到底そんな気にはなれない。

今、やるべきことをやっておかないと、後悔しそうな気がしてた。

翌春、おれは第一希望のM美術大学に合格した。

一番お世話になった町田先生へすぐに報告へ行った。

先生は自分のことのように喜んでくれた。

「先生、お願いがあるんですが…」

「なんだ？」

「おれ、家を出ようと思っています。家から通えない距離じゃないけど、これ以上実家に甘えるのも気が引けるし、通学時間ももったいないから。授業料はともかく、バイトしてでも自分で生活だけしたいんです。どこか、M大の近くに安いアパートはご存じないでしょうか？」

「あ…うん。ちょっと待ってる。俺が前に世話になってた人に当たってみるから」

そう言って、町田先生は携帯電話を手にする。暫く話し込んでいた先生がおれを呼んだ。

「水川、安くていい下宿があるんだが…」

「本当ですか？」

「うん、俺も昔随分お世話になったんだ。もう15年前だったから、物も人も変わってしまっているだろうけれど」

「どんなところでも構いません」

「条件があるそうだ」

「なんですか？」

「そこは画材屋と画廊を営んでね。二年前に世代が変わって息子さんが経営を継いだそうだ。丁度人手が足りないから、安く下宿させる代わりに店の手伝いをしてくれる学生が欲しいという条件つきだ」

「それなら構いません。画材屋で働けるなら好都合だ。画才も少しは安く買えるかもしれないし」

「向こうは土日も店を開くから、そのつもりで仕事をしてもらえる人じゃなきゃ駄目だって言ってるよ」

「それで結構です。是非お願いします、先生」

「わかった。先方に伝えておこう」

「ありがとうございます」

「確か名刺があつた…これだ。水川に渡しておくから、暇なときに挨拶に伺えばいいよ」

「はい」

受け取った名刺には「美桜堂」という店の名前、裏には「ギャラリ―時世」と、あつた。

三月に入っておれば、その「美桜堂」へ向かった。

M大から歩いて十分もかからない。

小さな商店街を抜けて、路地を曲がった奥にその家屋が見えた。

瓦屋根の古い商家風の建物と、その横に外壁を漆喰で固めた土蔵が並んでいる。

土蔵には「ギャラリー時世」と、商家の二階に掲げられた趣のある看板には「美桜堂」と描いてある。

おれは格子戸をガラガラと開け、店の中に入った。吹き抜けになった天上。黒く塗られた梁は大きく美しい。ＴＶでよく見る記念物の民家みたいだ。

土間は広く、画材の並べ方ひとつとっても、単に棚に並べるのではなく、壁に沿わせて遠くからでもひと目で探せるように工夫されている。

知らない人が入ったら、オシャレな喫茶店か何かにも勘違いされそうな、モダンな雰囲気だ。

だけど、ＢＧＭなどは一切なく、通りからも離れている所為か、酷く静かだった。

しばらく佇んでいたが、誰も出てこない。

時折、ドンドンと何かを叩く音がする。

思い切って大声で叫んだ。

「すいませ〜ん。あの…こちらにお世話になる水川と言うものです
が、誰かいらっしゃいませんか？」

足音が聞こえ、作業用のエプロンをした男性が、奥の土間から出てきた。

年は三十ぐらいだろうか…手には金槌を持っている。

「水川？…ああ、町田さんが言ってた新入りか。良かった、ちょうど手が欲しかったところなんだ。手伝ってくれ…何だ？鳩が豆鉄砲食らったみたいにポカンとして？俺の顔に何か付いてるか？…そういやさつきデッサンしてて、炭舐めたから、汚れてたか…おい、なんか言えよ」

何か言えつて…なんにも言えない。

だって…その人の声は、あまりにリンに似ていて、似すぎて…心臓が止まるぐらいに驚いて、息が詰まって声が出なかったんだ

もの。

「あ、あの…水川…青弥あきひろって言います」

「そう。俺は櫻井季史さくらい せいしだ。この春からM美大の学生なんだね」

「はい」

「良かったら、持っている絵でいいから見せてくれ」

おれは持ち合わせのスケッチブックを差し出した。

櫻井という人はそれを一枚一枚丁寧に捲り、頷きながら眺めている。

「君は何科？」

「油彩学科です」

「そう、じゃあ、今度は油絵も見せてくれよ」

「はい」

「ああ、ここに住むんだからいつでも見れるわけだね」

「そう、なりますか？」

「こちらの条件はわかってる？」

「はい、大学の講義がない時間はできるだけお店の手伝いをする。と、聞きました」

「うん。俺は時々お宝を探しに出かけたりするから、その時も店番を頼みたい。額縁のモールディングもやってるから、個展やらで飯も食えなくなるほど酷く忙しい時期もあるんだ。そういう時も、手伝って欲しい。全くのシロウトより、絵の事を知っている奴の方が助かるしね」

「はい、出来るだけお手伝いさせていただきます」

「じゃあ、こっちに来て」

うなぎの寝床のような狭い土間から板張りの部屋が奥まで繋がっている。

違う時代に来たみたいにドキドキする。

「こちらが台所とリビング。二階が俺の寝室。この土間を抜けたら、庭に出る」

暗い土間から一気に光の降り注ぐ芝生の庭に出た。

周りを囲んで色んな草木が無造作だけど植えてあるし、何より春の若芽が眩しい。

「あれがアトリ工兼、下宿部屋になる」

櫻井さんが指を示した先に先程とは違ってコンクリートの近代建築の家がある。こじんまりとしているが、下宿にするには立派過ぎる。

櫻井さんはそのドアを開けた。

「ここは絵を保管する倉庫に作ったんだ。画廊もしているだろう？どうしても沢山の絵を保管する場所がいるからね。今の画家はやたら号数のデカイ絵ばかり描きやがるから場所を取っていけねえや。空いてる場所はアトリエに使っていいが、たまに色んな絵描きがここで描き足りたりするから落ち着かないかも。二階が君の部屋と言っても、水屋も大して整ってないから、食事は母屋の台所を使ってくれていいよ。トイレは一階にある。風呂は母屋。バイト代下宿代を相殺してのただ働きになるけど…いいかな？」

「え？ただでいいんですか？」

「勿論水道、電気代込み。食事の材料もうちのあるもん使ってもらって結構だよ。なんかお金に苦労してるって聞いたからさ…働き次第ではバイト代を出すよ」

「あ、あの…本当にただでいいんですか？」

「いいよ」

「が、がんばります。ただで住めるなんて…アトリエも付いてるなんて…夢みたいだ」

「ついでに画材も安く提供しようか？」

「…あ、なんか変なこと企んでいませんよね？」

「へ？…よく判ったね」

「…」

「俺は将来見込みのある奴に唾をつけておくのがめっばう上手くてね。これが大体ものになる。早くから才能を見込んでおいて、作品

を安く手に入れるのさ。そして高値で売りさばく…どう？これ。最新の先物取引」

「リスクが半端ないや」

「芸術家としての才能は俺にはないが、投資家としては外れがないんだ。あんたも俺のお眼鏡にかなった逸材だ。頑張れよ」

「…」

なんだかね、リンと同じような声音で言われるとその気になってしまっから、癪にさわるし、嬉しくもなる。

マジで櫻井さんのことをリンって呼ばないように気をつけなくちゃ。

16 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

16、

念願であつた美大でのキャンパスライフが始まつた。

大学の授業も講義はあるが、大体は各自の制作に時間を費やすことになる。

芸術家を目指す人たちはとにかく個性の塊みたいな連中ばかりで、おれみたいな平凡な奴は終始圧倒される。

「おまえ本当に…この学生？」と疑心する奴もいる。

それでもみんな自分の事以外はあまり関心を持たないし、なにしろ全員が芸術家を目指しているから、変な統一感があり、おれも居心地がいい。

「美桜堂」の手伝いも大変だけど、すぐに覚えた。

額縁を絵に合わせて縁から作っていく過程も楽しかった。

一見ぶっきらぼうな季史^{きし}さんは、大らかで非常にフラットな人だ。

リンに良く似ている声も、慣れてしまえばあまり気にならなくなった。似てはいても言い回しもアクセントも違うし、なにより、リンみたいなこつちが恥ずかしくなる事は言わない。…当たり前だ。

仕事の教え方も簡潔で、わかりやすい。ミスしても怒鳴らないで、そこに至る失敗の原因を探って教えてくれる。

最初は三十過ぎだと思ったら、まだ二十六だそうで、それには少し驚いた。

「そんなに老けて見えるか？」と、落ち込む季史さんに

「こんなに立派なお店のご主人だから…そんなに若いなんて思わなかった」

季史さんのご両親は二年前までここで季史さんと一緒に商売をしていたが、ここを季史さんに任せて、ふたりは九州に新しく画廊を

設けたそうだ。

「阿蘇の南の方に小さなペンションを建てて、楽しくやつてるそう
だ。星が綺麗よ〜ってメールが来る。こんな大変な店を息子一人に
任せていい気なもんだぜ」

「季史さんひとりでもやれるって思ったから、出られたんでしょ？
見込まれてるんじゃない」

「老後の生活を楽しみたいだけだって。老後って言ってもまだ50
代だけだな」

毎日が充実した生活を送っていた。

とりわけ季史さんのサポートはありがたかった。

おれは絵を描きだすと夢中になってアトリエに籠ってしまふ。
食事を忘れるのは当たり前で、決められたバイトの時間さえもよ
く遅刻してしまう。

あわてて店に向かうと、季史さんはおれを責めたりしないで、「
よお、現実に帰ってきたか？」と、笑う。

料理も苦手なおれは、結局、手際のいい季史さんの手料理のまか
ないで毎日、美味しい食事にありつけている。

「すいません。いつも季史さんにはばかり用意してもらって…」

「せっかくの独り暮らしだからね、美味しいもんを食いたいだろ。覚
えるしかねえよ。それに…青弥は本当に料理が下手だしなあ」

「…ごめんなさい」

一度、朝食に目玉焼きを作ろうとして、焦がしてしまったことが
あってから、季史さんはおれに料理を任せなくなった。リンと一緒
の時も確かに、あまり火を使わせてもらえなかったから、おれに料
理は向いていないのかもしれない。

年の瀬も近づいていた。

牡蠣鍋をつつきながら、季史さんと酒を酌み交わす。

意外と言つか、おれは酒には強いらしく、あまり酔いが回らない。

「顔に似合わないというか…このとんだうわばみめ」

「そういう季史さんこそ、本当に酒豪なんですね。ウイスキーのボトルがもう半分になってる」

「酒なんてたまに飲むから旨いんだよ。毎日だったら飽きらあ。それより、青弥は正月はどうする？実家へ帰るのか？」

「はい、お正月ぐらいは家族と過ごさなきゃね。親不孝も過ぎると恨まれるもの」

「そうだな。親が元気なうちに甘えておけよ。そのうち、俺みたいに捨てられるからな」

そう言っても時間が経てばどちらにも酔いが回って、ふたりとも無駄に饒舌になってくる。

「季史さんは…誰かいい人はいないの？」

「俺か？うーんと、二年前ぐらいに別れた。ここに住んでいた絵描きだったんだが、好きな絵を描きたいってフランスに行っちゃった

…」

「そう、ですか」

「それで、向こうで有名な芸術展で入選してな。立派な芸術家の仲間入りだ」

なんだか、おれの境遇に似ていて共感しちゃうな。

「そういう青弥はどうなんだ？おまえ、彼女は…いるようには見えないなあ。デートもする暇もないし、携帯で話し込んでもいねえしな」

「アメリカに留学…してるんです…」

「へえ、じゃあ、遠距離恋愛か…大変だな」

「恋愛…なのかな」

「え？」

「高校を卒業して、二年近くなるのに、一度も連絡してこない」

「そりゃ…気の毒だな」

季史さんは拙い事を聞いたと思ってか、それ以上の詮索はせず、違う話に切り替えてくれた。

風呂も済んで、アトリエに帰る時、季史さんが声を掛けた。

「青弥はクリスマスは空いてるか？」

「はい、大丈夫です」

「じゃあ、なんか美味しいもんでも食いにいこうか」

「…いや、いいです。気を使わないで下さい」

アトリエに帰り、自室の二階のベッドに寝転がった。

枕元の壁には、リンから貰ったドリームキャッチャーのお守りを飾っている。

願い事が叶うというそれに、おれはリンに会いたいとだけ祈り続けてきた。

だけど、夢にさえリンは出て気やしない。

リン、知っているか？ひとりに耐え切れない夜は、おまえからもらったジャケットを抱いて眠るおれを…

おまえが残してくれた言葉は、おれに希望を与えてくれた。けれど同じ分だけ寂しくてたまらないよ。

おれはおまえに繋ぐ意味を疑ってしまう。

リン、おまえがもう一度おれを愛していると言ってくれたら…

クリスマスは雪が降るほど寒くもなく、一日中、どんよりとした雲が空を覆っていた。

おれは光の取れるアトリエの場所を選んで、リンの肖像画の続きを描いていた。

手直した回数は数え切れないほどだ。だが、まだ満足できる出来ではない。

カンバスのリンはおれを見ている…

リンと過ごしたクリスマスを思いだした。

あんな素晴らしい夢のようなクリスマスはなかった。

リンもおれも本当に幸せだったんだ。

なのに…

リンからの連絡は一切無かった。

今更だ。去年だって、なかったんだ。

…卒業して、一度だってメールも電話も手紙も来ないじゃないか。そんなの待ってたって来やしないことぐらいおれだってわかってい
る。

リンは…リンには慧一さんがいて、いくらおれを好きだって言っ
たって、おれの元には帰って来ない。

「一生ミナに恋し続けているから」「ミナは俺の永遠の恋人だよ」
その言葉が嘘だったとは思わない。だけど、時が経てば感情だっ
て変わるって言ったのはおまえだろ？

もう二年だ。

二年間ほっておかれたまんまで…おれが何も求めないでいられる
って思っているのか？

これからもずっとひとりでおまえを想って生きなきゃならないの
か？

…カンバスのリンは本当にこんな顔だったのか？

リンはどんな顔をしていた？

…おれにはリンの本当の顔がわからない。

おれを愛してるって言ったリン。

おれを抱いてくれたリン。

おれに生きる希望を与えてくれたリン。

ずっと一緒に歩いていくって約束したじゃないか…

「?つき、?つき、うそつき…」

急に目の前がぶれてくる。

胸にたまった涙が堰を切ってあふれ出してしまっ…

「おまえなんか…おまえなんか大嫌いだっ！思い出にしないって？おれを捨てて、勝手にアメリカに行つて、自分だけ慧一さんに甘えて…」

おまえに捨てられたおれはどうなる？

…ずっとこうやって、いやしないおまえを思い続けて、おまえの絵を描いて…やりきれないまま生きていかなきゃならないのか？

…リン、おまえが憎いよ。

なぜ、おれを捨てた。なんでおれを選んでくれなかった。

あんなに…あんなに愛していたのに…

リン…ずっと一緒に歩いていけるって、信じてた…本当に…本当に

…」

カンバスに絵筆で大きくバツと描いた。

もうこんな絵なんか知るもんか…来ないリンを待つてどうする。想い続けてどうする。

> i 1 3 8 9 6 — 2 7 3 <

雨の降る庭へ出た。

首にかけていた鎖を取った。

お互いにプレゼント交換をしたお揃いの指輪だ。愛していると誓った大切な指輪だ。

絵を描くと油がついて汚れるから、鎖を通して首にかけていた。

一度だって外した事はなかった。

おれはそれを枯れた芝生に投げつけた。

「リン、おれは、おまえを忘れる。もう…二度とおまえなんか描か

ないし、おまえのことなんか…知らないっ！」

立ったまま泣きじゃくるおれに、後ろから黒い影が覆った。

季史さんの差す傘だった。

「風邪ひいちまうぞ、青弥」

「季史さん…」

「今頃風邪引いたら、本当に寝正月になっちまう。風呂沸かしてやるから、あったまって…それから鍋でもしようか。せっかくのクリスマスだからな」

「…うん」

おれは季史さんの胸にすがりついた。

だって、おれには季史さんの他には、もう誰もいない。

「リンが好きだった。でも、もう忘れてやるんだ。全部…なかったことにするんだ…」

「青弥…無かった事にする必要はねえよ。本当に好きだったんだろ？いい思い出にすればいいんだよ。自分の中の一番綺麗なところに飾ってやればいいんだ…青春って、そういうものなんだって言うてた」

「…誰が？」

「うちの親父」

そう言っただけでニコリと笑う季史さんの優しさが、おれには怖くて…離れようとした。

だけど、季史さんはしつかりおれを抱いて離さない。

「青弥のことを好きになってもいいかい？おまえを守りたいんだ。俺は…青弥から離れたりしないから…」

その腕を離すことなんか、今のおれには出来ない。

「リンを失った傷を癒す代わりにでもいいですか？季史さん」

そう言っただけで、おれに、季史さんは黙って頷いてくれた。

さようなら、リン。さようなら…
もう、おまえもおれも自由になっていいんだ。
本当に幸せだった。
リン…おれはおまえを愛していたよ。

> i 1 3 8 6 9 — 2 7 3 <

フラクタル 終

最終章「愛する人へ…」 1（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h/

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h/

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

最終章「愛する人へ…」 1

「愛する人へ…」

1 .

M美術大の4年を過ごし、そのまま大学院へ進んだ。

大学では油彩を専攻し、院では版画に取り組んでいる。

相変わらず「美桜堂」に居座り、仕事と絵描きで忙しい毎日だ。

季史さんの画廊「ギャラリー時世」で、完成した油彩や版画を展示してもらい、展示即売もする。

結構な値段がつき、大学の授業料も親に負担をかけなくなってほっとしている。

親父はさすがにおれへの将来への夢にも諦めがついたらしく、「たまにはうちに帰って酒の相伴でもしろ」と、言っているのだと母さんが嬉しそうに話していた。

いくつかの絵画コンクールにも入選した。まだ一流とは言えまいが、画家としての基盤を築くため、一步一步直実に進んでいる気がする。

店の仕事以外は、アトリエに籠って制作していることが多い。そうでなければ、スケッチの為にツーリングへ出かける。

風光明媚な景勝地や鄙びたなんでもない田舎の風景。どれもが魅力的だ。

油彩は風景画。版画は植物を描く場合が多く、特にリトグラフは細かな描写もできるから、面白い。

展覧会や芸術展に追われる時は、二階の自分の部屋で寝ることはあるが、大方、母屋の季史さんの寝室と一緒に寝ることにしている。季史さんは充分におれを包んでくれる大人だ。気がきかないおれを色々とサポートしてくれる。

絵についても、迷った時は的確なアドバイスをくれるし、何よりおれを大切にしてくれる。

おれはリンとは違い意味で、季史さんに身を委ねる喜びを感じていた。

「青弥、卒業制作は順調かい？」

「うん…」

いつもの夕飯時、急ぎの仕事がなければ、そのまま何時間も晩酌をすることもある。

「年の瀬には『七星会』の展覧会を上野でやるんだろう？」

「七星会」とはM美術大学院の仲間、七人で作ったグループで、これまでも3回程、展示会を催している。

絵画専攻だけではなく、デザイン専攻の院生を交えての展示会は、各自テーマも異なり、それぞれの個性を高めた芸術が作り上げられているから、専門のコレクターや学芸員などの評価も悪くない。

「そうなんだ。就職先が決まった奴もいるし、院に残る奴もいるけど、みんなでやれるのはこれが最後かもしれないって…気合が入っている。おれは連作をやろうと思っているけど…まだ題材が決まっていんだ」

「半年先とは言え、油彩だったらそろそろ制作にかからないといけないな」

「うん、版画の方が評判いいからなあ…迷っている」

先日、ある公募展で自信があつた油彩の風景画が佳作にしか届かなかったことが、気になる。

「審査員はなんて言っただ？」

「綺麗にまとまっではいるが、パッションが足りないって…」

「白山の景色を描いた油彩だろ？パッションが必要なのか？」

「…おれもそう思ったけれど…若いのに無難にこなすって言うことかな」

「あんまり気にするな。青弥は素直な良い絵を描いていると思うよ。個性も大事だけだな。まあ、本当に青弥の描きたいものを探したせたら自ずと個性のある絵は描けるもんだ。今は探索中かな」
「そうだと…いいけど」

自分の絵に何かが足りない気がしていた。それを情熱だと言われればそうかもしれない。

おれは一生絵を描き続けたいと思っている。絵を描いてそれを売って生計を立てる。

その為の多少の兼ね合いは必要だと思っけれど…結局はおれの芸術性の力量の有無だと思う。

趣味で終わるか、一生を賭けれるか…

「サラリーマンだったら、年金も退職金ももらえるのになあ」

「なんだ？もう、弱音を吐くのか？」

「ちよつとね…」

「安心しろ。おまえに好きに絵を描かせて食わせるぐらい、俺が見てやつから」

「そこまで季史さんに甘えていいのかなあ…おれ、美味しい食事も作れないし…子供もできないよ」

「ばーか、知ってるよ。俺は青弥がいいんだよ。青弥の才能も青弥自身にも惚れてるんだ…恥ずかしいこと言わせんな！」

普段は顔色を変えない季史さんが、ガラにもないことを言ったと、顔を赤くする。

おれは空になったおちよこに日本酒を注いだ。

「もう一本つけるね」

キッチンに立ったおれは一升瓶からお酒を注ぐ。

「それより、青弥。おまえ、今週末は高校の同窓会だろう？」

「うん」

「行くんだろ？」

「一応…出席にしておいたけど…」

「けど？」

「迷ってる」

「なんで…」

「…」

聖ヨハネ学院高等学校の創立百周年記念に兼ねての同窓会がある。懐かしい人に会えるだろうし、今のおれの姿も見せておきたいと思う。

だけど…リンとどんな顔をして会ったらいいのか…わからない。

三上からの電話で、リンが出席することは知っていた。

リンは建築家として、ニューヨークでお兄さんの慧一さんと建築事務所を構えているらしい。

おれに宣言したとおり、リンは一人前の建築家になった。

おれもリンに認められるよう、頑張らなきゃいけない。

…なんだかおかしい…リンにを引き合いにだして、どうなるわけでもないのに…

リンなんて、もうおれとは関係ない。

「みんなに久しぶりに会うのも、きっと楽しいだろうから、行ってくるよ」

季史さんはにこりと笑い、頷いてくれた。

週末、鎌倉の聖ヨハネ学院へ赴いた。

体育館での記念式は終わり、教室で各回生の同窓会が行われていた。

「おゝ、水川。久しぶり」

「三上、連絡ありがとう」

「元気だったか？」

「ああ、三上は…先生だったよな？」

「うん、地元中学の社会の教師だよ。水川も絵の方頑張っているんだろ？売れてるのか？」

「うん、今は院生。来年は卒業だから、そこから勝負だろうな。まだまだ先は長いよ」

「水川ならやれるさ。なにしろ最優秀のお墨付きだもの」

「やめてくれ。昔のことだ。今は学問の方は全くからっぽだよ」

「しかし、本当に水川が画家になるとは…信じられなかった」
眼鏡のブリッジを上げながら、高橋がこちらに近づいてきた。

「高橋は…建築士になったのか？」

「ああ、今はT建設の設計課に所属している。10年経ったら自分の家を継ぐつもりだ」

「相変わらずえらそうに言うもんだな。宿禰すくねなんかもう自分の会社作っているぞ」

「宿禰と比べるな！あれは俺達とは違う人種なんだよ。じゃなきゃ、なんでニユーヨークで個人の建設事務所やれるっていうんだよっ！まだ25なんだぜ？」

「宿禰はお兄さんと一緒に仕事しているから、ひとりで構えているわけじゃないよ」

「と、言っても高橋と宿禰を比べること自体が間違いだと言える。あれは人間外生物だ」

「真広、口が過ぎるよ」

後ろを振り向くと桐生さんと美間坂さんが立っていた。

「桐生さん！美間坂さん…お久しぶりです」

「水川の顔を見にこちらに寄ってみたんだ。…元氣そうで安心した」

「千尋はこの間おまえのリトグラフを買ったんだぞ。感謝しろ」

「ありがとうございます」

「違うよ。俺の誕生日に真広が俺にプレゼントしてくれたんだよ。

わざわざ水川の絵を探してさあ」

「そうなんですか？美間坂先輩ありがとうございます」

「ふん。それより今日は宿禰はどうした。まさか来てないってこと

はないだろうな」

「それが…あいつ、急に来れなくなってしまつて…」

「え?…」

三上の言葉に驚いたのと安心したのが混じつて変な声になった。

「宿禰はアメリカの建築家の賞を受賞してね。授賞式で来れなくなつたんだよ」

「藤宮先生」

リンのお兄さんの友人でもある藤宮先生が、また輪に加わつた。

「向こうでは非常に権威のある賞で、ちよつとしたニュースになっているそうだよ」

「そりや凄い!」

「そうだったのか…宿禰の奴、急な用事で来れなくなつたから、みんなよろしく言つておいてくれてただけ言つてたから、何があつたのかつて心配したんだけど…そんな凄い賞もらつたんなら、ひと言言つてくれればいいのに…」

「より以上にあの美貌が思ひ上がった態度でいると思うと、憤りも甚だしいな」

「おい、真広、おまえは本当に…好きな奴には素直じゃないんだなあ」

リンの話題で持ちきりになる空間に居ずらくなつてしまった。

おれはそつと教室から抜け出し、校舎から離れた。

リンとおれの事について聞かれるのが怖かつた。

それだけじゃなく、一人前の建築家として認められ、権威のある賞を貰つていふという事実が、ショックだつた。

素直に喜んでやるのが友達だろう。仮にも恋人だつた奴じゃないか。

心から祝福してあげたいのに…笑うこともできなかった。

自分自身が情けなくて恥ずかしくて、とてもあの場にはいられなかつた。

リンと比べる方がおかしいってわかっている。

高橋や美間坂さんが言うように、リンはおれ達とは違う賜物なのかもしれない。だけど、おれはリンと対等でいたかった。あいつと肩を並べて笑いあっていたかったんだ…

そこまで考えて益々自分の愚かさを知った。
今更なんだ。

もうリンとの繋がりがなんか全くない間柄なんだ。自分なりの決別も出来たはずだ。

恋人同士だったのは、この学院で過ごした3年間でしかなかった。もういい思い出になったんだと、あいつらにそう言えばいいんだ。そして、一緒にリンの健闘を称えれば良かったんだ。

…そんなこと…できやしない。
リンを思うだけでこんなにも心が痛い。

教会の尖塔に立つウリエルを見上げた。その姿がリンに似ていると思った。

あの日、おれはリンに言ったよね。「ここにすればリンに会えるね」って…

…会えないよ、リン。
だって、おれにとって、おまえはあまりにも遠い…

2 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

2、

ウリエルから逃げるように、チャペルの中に駆け込んだ。

教会の中にも先生やお年を召された卒業生の方たちが、幾つかの塊になって、談笑している。

おれは通路を真っ直ぐに歩き、祭壇へ向かった。

まだ学院の生徒だった頃、隔週月曜日の朝、礼拝のミサがあった。一般の朝礼と変わらないものだったけれど、最後に必ず賛美歌を歌わされていた。

男子校のしかもほとんどが宗教を持たない生徒ばかりだ。真面目に歌う奴はコーラス部と生徒会ぐらいだった。

だけど、リンは周囲の目なんか気にせず、高らかに歌っていた。サンクチュアリによく通る綺麗なテノール。響くシンプルな祈りの歌詞。

おれは歌うリンの姿に何度も見惚れ、歌うことすら忘れていた。

リンは美しかった。

あれがおれの恋人とは、当人でさえ信じられないほどに、尊いものに見えた。

それは、リンが望んでいた思いじゃないのはわかっていた。

だからおれはリンと、対等になりたかったんだ。

十字架も何も無いシンプルな祭壇は、宗教色の少ないこの学院特有のものだ。そして光を受けて輝くステンドグラスもまた、虹色の鳩が飛翔している姿だけが描かれている。

「あの七羽のハトの意味を知っていますか？」

後ろから声を掛けられ、驚いて振り向いた。

「鳴海……総長」

前学長の鳴海先生が立っていた。

リンが剣舞を演じた際、熱心に指導されたと聞かされていた。遠目には何回も見たことはあったけれど、直々に話すのは初めてかもしれない。

「去年、この学院のすべての職務からも卒業しましてね、今は隠居の身ですよ。ただのじじいです」

「そんな…」

年は取っていてもこんなに品格のある紳士なんか、早々見当たらない。

それになんて優しい眼差しなんだろう。聖職者ってみんなこうなら、もっと信仰深くなるんじゃないのかな。

「水川…くんでしたよね」

「あ、はい…光荣です。名前を覚えてもらえたなんて」

「卒業生全員を覚えることはさすがに出来ませんが、優秀な生徒は自然に記憶しているものですから」

「ありがとうございます」

「君は画家になったと聞き及んでいます」

「どうしてそれを？」

「宿禰君から聞きました。私は海外によく出かけるので、ニューヨークへ行くと宿禰君に連絡をするんですよ。彼は自ら運転して、色々な穴場へ連れて行ってくれる。この学院では君と特に仲が良かったそうですね」

「…はい」

「水川君が画家の道を歩んでいる事を、宿禰君は嬉しそうに話していました」

「…」

複雑な気がした。おれの知らないところで、リンはおれのことをそんな風に話しているのか…笑いながら話せるものなのか…おれには無理だ。嘘でもリンとの思い出を嬉しそうに話すほど、心の整理は付いてない。

…付いてないって？

もう、ずっと前に付けたはずじゃないのか？

おれははつきりとリンと決別したって…

そう、思い込んでいるだけなのか？

「あのハトの意味ですが、七つの美德の意味があります」

「…」

昔、リンがそんなことを言っていたような気がする。

「純潔、希望、知識、正義…」

リンは作り話がうまいから、また適当に話しているのだと思ってた。

「勇気、忍耐、そして…純愛です」

おれはリンの作り話がとても好きで、好きで、何回もねだって…おれは…

「純愛はこの世の理想ですね。欲も得もなくただひたすら愛するという想いは、家族愛でもなかなか難しいものです。他人同士の純愛なら…奇跡かもしれない」

「奇跡？」

「キリスト教では神の力とも言いますが、恋愛する当事者には神は邪魔者でしかないと思いませんか？…これは内密に」

「…はい」

「それよりこれを見てもえませんか？」

鳴海先生は、祭壇の左端の壁に置かれてある台におれを案内した。

白い建築模型だ。

教会の形をしている。その横には体育館だろうか。モダンな建物の模型がある。

「この教会堂も随分古くなりましたから、そろそろ建て替えの頃だろうと。ついでに生徒が増えたので体育館も新しく建て替えることにして、宿禰くんのアトリエに頼んだんです」

「リンの？」

思わずリンと呼んでしまった自分の口を押さえた。先生は穏やかに笑みをくれただけだ。

「そうです。凜くんは…彼がそう呼ぶのが好きなので。カテドラルの建築デザインを熱心に勉強していましたね。建築家を目指したのはお母さんとお姉さんの聖堂を作るのが目的のひとつだったそうです。アメリカで彼の設計デザインした教会をいくつか見せてもらいました。彼のひとときわ華やかな外見とは全く違う、とてもシンプルで暖かい人々の拠り所であるカテドラルだった。建築家となったこの学院の卒業生もいますが、私は凜くんの教会を見たかったし、体育館との融合を有望なランドスケープデザイナーである慧一君にまかせたかった」

「そうだったんですか…リンは、頑張っているんですね。おれなんか…比べ物にならないほどに…」

「水川君にも頼みたいんですが…」

「え？」

「新しい教会堂に掲げる絵を描いてもらいたいのです。宗教に関するものではなく、あなた自身が描きたいものを、期待しますが…どうでしょう」

「え？…僕が…そんな、無理です。僕はまだそんな…画家と言っても学生に過ぎません。教会に飾られる絵なんて今の僕では…描けません」

「有名な芸術家の絵を望んではいません。この学院を愛してくれた者にしか描けない絵を、新しい教会堂に飾りたいのです。水川君の絵画だけではありませんよ。この学院を卒業した多くの、芸術家や技能者、研究者…彼らの青春を刻み込んだ思い出の展示も考えているんですよ」

「…」

「水川君の時を刻んで見ませんか？ここで学んで経験した時が、未来の礎いしすえになれば、それが私の喜びとなります」

鳴海先生の好意は有り難かった。けれど自分に自信が持てなかつ

た。

リンの建てた教会におれの絵を飾るなんて……
曖昧に返事をばかしたまま、その場を後にした。

家に帰りついたのは十一時過ぎだった。

あれから寮の同窓会があり、久しぶりに学生気分で楽しめたんだ。
三上も周りの奴らもリンの事には触れないでくれたから、それも
有り難かった。

みんな大人になり、そして優しくなっていた。人の心を尊ぶとは
ああいう空間なのかもしれない。

学生の頃には気づかないことばかりで、驚いてしまうと素直に白
状すると、みんな口を揃えて、「俺もそうだよ」と、笑った。

「そうか、良かったな、青弥」

「うん」

ひとりで晩酌を楽しんでいたのか、ほろ酔い加減の季史さんが機
嫌よくおれの帰りを待っていてくれた。

「そうだ。新鮮な鯛のさしみがあるんだ。鯛茶漬でも食おうか？」

「うん、食べたい」

「じゃあ、用意するから待ってる」

台所に立った季史さんにお礼を言い、何気なくテレビをつけてみ
る。

チャンネルを変えながらBSのCNNニュースで手を止めた。
何となくだか、リンの居る国の空気を感じたかったからだ。

流暢な英語に同時通訳が入ってくる。それも邪魔で通訳を消して
みる。

英語の意味はある程度、理解できる。

ニュースは政治から世界情勢、そして今日の特集へ移っていった。

それは突然だった。

金髪のニュースキヤスターが「The SIA prize with the author was won to Mr. rinichisukune, architect.」
と、話し出したのだ。

同時に画面に映し出されたのはタキシードを着たリンの姿だった。
そうか…今日、藤宮先生が話していたリンの受賞した話だ。

おれの鼓動が次第に早くなる…耳元で心臓が破れるぐらいに鳴り響いている。

息をするのも、瞬くのも忘れ、画面を凝視した。

特集は5分くらいのもので、リンの日常の仕事の様子と授賞式が主なフィルムだった。

久しぶりに見るリンは、すっかり大人になっていた。

気品や艶やかさは昔より増して、いくらか退廃的な影がちらつく色気のある眼差しが、リンの美貌と不思議に調和している。

映像はニューヨークのリンのアトリエを映し出した。

一面のガラスから光零れる洗練されたオフィスで、事務所の仲間達と…慧一さんが紹介される。

慧一さんも当たり前だが、とても綺麗な。リンと並んで映る姿も絵になっていた。

なんのしがらみもなければ、綺麗で素敵な兄弟だと思えるのに…心が痛むのは、おれの狭さなんだろう。

最後にリンの受賞式のメッセージが流された。

トロフィーを持ったリンが壇上で挨拶をする。

難しくない英語だったから、おれにもはっきりとわかった。

受賞の喜びと感謝を込めた言葉。

最後に…と彼は言った。

「この賞を僕を支えてくれた家族と敬愛するすべての人々に、そして Eternal lover に捧げます。ミナ、君にだ」
「…」

…おれは耳を疑った。

リンは「Eternal lover」と言い、カメラに向かって日本語で「ミナ、君にだ」と、言ったのだ。

そして、自分の左指にキスをしたんだ。

薬指には見覚えのある指輪が嵌められていた。おれと誓った指輪なのか。

おれは…もう…仰天を通り越して…気を失うかと思った。

馬鹿じゃないのか、あいつは！あんな恥ずかしいことを堂々とやってのける奴がこの世のどこにいる！

世界中に放映されるカメラに向かって…おれの…おれの名を…言うなんて…

「どうした？青弥。顔が茹でタコみたいに真っ赤だぞ」

「あ…な、なんでもない…ご、ごめん、季史さん。お、おれ、お腹一杯で…あ、の…絵、描きたくなったから、アトリエに行くよ」

「はあ」

「折角だから、鯛茶漬け食べてく」

おれはポカンとしている季史さんを尻目に急いでお茶漬けを？き込み、母屋を後にした。

アトリエに入り、パソコンを付けた。

インターネットの動画サイトで先程のCNNのニュースを探した。宿禰凛一で検索した方が早かった。

しかもリンの動画はいくつもあった。今までおれが全く気づいていなかったただけだ。

授賞式のリンのメッセージを探し、さっきの言葉を確認めた。

もしかしたらおれの聞き間違いかも知れない。おれの願望が目の前のテレビの画面におれの目だけに映っていたのかもしれない。

…だけど、違っていったんだ。

パソコンに映し出されたリンははっきりとおれに言う。

「Eternal lover、ミナ、君にだ」と。

あの頃と変わらないちよつといたずらを思いついたような顔で、おれをいとおしそうに見つめる目で…

おれは何度も何度も、リピートし続けた。

段々と涙で画面が見えなくなつた。

それでもおれは繰り返した。

それはリンの想いだった。

嘘じゃない。？つきじゃない。

リンは…おれを…ずっと、ずっと…

リン、君は…本当におれに純愛を誓ってくれたんだね。

見返りなんて求めていない。

ただ、ずっとおれを愛し続けてくれた。

ありがとう…ありがとう。

ありがとう…

3 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

3、

その夜、おれは捨てておいた昔のリンの肖像画を探し出し、そのカンバスをイーゼルに置いた。

おれが描き殴ったバツの印が生々しく残っている。

あの時おれはリンを詰り、今後一切リンを愛したりしないと、自分に言い聞かせた。

ヨハネで過ごしたあの三年間を、過去にしていまいたかった。

リンに捕らわれて生きることが苦痛で仕方なかったからだ。だけど、リンを忘れることなんて、できるはずもなかった。

おれに絵を描き続けることを導かせたのは、リンだった。

おれが絵筆を持つ時、いつだってリンの声が聞こえてくる。

「ミナは絵描きに向いてるよ。俺は、ミナの描く絵が好きだなあ」
口癖のようにリンはおれに言った。決して押し付けがましいわけでもなく、軽口でも叩くように繰り返していた。

リンの言葉は、おれの中に自信と言う小さな塊を少しずつ積み重ねてゆく。

おれが、今こうしてカンバスに向かいあっているのは、リンの所為に他ならない。

おれにとってリンは一番…一番描きたい存在だったからだ。

おれは今までに一度だって満足のいくリンを描いていないじゃないか。

リンを描きたくて描きたくて、おれはこの道を選んだんじゃないか。

リンが誰が好きだろうが、本当は関係なかったんだ。

おれは…自分が忘れ去られるのが怖かった。リンがおれをただの思い出にってしまうのが怖かったんだ。

恋は、他人を愛するってことは、相手を求めることだけじゃないはずだ。

おれが、リンを、愛しているのなら、それに区切りや果ては無いはずだ。

リンがおれを忘れてしまおうと関係ない。

リンが…それをおれに示してくれた。

おれがおまえを忘れても、憎んでいても、リンはずっとおれを想ってくれていた。

それはリンの誠意であり、自信であり、彼の誇りだ。

おれはテレビの向こうの彼が眩しかった。おれに愛を示してくれたリンがあまりにも凛々しくて、嬉しくて、同時に自分の不実さに恥ずかしさの余り、悔しくて仕方なかった。

…リン…、おまえはやっぱりすごい奴だよ。

おれはおまえへの想いだけは、おまえがおれを想うよりもずっと…ずっと深くて熱いものだと思っていたよ。絶対に負けないって思っていたのにね。

「リン、もう迷わないよ。おれの想いをキャンバスにぶつけなきゃね。いつか…おまえと会う時、ちゃんと顔を上げておまえに微笑みたいから…おれは、おれのリンを描くよ。おまえが手の届かないところに飛んで行くなら、おれは這ってでもおまえに辿り着いてやる。負け続けていられるもんか…なあ、リン。おまえはいつだってそう望んでいたよね。おれ達は対等に愛し合う恋人だって」

おれはキャンバスに絵筆を下ろした。

季史さん宅の庭は芝生で覆われている。

四季の草木も豊富で隣りとの境目の塀の代わりに花木が植えられ

ている。

ハクモクレンやキンモクセイ、カンツバキ。藤棚にはその季節ごとに枝を仕立て、縁台を置いて夕涼みを楽しんだ。

季史さんのご両親がこの家から出られて以来、放置されていた花壇も、おれが手を入れ、季節ごとに花を植え替えている。

「イングリッシュガーデンみたいだ。結婚式場にも提供するか？」
ブーゲンビリアのアーチの下で季史さんが笑う。

「土がいいんだよ。じゃなきゃこんなに育たないよ。それより、このコスモスみてよ。去年より、二倍以上は増えたよね」

「さすがは青弥だな。おまえ、どこで土いじりを覚えたんだ？」

「高校の時、温室の世話をしてたんだ」

「園芸部員だったのか？」

「…そうじゃないけど、ね」

三年間でリンと育てた植物は数知れない。

リンもおれも水遣り、草むしりから植え替え、種を取ってまた小さな芽が出るのを見とどけた。

おれ達はその生命に喜び、笑いあい、そして与えあった。

リンの手が触れる時、おれは恥ずかしさの余り、口唇を噛み、目を閉じてしまったけれど、おれの心も身体も喜びに満ち溢れていた。リンのささやきが、意気地のない引きこもったおれを大胆にした。あの時、おれは初めて自分を解放させる術を知った気がする。

あのシンパシーやエクスタシーは青春や恋という言葉だけじゃ語れない。満ち溢れたエネルギーだった。

エネルギー…情熱…おれはそれをおれの描くキャンバスに映し出さなきゃならない…

おれは展覧会に出す一連のテーマを「green house」と題した。

「見れば見るほどイイ男だな」

アトリエで絵を描くおれの傍らに立つて季史さんが呟く。

「それでも、実物には程遠いと思うよ。先輩が言うにはリンは…人間じゃないって」

おれの言葉に季史さんはクスリと笑う。

「青弥は俺の声がこのモデルとそっくりだと言ってたけど、似てるのは声だけだな。見事に完敗だ」

「そんなことないよ。確かに初めて季史さんの声を聞いた時は…驚いたけど、リンとはまるで違うもの」

「…喜んでいいのか、悲しんでいいのか…」

「だからあゝおれは季史さんとリンを比べたことないってことだよ」
「わかってるよ。青弥は俺の背にこの子を見たりしてないってわかってる。けどな、俺は…おまえを最初見た時…俺の声を聞いてポカンとなんとも言えねえ顔をした時な、いっぺんに好きになっちゃったんだ。だから…俺の声に似ているというこの子が、おまえを俺に導いてくれたのかもって…そう思ってしまう自分がある。本当なら、青弥を独り占めしているこいつを憎んでもいいんだろうけれど…」

「季史さん…」

「もし、これから青弥とこの子が…元の鞘に納まるとしても…俺に氣を使わないでもいいからな。青弥は自分の想いで生きていけばいい」

「…」

元の鞘か…そんなことありえないんだよ、季史さん。

だって、リンには慧一さんが、おれには…あなたがいるじゃないか。

そうだろう？

師走になり、二十日からの展覧会への期日が迫り、おれは飲まず食わずで絵を描き続けた。

展示する絵は油絵7点と植物を中心としたリトグラフ十一点だ。

どれも温室に関連させ、世界感を繋ぎ合わせた。

一番号数の大きい500号サイズの油絵を、聖ヨハネ学院の新しい教会堂へ贈呈することを、鳴海先生には伝えてある。

おれはその絵に「目覚め」と題した。

展覧会は、大学の協力もあり、宣伝も行き渡った所為か、こちらが驚くほどの盛況ぶりだった。

夏の同窓会がきっかけとなり、ヨハネの同級生たちもこぞって、観覧に来てくれた。

町田先生を初め藤内先生や藤宮先生。鳴海先生まで来られ、恐縮してしまった。

鳴海先生には教会に飾る「目覚め」を見て頂いた。その感想を聞くまではこちらは気が気じゃない面持ち、だが、こちらから伺う勇気なんてなかった。だって、どこからどうみてもその「目覚め」に描かれているモデルはリンでしかなかったから…

「いい絵ですね」と、鳴海先生は絵を見つめながら言った。

「孵化する前の幸福というものは、こういう表情をしているのかもしれません。水川君、あなたの七つの美德がこの絵から伝わってきますよ…是非この絵を飾らせてください。宿禰君も…さぞ喜んでくれることでしょう」

「ありがとうございます」

今、君がここに居たとしたら…

おれはやっと、胸を張って君の目を見つめることができるかもしれないよ、リン…

> i 1 4 7 7 1 — 2 7 3 <

展覧会の最終日、遅くなった昼食を観覧に来てくれた友人と一緒にカフェで取っていた。

昼食から帰ると、季史さんが慌てておれに近づいてくる。

季史さんは初日からずっとこの展覧会の為に先頭に立って裏方を引き受けてくれている。

「青弥、どこに行ってたんだ。何度も携帯に連絡したんだぞ」

「ちよつと昼飯を…あ、携帯マナーモードのままにしてたんだ。ごめん。なにか急ぎだった？」

「…来てるよ」

「え？」

「おまえが一番会いたい奴だよ」

「…」 誰のことを言っているのか、わかってしまふ。だけど…本当に？

「入って二十分は経っているから、見逃さないように出口から行けよ」

「…」

「何ばーつとしてんだよ。早く行って来い」

「だって…急に言われても…何話していいのか…」

「会いたかったって…言えばいいんだよ」

「季史さん」

「ん？」

「ありがとう」

季史さんは少しだけ微笑み、そしておれの背中を押した。

出口から回廊に入った。

この「七星会」の展覧会は7人がひとりひとりのテーマを決め、区切られたギャラリーを使い思うがままに展示している。おれの展示は最後のスペースのふたつのギャラリーだ。

はやる心を必死に抑えた。

走りたくなる足に言い聞かせ、殊更ゆっくりと歩いた。

リンがいる。

リンがおれの絵を見に来てくれている…

ああ、どうしよう。おれの絵をリンはどんな顔をして見ているんだろう。おれのリンへの執着を笑ってはいないだろうか…

二回目の角を曲がり、一番広い回廊へ出た。
何人もの観覧客がいる中、迷う事無くリンの姿を見つけてしまった。

黒いコートに包んだ身体からは、隠せないほどの鮮やかなオーラが立ち込めている。

正面の絵を見つめる横顔は非の打ち所も無いほどに端整で、見惚れるほどに美しい。

だけどおれは知っている。

自分を信じる強固な意志と、強烈な孤独の影と、繊細な優しさ…どれもがリンという人格を彩る。

少しも…翳ってはいないと、おれはほっとした。

静かにその影に近づいて行く。

リンとの距離が近くなる。

「リン…」

辺りに声が響かない程度に呼んでみた。

リンはゆっくりとこちらを向き、驚いた顔をする。

「リン」

おれはもう一度、名前を呼ぶ。

リンは笑った。

あの頃と同じように、少しだけ顔を傾け、優しく慈しむような顔で微笑んだ。

「ミナ、久しぶり。会いたかったよ」

彼はそう言っ、一步一步おれに近づいてくる。

おれはいつ胸が破裂してもおかしくないって…そう思いながらも、そんなことはありえないと笑う。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 1 \\
 & 4 \\
 & 7 \\
 & 7 \\
 & 2 \\
 & \hline
 & 2 \\
 & 7 \\
 & 3 \\
 <
 \end{array}$$

4 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

4、

向かい合ったおれ達は、何も言わずただ見つめ合っていた。

何か言おうと口を開けたら、リンがぱちぱちと瞬き、意味ありげに睨む。

…こういう時、こいつは大抵口クでもないことしか考えていない。それを責めると、「ミナは相変わらず、素直でかわいい」と、丸め込まれた。

六年前と少しも変わらない会話に、懐かしいとか嬉しいとか通リ越して、呆れてしまった。

しかもリンの態度は、きつちりとおれへのスタンスを保っている。計算なんてしているわけじゃなく、こいつはここどこかわかっているから、おれに触れようとしないんだ。

そういう隙のない配慮もやたら癪に障る。おれなんか、今にもリンの胸に飛び込んでしまいそうなのを全理性を掻き集めて我慢しているっっているのに。

いつものようにおれが手玉に取られていると、院生仲間の加賀谷が、村上教授が来ているから挨拶に来いとおれを呼ぶ。

この一大事にそんなもん知るかと、言いたいところだが、リンは別段気にした風もなく、「行っておいで」と、おれを送り出す。

せっかくの六年ぶりの再会をおまえは、おれ程感動してはいないのか？と、なんだか空しい気持ちになった。

だけど、おれを見送るリンを振り返った時、その姿を見た時、どうしてもこのままで別れたくないって思った。

だから、「後でリンに会いに行くから、待っててくれ」と、懇願した。

よくよく考えれば、リンの都合も考えないで強引過ぎる話だ。

全く以つて自分でも疑うほどの大胆さで…冷静になったら恥ずかしくなった。

先に行く加賀屋に追いつき、並んで歩きだす。加賀谷はおれをじつと見る。なんだ？と言うと、

「あれが、おまえの描いたモデル？」「うん」「すごいな」「え？」
「なんつうか…圧倒されるって感じ」「そうだろ？」「…付き合つてんのか？」「いや…高校生の同級生だよ」「…そうか」

美大生って言うのは、あまり他人のプライベートを詮索しない。と、いうか、作品のモデルとの関係は色々にややこしい話になりがちなので、お互いに突っ込まないのがルールだ。

教授との話も終わり、ギャラリーの入り口に戻った。ちょうど季史さんが居たからリンの事を聞く。

「ああ、あの子ならもう帰ったよ」

「…そう」

また会う約束はしたけれど、正直がっかりだ。

「おまえのリトグラフを3枚も買ってた」

「…そうなの」

少し…いや、かなり嬉しい。

「いい奴だな」

季史さんにそう言ってもらえて素直に嬉しくなった。

「うん」

「バーカ、嬉しそうにはっきり言うな。妬いてるんだからな」

「あ、ごめんなさい」

「仕方ないさ。あっちの方が先に青弥に惚れちまったんだからなあ」

「」

「…」

季史さんは感情を表に出さないから、本音は言葉でしか伝わらない。

リンとの決別をはっきり示したにも関わらず、こうやって今でもリンへの恋慕を抱いているおれに呆れているのかもしれない。もし…その事で季史さんがおれを嫌になったり、傷つけたりするのならおれは季史さんの傍にいたるわけにはいかない。

会場は五時に終了し、後片付けの力仕事に全員で勤しんだ。ある程度の目安がつき、後は明日運び出せるだけにした。

駅前のホテルでの打ち上げパーティが始まったのは午後八時。皆クタクタだったが、お世話になった方々へのお礼と感謝の挨拶回りに走り回った。だけとおれはリンとの約束があるから気が気じゃない。

一息ついたところで、季史さんがおれを会場の外へ連れ出した。
「なに？」

「宿禰さんと会う約束としているんだろ？」

「…うん」
「じゃあ、行つてこいよ。まだお開きには時間かかりそうだし、後の事は俺に任せとけよ。今、青弥に必要なのはあの子だ」

「季史さん」

「俺は青弥の素直なところが好きだからな。これからのおまえの為に、後悔しない道を選ぶんだ」

「おれ、季史さんから離れないといけない？」

「なんでだ？」

「だって…リンをこんなに想っているおれに呆れてるでしょ？…嫉妬してるって言ったじゃない。おれが今からリンの元へ行く意味を…季史さん、わかってるでしょ？リンがそれを望むかどうかはわからないけれど…おれは、もう一度リンを…確かめたいんだ」

「…青弥が諦めの悪い辛抱強い奴ってことは知ってる。だけど俺も、青弥に負けないほど諦めの悪い男なんだぜ？その上、歳取った分、ずる賢さも寛容さもある」

「…」

「美桜堂でおまえを待つてゐるっていう、言葉も用意している。おまえに惚れてるのは俺の勝手だからな、気にするな」

「…ありがとう」

「明日はクリスマスだし、サンタさんの気分になって青弥に特別休日をプレゼントしてやるよ…楽しんでおいで」

「季史さん…」

季史さんの胸に頭を持たれた。おれの肩を抱く季史さんの力強い手が嬉しかった。

「な？俺はずる賢いだろ？こつやって俺を裏切れなくしているんだぜ」

そうじゃない。そうじゃないよ、季史さん。あなたは本当に優しい人なんだ。あなたがいなかったら、おれはこんな気持ちでリンに向かいあう勇氣は持てなかった。

ありがとう。

電車に乗り、リンの待つホテルへ向かう。暗くなった道をリンへと急ぐ。

最後の冬、リンと過ごした御殿山のホテルだった。

おれはあの時、ただひたすらリンを信じて、一緒に歩ける未来を夢見ていた。

実際は、リンはあの時点で慧一さんと生きていく道を選んでいて、それを卑怯というのなら、そうかもしれない。

けれどリンはおれの為に高校卒業まで「優しい嘘」を突き通したんだ。勝手に夢を見ていたおれに、リンは付き合ってくれていた…と、考えたらリンに罪はない。

根本先輩が言ってたとおり、恋愛はどっちが悪いとか、正しいとか、そういう天秤に掛けるものじゃないんだ。

首もとのネックレスをマフラーを弛めて外した。鎖にはリンと誓った指輪が通してある。

あの時…リンを詰って庭に捨てたこの指輪を、季史さんが拾っておれに渡してくれた。

折角の思い出を汚しては駄目だと、言って…

でもね、季史さん。この指輪は…思い出にはならない、なれないんだよ。だって、今だってリンを想うだけでこんなにも胸が震える。

おれは指輪を左の薬指に嵌めた。

ホテルに着いたら、リンが出迎えてくれた。にっこりと微笑まれ会釈をするリンが、昔と変わらず王子さまみたいだなあと変な気がして、そこでまた頭を傾げてしまう。

リンに対してのおれの想いって、あの頃と少しも変わっていない。リンに案内されるままに、ホテルのスカイラウンジへ行き、リンが勧める料理を食べた。

ワンプレートのおードブルは色んな味が楽しめて美味しかったし、スズキのプロバンス風なんかかもやっぱり美味しい。

「美味しい、美味しい」と、馬鹿みたいに繰り返すおれを、リンは楽しそうに見ている。

そういや、リンと食事をする時って、いつもリラックスしてたようない感じがする。

会話の殆どが、高校を卒業してからの話で、お互いに見知らぬ世界の話に多いに聞き入った。リンのアメリカでの体験なんて、おれからすれば、映画みたいな出来事で羨ましいどころか、異次元すぎてリアルに感じない。

リンもおれの美大での生活にひどく興味を持ち、絵画制作の過程を詳しく知リたがった。

会話の勢いで、おれは一番言いたかったことをリンに打ち明けた。

「リン…今夜一晩、リンと一緒に居てもいい？」

「え？」

「確かめたいことが沢山あるんだ」

おれの言葉にリンは珍しく黙り込んだ。それは拒否の答えなのかとおれは判断した。

「いや、リンが嫌ならいいんだ。勝手に来て、変なことを言ってごめん」

「馬鹿、開き直るなよ。困っているんだろ？ ミナが本気で誘っているのか、ただ俺を試しているのか… 昔のミナは賭け事は嫌いだったが、そのワインの飲みっぷりじゃ、昔のままのミナとは思えない。もし、本気なら、正直に寝たいって言えよ」

「…ね… ね、寝た、くない、わけじゃない」

おれの言葉にリンは大声で笑う。

なんら変わらないリンの意地悪な言葉遊びに、本気でムカついた。こっちは必死なのに、なんて奴だ。

「リ、リンが嫌なら、別におれは…」

「嫌じゃないよ。ちょうどいいや。ここも閉店だしね。俺の部屋へ行こうか」

ムーディな蛍の光が店内に流れ、おれ達は立ち上がった。

リンの後を付いてエレベーターに乗る。

リンは昇っていくガラスの向こうの夜景を見つめている。いつものことだが、こういうリンは何を考えているのかわからない。

リンの部屋に通されて中をみる。

前に泊まった部屋と違ってダブルのベッドが中心の広い部屋だ。

「ひとりで泊まっているのに、ダブルなのか？」

「ああ、俺、寝相が悪いしな」

そっぴやリンと寝てて何度か蹴られたことがある。

「適当に座ってくれ。ワイン飲む？ さっき開けたばかりだけど、まだ半分も飲んでないんだ」

「もらうよ」

窓際のソファに腰掛けた。ガラス窓の向こうに広がるイルミネー

シヨンは、イブの為かいつもよりも鮮やかな気がした。

「つまみは？簡単なオードブルでも頼もうか？」

「いや、いいし…」

「酒を飲みに来たわけでもあるまいに…？」

意味深に横目でおれを見るリンが憎らしい。

しかし、

他の奴には絶対こういう気分にはならないのに、なんでリンにだけこんなにムキになるのか、自分でもわからない。

「べ、つに…リンがその気にならないのならこのまま話しているだけでもいいんだ。話したいことはいくらでもあるし…」

「俺はね、ミナ。迷ってるよ。ミナを抱きたいって…今夜一晩だけでも、ミナをめちゃくちやに可愛がってやりたいって、思うけど…自分の有様を振り返ると、ミナを抱く資格があるのかって…俺、ミナを別れてから随分と節操なく遊んでいたからね」

「慧一さんは…何も言わないの？」

「そりゃあ怒るし、叱りつけるけどね。慧は絶対に俺を許す。あれは俺なしじゃ生きられない人だもん」

「そんなの…リンの勝手な言い草だよ。慧一さんが可哀相だ」

「そりゃそうだけど、釈明させてもらうと、半分は仕事の為に寝てるんだよ。クライアントとの取引に有利になったりするしね」

「そう、なの…」

「まあ、ミナに聞かせる話じゃない。身売りしているわけじゃないし、嫌な奴とは寝ない。選ぶ権利を放棄した事もない。愛がないセックスにどういう価値があるのかは知らないけど、お互い楽しめればいいんじゃないかと割り切っている」

「そう…おれも、リンを責めれるほど綺麗でもないよ。…リンと別れて、男とも女とも寝てみたんだ。でもやっぱり全然夢中になれないし…感じないから、おれってどっかおかしいのかって…思ったこともある」

「それは…俺に責任がある。ミナをそんなにしてしまったのは俺の所為だろうから…でも、今は違うんだろ？」

「え？」

「恋人…いるんだろ？…櫻井さん？」

「なんで…知ってるの？」

「今日、おまえのリトグラフを買った時の売り子さんやってた男の人。なんでって…俺の声にそっくりじゃん。だからミナはあいつに惚れたなって、ね。ピンときた」

「こ、声が似てるから好きになったわけじゃないよっ！おまえはどこまでうぬぼれているんだよ」

「そうか？じゃあ、あの男のどこが良くて付き合っているんだよ」

「…どこがって…」

なんでそんなことを、こんな場所で、この状態で言わなくちゃならないんだ？目的から離れているんじゃないのか？

「リンと全然似ていないから、好きになったんだよ。リンみたいに意地悪じゃないし、一緒に歩いててもこっちが惨めにならなくて済むし、なにより季史さんは大人だから、おれが何をしても許してくれる…」

これじゃ…まるでリンにとっての慧一さんみたいじゃないか…

リンもそう思ったのか、少し悲しそうに微笑む。

「お互い、俺たちの相手は苦勞人だな。想う相手がやりたい放題だ…」

「リン、おれは…」

「純愛というものが肉体を求め合うだけのものじゃないならば、何故それを貫くことができない。純愛を証明する手立ては唯一それではないではないか…どっかの馬鹿な文学者がそんなことを言わなかったか？」

「…知らない」

「俺はミナを愛している。これが純愛なのかはどうでもいい。だが

この恋慕には充分な欲情がある。俺がそれを望んで…おまえがそれを求めるなら…それを制す意味など無意味じゃないのか？」

ベッドに腰掛けたリンがおれに右手を差し出す。その右手を握り締めた。

引かれるままにリンと一緒に、ゆつくりとベッドへ並んで寝転んだ。

見つめ合い、微笑みあった。怖いものなど何も無かった。

左指の指輪を撫でられる。

「…誓いは誓いでしかない。守られるべき約束などひとつもない。ただ…そこに、想いが宿るだけだ。…ミナを愛してる。偽りのない想いだけだ…」

リンの言葉に、涙が零れた。

> i 1 5 1 4 7 — 2 7 3 <

5 (前書き)

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768>
i

5、
何度達したかもわからない。

ずっとリンと繋がっていたい。望むものはそれだけだった。

この夜だけは、他の誰も関わらないふたりだけの空間に生きていたかった。

それを口にする、リンは「ミナの望むものを俺は与えたい」と、言う。

リンは昔よりずっと優しくなった。

やり方も欲情のまま、めちゃくちゃ責めるのではなく、偉大な包容力でおれを燃え上がらせるという余裕もあり、年月を重ねても、セックスでもリンには勝てないのか、と、思い知った。

だが、その優しさの感情は、おれの求める想いとは違う気がしてならない。

それを聞き出さなくて、おれはリンを問い詰めた。

「この六年間、おれはずっとリンを想っていたわけじゃない。本当はリンのことなんてもうとくに諦めてた。忘れてしまいたかった。この指輪もね、一度は捨てたものだ。…おれはリンを信じ切れなかった…」

サイドテーブルの淡い灯火が、リンの端正な横顔を影にする。

「…ミナは自分を責める必要はない。おれが悪いんだから。俺はミナを裏切ったんだから…」

「別れても好きな気持ちは絶対にリンに負けないって…言い切ったのに、一年持たなかったんだ。情けないよね」

「そうじゃないよ。ミナの感情は当たり前。俺だってね、おまえのことだけ考えて生きてきたわけじゃないさ。俺は…おまえへの負い目があるから…それに対する誠意つてものをさ…示さないと、俺自身駄目になってしまいそうで仕方なかっただけ。だから、大学で

の勉強も建築士への目標も、がむしやりに自分の尻を叩いて成し遂げるよう頑張ったんだ。ミナを捨ててまで選んだ自分の道を、諦めるわけにはいかなかったからね」

「…そんなに…」

彼は…おれに負い目を持っていたのか…

「そんなに、リンが気にすることじゃなかったのに。根本先輩が言ってたよ。恋愛にどちらがいい、悪いもないって。高校の時に聞いた時は、おれはその言葉の本当の意味をわかってなかったから、リンと別れる時に責めたりしたけれど、今になってしまえば、リンと付き合ってたって心から思えるから、そんな風にリンが自分を責めることはない」

「そうだね。俺を見守る誰もが、そう言う。だけど、俺にとって、ミナへの想いつてさ…ただの恋愛じゃなかったんだ。初めての…唯一の恋だったから、ミナを悲しませることだけは、本当に嫌だったからさ…ミナと別れるのが悲しかった。それも俺の都合であいう事になってしまったから、余計ね、心残り…」

「リン…」

まるで幼子のように小さく頑是無いリンを、どうして慰めればいいのか…

「慧一を選んだ事を後悔してない。さっきミナに慧一は俺無しでは生きられないって言ったろ？」

「うん」

「あれは逆も然りでさ、俺だって慧一無しでは生きてはいけない人間なんだと思う。ただ、それとミナへの恋慕っていうのは違う想いなんだね…ややこしいのさ」

「リン…おれは、リンがそう言うてくれるだけで…幸せだって今は、思えるんだ」

「うん」

おれが眠りにつくよりも早くリンは寝入ってしまった。

隣りに眠るリンから離れずに、窓から見える朝焼けをひとりで眺めた。

ゆっくりと昇る朝日を受けて、リンの身体の輪郭が輝きだす……その表情はラファエッロの描いたマリアのように無垢で清らかで見惚れながら涙が止まらない。

きつと……慧一さんはこんなリンを、ずっと……リンが生まれた時から見守っていたんだ……ずっと愛してきたんだ。

どれだけの愛をこの者に注いだのだろう。

その愛がリンをこんなに……尊くした。

「リン、……おまえを愛する人たちがおまえをこんなに輝かせるんだね。

おれの愛がおまえの中で輝き続けられるのなら……

いつまでもおまえに、愛を捧げるよ。本当だよ……」

翌日、遅い朝食をホテルのラウンジで取る。

あれからすっかり眠ってしまったおれは、先に起きたリンに起きられ、今日の予定を聞かれた。

「……展覧会の後片付けは、任せてあるから、今日は予定はないんだ。リンは？」

「俺は昨日で今年の仕事は終わった。後は鎌倉に帰って家族孝行かな」

「……両親、鎌倉にいらっしゃるの？」

「ああ、親父も定年した後、あのマンションにお継母さんと暮してる。つっても旅行が趣味なんで、海外や国内を一年中転々としてるよ。今年は半年間かけて豪華客船で世界一周クルージングなんぞしてさ……こっちは毎日仕事に追われて四苦八苦してんのにさあ……」

「いいね、船旅なんて一回でいいからしてみたい」

「あんなのなにもすることのねえ年寄りの道楽だぜ。やっぱりバイ

クで風を切ってU.S.ルートを突っ走るのが一番気持ち良い」

「おれもね、オートバイに乗って、日本の色んなところを走っているんだ」

「え？ミナがバイクに？」

「うん」

「意外だな」

「別れる時、リンがバイク免許を取るって言ってたから、おれも意地になって取ったの」

「相変わらず負けず嫌いなんだ」

「…リン以外には適応しないスキルだ」

「喜ぶところなのか？」

「喜んでよ」

「じゃあ、ニューヨークにおいて。横並びでハイウェイを走ろう」
「うん」

リンとの会話は、楽しかった。

これからもずっとこうしていられば良いのにと、何度思ったかもしれない。

「これからどうする？」

「へ？」

変な声になった。リンが言ったこれからの意味を取り違えそうになっってしまったからだ。

「俺は夕方に約束があるから、それまでは時間があるんだけど…」

そう…リンと一緒にいられるのは今日だけなんだ。

「じゃあ、ヨハネに行かない？」

「鎌倉？」

「そう。チャペルももうすぐ建て替えるんだろ？ふたりで最後に挨拶に行かないか？」

「うん。俺も仕事でちよくちよく行ってるけど、ミナと一緒になら、また違った感動も生まれるかもしれない。それに…」
「なに？」

「あの温室…壊すそうだから」

「…ホント？」

「うん、もう古いからね。教会と体育館の建設には関係ないんだけど、あちこちガタがきて、危なくなってるって。だから…行ってみるかい？」

「ああ…最後にさよならを言いたい」

それをリンと一緒に言える時、きっと俺たちは何かを超えることが出来るんじゃないのだろうか…

品川から急行に乗り、十一時には鎌倉に着いた。

高校までの道を歩き、あちこちの変わったもの変わらないものを指差しながら話した。

ふたりの距離は変わらないのに、横を向くと、あの頃よりは確実に大人になったリンを見つける。

先生方に挨拶をして、温室の鍵を貰いに藤内先生へ会いに行く。

「先生、こんにちは」

「おお、水川か。展覧会は無事に終わったのか？」

「はい、先日はわざわざ足を運んで下さって、ありがとうございます。おかげさまで大盛況で終わることができました」

「そうか、良かったな。まさか本当におまえが画家になるなんて、俺は思ってもみなかったが…宿禰の所為なのかな」

「ええ、たぶん…今日は宿禰も一緒なんです。温室が壊されるって聞いたから、一緒に見ようって…」

「ちょうど良かった。今日、あの温室は壊される予定になっているんだ」

「え？…そうなんですか…」

「元々使っていなかったからな…」

「はい…」

「めばしい鉢ものは、俺が移しておいたから、安心しろ。おまえら

が育てた植物もこれから大事に育ててやるよ」

「ありがとうございます」

「…コーヒー飲んでいくか？」

「頂きます」

藤内先生が炒れたコーヒーは相変わらず苦かった。

リンと過ごしてきた温室はあの頃と違って、寂れていた。

壁も柱も汚れていた。藤内先生が世話を続けていただけで、他の生徒達には見向きもされなかったらしい。

ほったらかしにされていた机の中に高校の時のペンケースを見つけた。

開けてみたら、思いもかけないものが見つかったりで、リンは笑うけれど、おれにはすべてが愛おしくてたまらず、大切にカバンにしまった。

「おれの大切な宝物なんだ…」

そうしておれ達は、壊れていく温室を見送った。

寂しくはあったけれど、悲しくはなかった。

おれもリンも時を駆けている。大人になる。歳を取る。

姿が変わってしまうのは当たり前だ。

変わらないものを探し出すのは…とても難しい。

完結（前書き）

以下の物語と連動しております。

宿禰凜一編「only one」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

宿禰慧一編「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100h/>

藤宮紫乃編「早春散歩」

<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

完結

> i 1 5 5 8 1 — 2 7 3 <

聖ヨハネ高校を後にして、高校の頃よくふたりで行った長谷寺へ向かった。

鎌倉には沢山の社寺があり、季節の花々は競うように美しく咲き乱れ、観光客を楽しませる。

事におれなんかその時々で、それを描き留めたくて仕方がなくなるから、リンとこの辺りを散策するとなると、必ずスケッチの為に時間を食うことになる。

リンはそれを咎めることもなく、また気にもしないように、おれが夢中で絵を描いている間、隣りで本を読んだり、音楽を聴いたり、「ちよつとぶらつとしてくる」と、言つて、適当に時間を潰してくれたりするから、こちらも気を使わずに思う存分スケッチが出来た。

思えば、あれもリンの思いやりなんだろう。今になって気づいた自分に少し呆れた。

長谷寺の高台にある見晴台から見る鎌倉の街と、その向こうに広がる海の風景もおれにとっては見慣れたものだった。

リンと一緒に時も、リンと離れてからもひとりで何回もここへ来た。

来るたびに感じるものは異なっているけれど、変わらぬ景色であり続ける有り難さも今のおれにはなんとなくわかる気がした。

だが、どうだ。今日ここでリンとふたりで眺める海と空の清清しさったら、絵に描きようもないじゃないか。

ひとり、惨めな気持ちでここに立っていたあの時のことさえ、良い思い出に笑い飛ばせる気がする。

おれはリンと再会してからずっと気になっていたことを尋ねた。
リンがおれに対して、別れた事への負い目を持っていると…感じていたからだった。

おれはリンの性格からして、そんなことを気にするタイプではないと思っていたから、再会したリンが常におれに気を使い、自分を責めているような表情をふと浮かべたりするのが気になって仕方なかった。

おれへの愛情が自分が離れた負い目から来るとは思えないが、もしそんな気持ちがあるのなら、おれだってそういう目でおれを見て欲しくない。

だから、「全部許す」と言った。

おれはリンに幸せになつて欲しいって願っている。

これだけは間違いない真実だし、その為ならおれに出来ることはなんでも…と、思ってしまう。

そう思わせてしまうものがリンにはあるんだ。

おれがこれだけリンに拘るのだって、ただリンが愛していると言ってくれたからだけじゃなく、おれがリンを愛して、彼を誰にも渡したくなくて、おれのものにしたいくて…

だから、おれは…絵を描き始めてんじゃないのか？

結局、おれだってエゴイストには違いないんだ。

生まれた時からリンの傍にいて、彼を育てた慧一さんがリンを愛した事を、血が繋がっているからと誰が咎めることができよう。

慧一さんにとっての宿命の者がリンだったってことだ。

そして、おれにとっても…リンは…ただひとりの…

「それで…俺たちはこれからどうするんだ？」

慧一さん以外とはセックスなどしてくれるな、と言うおれの横暴な願いを、リンは素直に聞き入れてくれた。

「俺の想いは変わらない。だが、ミナは慧一を悲しませたくないと言う。なら、俺とミナの間にもセックスは存在してはいけない…」と言っ風にも捉えられるんだが…ミナはそれを望んでいるのか？それとも…過去を慈しむ友達として、付き合っていく？」

どんな顔を見ても見惚れるほどのきれいな顔で言うリンの言葉は、許しを得た所為か、容赦がない。

結局はそれが問題なんだ。

おれ達が今後、どう付き合っていくのか…

住む所は違えても、これからだっておれとリンが会う機会はあるだろう。

お互いにパートナーだっている身だし、大概大人なんだから、よく考えるまでもなく、普通の友人として付き合っていくことが最良の選択であるはずだ。

…おれとリンが友達になる？おれとおまえの間に、一度だっ友え人だったことがあったか？

じゃあ、これからもこういう秘密めいた関係を持ち続け、優しい人たを傷つけても愛し合っているのなら仕方がないと開き直り、恋人として続けていくのか？

それとも…全のの見知らぬ者同士に？

黙りこんだおれにリンは何も言わなかった。

しばらくして咳をひとつしたリンは、おれの手を取り「海に出よう」と、歩き出した。

そのままリンはおれの左手を握り締め、自分のコートに突っ込んだ。

「手袋忘れたからな」こうしてる方がお互いあったかい」

「うん」

境内にも道すがらにも人目があった。

だけど、リンはおれの左手を離そうとはしなかった。おれも、離したくなかった…

海沿いに出て134号線の歩道を歩く。

頬を撫でる潮風も、雲ひとつない天気の所為か、じんわりとあったかい気がした。

「ミナのご両親は元気？」

「うん、元気だよ。親父はまだ現役だけど、母さんは社交ダンスに嵌ってね。休日は父さんも借り出されて、レッスンにつき合わされている。映画の影響だね。相変わらずミハーな母親だ」

「良い事じゃないか。理想の夫婦だよ」

「だけど…おれは両親に何も残してやれないから…少し、罪悪感を感じるよ」

「さつき罪をすべて許すと言ったミナにしては、弱気だね」

「だって、おれの後に残す家族はいなくなるんだもの。責任を感じてしまうよ」

「戸籍上の家系を継続させたいのなら、簡単だ。気に入った奴でも親戚の子でも養子にすればいい。ただ、家族の継続とは何か…と、考えると…」

「…と？」

「なんの意味もない。血族を繋げたいから？財産を継承させたいから？それになんの意味がある。もし、誰かに譲りたいものがあればそうすればいい。それが継承だ。もし血を繋ぎたいなら、色々な方法を講じて子供を作ると良い。家族の解釈も多種多様だからね。だけど、俺は、結局は絆だと思う。相手を思いやる愛情だよ。おまえが言った許しだよ。それがあれば、家族は幸せだ。もし途絶えても、誰がそれを恨むもんか…おれはそう思うよ」

「…」

「それはそうと少し喉が渴いたな…どっかカフェ…あ！見ろよ。ミナ…」

「すごい綺麗…」

正面の青空に浮かんだのは、上半分を真っ白に薄化粧した富士山だった。

「絶景だねえ〜さすがにここは有名処だ。いつ見てもべっぴんさんだ」

「リンは相変わらず変に親父くさいところがある」

「そうか？」

海沿いのカフェで、ケーキセットを頼んだ。

リンはさっきの言葉を忘れたかのように、他愛無い話でおれをリラックスさせている。

「ミナは落ち着いたね。季史さんって人の影響かな…ちょっといや、かなりム力つくけどね」

「そう…か？」

「だって、おまえが俺とその季史って男とのセックスを比べたりしてると思ったらな〜」

「そ、そんなことしてないっ！」

なんてことをさらって言うんだ。周りに人がいないからいいよなものの…

「大体…季史さんなら、絶対そういうことを言わない」

「ほら比べてる」

「くら、べてない。そういうことを言うリンが子供なんだ」

「はいはい、どーせ俺はガキですよ。ちえ、昨日、本人に嫌味のひとつでも言っておきや良かったかな」

「季史さん、リンの事褒めてたよ。いい奴って…」

「何も知らないくせに？」

「季史さんは人を見抜く力があるんだ。だけど…リンの言うとおり、おまえに声が似ていたからあの人に惹かれたのかもしれない。おれにはリン以外に愛する者を知らなかったから、リンにどこかしら似ている人を知らず知らずに探していた…」

「…ミナは大人になったね。世辞も上手くなった」

太陽が少しずつ西へ傾いていく。暖かった空気も次第にあるべき冬を取り戻しつつある。

楽しい時間はいつだってあっという間に過ぎるものだ。

おれは藤沢へ、リンは鎌倉へ戻ることに、江ノ電の稲村ガ崎駅で別れる事にした。

プラットホームに立ったおれ達はたった今発車したばかりの電車を見送った。

「間に合わなかったね」

「12分待てば来るよ。…あ、おれの方が一分早いや」

「じゃあ、ミナを見送るのは俺の方だ」

時刻表を確かめた後、ホームの端まで歩いた。

電車を待つ人は、今は誰もいない。

絡められたリンの手から、そつと自分の手を緩め、リンのコートのポケットから出した。

リンはおれの顔を見つめる。

答えを…言わなきゃならない。わかっている。わかっているのに声に出せないでいる。

おまえの顔をまともに見ながら言える訳がないじゃないか…

「リン、さっき問いに答えなきゃならないね」

おれは少し俯いたまま、言葉を探す。

「今、無理に答えを出さなくても良い」

「無理じゃない。それに今、出さなきゃならない大事なことだ」

「…うん」

コートから手を出したリンの指輪が見えた。

「おれは…おまえを友達として見た事は一度もない。だから…今更友達としておまえと付き合うことなんてできない。…おれはおまえを愛している。これからだってずっと好きでいられるって、今は思えるよ。でも先の事はわからないよね。それでも…どうしてもおまえを愛せなくなる自分が想像できない…」

今だって、こんなに…ドキドキしているんだ。まるで初恋の人に会ったみたいにさ。そんなの、おまえにしか感じない。いくらおれにとつて季史さんが大切な人でも、胸が鳴るなんて…ないもの。

好きだからあんなに抱き合っだし、愛があるからあんなに気持ち良かったんだ…この『愛』を他の呼び名に変える事なんかできない」

「うん…」

「でも現実にはおれとおまえは一緒に歩けない道を選んでしまった。それを、不幸なんて呼びたくない。だって…今だって、おれ達はこんなにも幸せな気持ちでいられる。そうじゃない？」

「ああ…そうだよ、ミナ」

「だから、リン…おれ達、『奇跡』を目指さないか？」

「奇跡？」

「鳴海先生がおっしゃったんだ。『純愛』を貫き通すのは奇跡だって…ねえ、もしおれ達が魂だけを繋げる愛を貫き通したら…『純愛』って…子供だましで馬鹿馬鹿しいって一笑されるかもしれないけれど…リンとなら、見れそうな気がするんだ」

「…『奇跡』を探し出す旅に出るってわけか？俺とミナには相応しい冒険かもしれないな」

「え？」

「ほら、アラビアンナイトさ。千夜一夜物語の一夜は俺たちで創るものだって話したろ？」

「ああ…ああ、そうだよ、リン。おれ達で…ふたりで、きっと…」

「ありがとう、ミナ。俺はあきらめないよ。執念深いのは今度のこととで証明されたからね。遅れないようについて来い」

「おまえこそ、道草食って迷子になったりするなよ」

「じゃあ、しっかりと手を繋いでおくれよ…最後までずっとね…ミナ」

「…うん、リン…ありがとう」

藤沢行きの電車がゆっくりとホームに入ってくる。

まだ離れたくない。別れを言いたくない。

ずっとずっとリンと一緒にいたい。

「リン、あの、あのね。前に言っただろ？おまえの絵を油彩で描いて、おまえにやるって」

「ああ、そっぴやそんなこと言ってたね」

「あれね、展覧会で展示していた『GLORIA』って、言う作品だったんだ」

「そう…あれだったのか」

「あの絵にはおれのリンへの想いがいっぱい詰まっちゃってね。

リンに渡せなくなった。ゴメンね」

「いや、いいよ。ミナに持ってもらったほうが、俺も嬉しい」

「おれはあの絵を一生描き続けるつもりだよ。リンへの想いの証明として、死ぬまで手放さない」

「…ありがとう」

「リン、頼みがあるんだ」

「ミナ、もう乗らなきゃ…」

構わない。これに乗らなくなつて、また12分後には来るんだから…」

「あの絵のように…笑っておれを見送ってくれないか？」

「…了解、ミナ」

その次にだつて、そのまた次にだつて…

だけどおれの足は勝手に電車のドアをくぐり、身体は車内へ引き込まれた。

「リン…リン…また会える、よね？」

リンはおれに近づき、そっと頬を撫でた。

「当たり前だ。いつだってどこへだって、おまえが呼べば俺は飛んでくる。信じる」

「冒険はひとりじゃできないもんね」

「そうさ。ミナと一緒にじゃなきゃ意味がない。だからまた逢う日まで元気で」

警笛が鳴り、ドアが閉まりだす。

「リンも…」

「うん…ミナ、愛してる」

ドアの向こうにリンの顔がぼやけて見える。

ガタンと動き出し、俺はガラスに張り付いて、リンを追った。手を振るリンが見える。

…笑うリンが見える。

あの笑顔のリンがいる…

藤沢の駅で帰りの電車を待つ間に、電話をした。

「季史さん？」

『青弥か』

「今日はごめんね。荷物片付けるの大変だったでしょ？」

『いや、割とスムーズに運んだんで、昼前には終わったんだ。おまえの方は…どうなんだ？』

「うん、今からそっちに帰るとこ」

『じゃあ、夕飯間に合うな。何が良い？』

「クリスマスだからね。やっぱり鍋でしょ」

『じゃあ、焼き焼にでもするか』

「いいね、おれ、ケーキでも買って帰るね」

『ああ、待ってるよ』

「…季史さん」

『ん？なんだ？』

「…ありがとう」

『ばーか、下らん事言ってねえで、早く帰って来いっ!』
「うん、じゃあ後で…」

携帯をしまい、左手の指輪を外し、元のように鎖に通して、首に下げた。

西の空が少しづつ赤く染まっていく。

おれはそれを仰ぎ見る。

太陽に向かって、ゆっくりと一羽のとびが飛んでいく。

これからも続いていくおれの人生で、変わらずにいるただひとりの愛する者へ…

おれは、おまえの幸せを願い続ける。

おまえと生きていける喜びを感じて…

「リン…愛してる」

ああ、そうだね。世界は、こんなにも、美しい…

「GREEN HOUSE」 水川青弥編 完結

> i 1 5 5 7 9 — 2 7 3 <

完結（後書き）

水川青弥編はこれで終わりです。

拙い物語を読んで下さった皆様には、長い間ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724i/>

愛しき人へ...

2010年12月21日15時55分発行